

〔小町誦〕チラシ春、花「ぬすびへき花に心の垣もなし」定観〔俳言集覽〕

心は丸く瓜は角〔全〕

心は心として事たらず〔全〕

乞食も世界よかれ〔毛吹草〕〔和漢古體〕

乞食に種なし〔故事要言〕

乞食の大連〔俳言集覽〕

乞食の斷食〔全〕

乞食の友ゑらび〔全〕

乞食の米をこはしたやう〔全〕

乞食小屋へ富籤の落たやう〔全〕

乞食も朝祝ひ、〔全〕

乞食の麥さらひ

言葉に花を咲かす

〔雲仙雜記〕云。張祐苦吟。妻奴子喚不應。以責祐。祐曰。吾方口吻生花。豈恤汝輩。〔本朝俳諧〕

言葉多ければ品少なし。○ことば多きは品すくなし。〔毛吹草〕〔和漢古體〕

〔源氏河海抄〕に辞多品少とあり、品とは威儀の品節なり、凡詞多く、急に軽々しく物言ふ者は、品節少なしと云事なり、〔易大傳〕に云、吉人之辞寡、躁人之辞多、〔論語〕○〔俳言集覽〕に云、しなは信の詭にあらざるや、老子云、信言不美、美言不信、善者不辨、辨者不善といへり〔愚按〕此の説是に似たり〔韓詩外傳〕にも口慧之人寡信、〔六帖詠草〕に小澤廣庵「ことのはの多かるよりやれのづからまことすくなき罪やうくらん」など云ふにかなへり、言葉の下に骨をけす

〔太平記多々良合戦〕「言の下に骨を削、笑の中に刀を研ぐとは、此頃の人の心也、〔俳言集覽〕

言傳とくびすばは直にはらぬ〔世語盡〕

言葉は國の手形

ことばの先を折る〔毛吹草〕〔全〕

〔小町誦〕春、花「先折るな人の詞の花さかり」〔俳言集覽〕

詞は立居をわらはす〔世語盡〕

言の泄るは禍の媒也

〔太平記〕僧徒六波羅召捕、事の洩易きは禍を招く媒〔全〕

言語道斷

〔法華經〕ニ出たり又朱子陸象山の事を稱して言語道斷心思路絶と云へり〔釋尊〕

言語に絶す

〔說文繫傳、上字注〕由此以察、則妄爲奇絶、浮俗則絶于言語焉、〔便語集覽〕

ごまのやう 五魔業

〔法華經五卷〕にも、五陰魔、煩惱魔、死魔あり、此外に惡魔、天魔あり、此等の五魔の障碍を

なす業報あつて、ことむつかしさを五魔の業と云ふにや〔釋尊名物考〕

五月子はやしなはず

齊の田嬰が賤妾に子あり、田文と名く、五月五日に生る、田嬰忌て、其母に命して、かまへて育ふ事なからしむ、其母ひろかに、之を育ふ、成人するに及て、兄弟を頼て、田嬰にまみえしむ、田嬰怒りて、我汝をして、此子を捨しむ、然るに之を育ひしは何るや、其時田文頓首して曰、今君五月の子を養はざる事は、又何の故ぞ、田嬰曰、五月の子は、其子丈戸とい

としければ、父母を殺す、田文答て、然れば則人生れて命を天にうくるか、命を戸に受るか若必命を戸に受けは、其戸を高くすべし、人誰かいたらんといへり、田文後位に昇る、之を孟嘗君とす、かくれなき人なり、又漢の王鳳、漢の胡廣、唐の崔信明、いつれも此日生れたる例しあれども、後には皆大位にのほれり、〔世語支那章〕

五文取の一里追

五文取は餅の名、駿河阿部川驛に、五文取の餅の名物あり、〔便語集覽〕

五穀は民の汗〔世説故事苑〕

〔古文前集〕李紳が憫農詩云、鋤禾日當午、汗滴禾下土、誰知盤中飧、粒々皆辛苦、五十歩百歩

〔孟子〕孟子對梁惠王、王好戰請以戰喻、填然鼓之、兵刃既接、棄甲曳兵而走、或五十歩而後止、以五十歩笑百歩何如、王曰直不百歩耳、是亦走也、五七の雨に、四ツ早、八ツ六ツ風に、九の病ひ

是は地震の時刻によりて、其兆應を知る事なり、子午の時を九ツとし、丑未を八ツ、寅申を七ツ、卯酉を六ツ、辰戌を五ツ己亥を四ツとす、

五兩で帶買て三兩でくける。

胡馬北風にいばふ〔毛吹草〕同之

〔文選〕二十九。古詩云。胡馬依北風。越鳥巢南枝。是は、胡馬は北狄の馬なれば、北風をま
たひ、越鳥は南國の鳥なれば、南枝に巢ふ、皆其本を忘れざる喩也〔釋〕

胡椒丸香〔毛吹草〕同之

〔朱子語類〕云。大凡讀書。須是熟讀。熟讀了自精熟。精熟後理自見得。如喫果子一般。劈頭
方咬開。未見滋味。便喫了須是細嚼。教爛。則滋味自出。方始識得這箇是甜是苦是辛。始爲
知味。是果を喫する事を喩として、義理を咬み砕いで、味を知るへしとなり、誠に世話の、
胡椒丸のみと云事、故ある哉〔全〕

胡蝶の夢

〔莊子逍遙遊〕云。莊周夢爲胡蝶。栩栩然不知周之夢爲胡蝶。胡蝶之夢爲周。〔堀川百首〕「百
とせは花にやとりてすこしてさ此世はてふの夢に有ける」〔全〕

胡蝶の夢の百年目〔世語集〕同之

人の一世を指して夢に喩る事、佛説に出て、如夢幻泡影、如露亦如電など云ひて、百年の齡

と云へども、能く久しからずとねもふは、人情の常なれば、死期既に來りて疾病なる時、始

めて驚き、曾て道を行せざりし怠りを悔るの類をいふ、〔故事要言〕

胡麻の遅蒔赤豆の速種〔胡麻ハ早きをよしとしあつきは遅きをよしとす〕〔世語集〕

胡麻胸亂

菓子の名也、外貌斗にて、中に物なきと云、〔五代史〕。安叔干狀貌堂々。而不通文字。所爲

鄙陋。時人謂之沒字碑。〔全〕

ごまの灰

護摩の灰也、さるを無賴の徒に呼ぶものはこそもて人をだまして錢貨をむさぼりしよりいひ
出たるなるべし〔倭訓栞〕

訥摩堂の本尊の雨に逢ふが如し〔世語集〕

小茄に年の寄たる如し〔世語集〕

小僧と障子ははるほどよい〔世語集〕

小僧に天狗が七ッ附いてゐる〔全〕

小男一人が猫千疋にむかふ〔全〕

小男にはこまらぬが入口にこまる。〔全〕

小娘と小袋は油断がならぬ。〔全〕

小船に荷の過たるが如し。〔毛吹草、和漢古語〕

〔唐話纂要〕小船不堪重載、深徑不宜獨行、後悔先にた、ず。〔毛吹草〕〔和漢古語〕同之

〔山警策〕云、可惜一生空過、後悔難追、〔本朝俚語〕○〔菜根談〕飽後思味、則濃淡之境却消、

色後思嬌男女之見盡絶、故人々常以事後々悔悟、破臨時之痴迷、則性定而動無不正、〔吾吟我

集〕前かたをさうさうにゆひし垣根もやはやく破れて後くいとなる

後悔は平日の油断

〔宋寇萊公六悔銘〕云。官行私曲失時悔。富不儉用貧時悔。藝不少學過時悔。見事不明用時悔。

醉後狂言醒時悔。安不將息病時悔。此銘可以爲終身之用也。

後生願は、西枕。〔俚言集覽〕

後生願ひと栗の木柱に直きものなし。〔全〕

後生大事。〔全〕○後生大事や金はしや死ても命のゐるやうに

ころはぬ先の杖。〔民のかまど〕

ころんだ所で金をひろつたやう

〔倭訓栞太平記評判〕ころびたる所にて沙金拾ひたる風情。〔俚言集覽〕

ころんだら起きよ。〔全〕

ころんてもたゝはおきぬ。〔全〕

ころんても土を掘む。○受領はたふるゝ所に土を掘む。〔本朝俚語〕

コケテモ砂ヲツカメども云。〔史記貨殖傳〕魯人俗儉嗇、而曹邴氏尤甚、云云、家自父兄弟

約、俯有拾仰有取、有拾即有取、師古註、頽古俯字也俯仰必有所取捨、無鉅細好惡也、〔全〕

碁勢弓力。〔毛吹草、和漢古語〕○〔勢一作聖〕

碁に負たら象棋でかて。〔俚言集覽〕

碁が強ければ象棋も強し。〔全〕

碁盤の足は碁子に象る

碁盤の足は碁子シナシに象とれるもの也といふ碁子は口無の義にて助言を戒めたる也。〔説文〕局字

注促也从口在尺下復局之一博所以行棋象形、徐鍇曰、人之無涯者唯口、故在尺下則爲局、博

局外有垵埒周限也、是梔子に象れると同意也、〔全〕
恭に凝ては親の死目にあはれぬ

園基は消閑の具にして無聊を慰むべしと雖ども、讀書の人劇務の人には最も禁すべきものなり、管に貴重の時間を空費するのみならず、之に耽る時は往て機を誤り大事を逸することあり、是諺あるに所以なり、

戀のうた又貧の盗み戀の歌〔毛吹草〕
戀の山にはくしのたれ

〔倭訓栞〕源氏に、戀の山には孔子のたふれと云事見えたり、花鳥にむかしより云草にひひ傳へたりといへり、抄にクシノタレハ孔子の仆也、俗に龍のつまつさといふに同じと見ゆ、〔全〕
戀の病に藥なし

〔職人盡歌合〕卅四「あはれ我戀の病ろ藥なきうき名ばかりと立ものにして」〔全〕

戀は曲者〔全〕

戀に上下なし

御所内裏の事も蔭では言ふ〔毛吹草〕

御所の御成はすはく半時〔全〕

〔尤草紙〕運き物の品々に、御所の御成はすはく半時〔毛吹草〕「日の出はすはく半時御所足」

御扶持の無力〔世語盡〕

御免われ兵庫の者

〔世語盡〕「御免われさうなら目もひきはせず」と云句に「兵庫の怨ははるるぞうま」〔毛吹草〕世語、「御免われ兵庫の月に秋の雲」愚案是を聞けり、昔平相國清盛、兵庫の築島を作られし時に、人柱とて、行路の人を捕へて海に入れて築立しめ給へり、兵庫の者は免されしによりて、他國の者詐りて兵庫の者なりといひしとなり因て此諺ありとぞ、〔倭言集覽〕

御祝儀は千年

駒に角のはぬるまで〔毛吹草〕和漢古語「か之部からすの頭の條參看」

駒の朝走り〔民のかまど〕

駒のつまつさ

〔倭訓栞〕人に戀らるれば、乗たり駒のつまつさくもの也といへり〔倭頼集〕「くちぬらん袖そゆか

し我駒のつまづくたびに身をもくたげば
氷を鏝め水に書く〔毛吹草〕〔和漢古語〕同之

〔山谷詩〕鏝氷文章費工巧、註鹽鍊論云、内無其質而外學其文、若畫脂鏝氷、費日損功〔同〕
氷は水より出て水より寒し〔毛吹草〕〔和漢古語〕同之

〔荀子〕云、學不可已、青出於藍而青於藍、氷生於水而寒於水〔全〕
氷に塗下駄〔俳言集覽〕

粉糠にも根性〔世語彙〕
粉糠三合持つなら入簞になるな〔民のかまど〕

粉糠もかめば甘くなる〔全〕
蒟蒻の糖をつきたるやう〔俳言集覽引森寺玉山書〕

蒟蒻の市に立つ如し〔世語彙〕
蒟蒻の幽靈〔俳言集覽〕

こゝをふんだらあることがあからう〔全前森寺玉山書〕
こゝまでござれあまざけ進ぜよ

〔南瓜咄〕昔さる人の云、友たちには相應したる友を求めたるがよきと云事に、古人云、君子交淡如水、小人交甘如醴と、それより子供の友たちとかたらひて、愛までござれあまざけのませう

と申されし〔俳言集覽〕
こゝどいへはかしこどどる〔全〕
こけの一心〔全〕
こけはどれろろしいものはない 又こけてふどいほども〔全〕
こけをしみ〔全〕
木のもとに雨もる

〔日本靈異記中巻〕三條如持樹漏雨〔兼盛家集〕「天の原おもへはかなし人しれずたのむ木のもと雨もりしより」〔空物語〕 木のもとに雨たまたぬ〔賀茂保憲女家集〕「しぐれゆゑわか立よれば木のもととはたのむかたなく成にける哉」〔皇朝書談〕
木のもと涼しけれども蟻のさしに居られず〔民のかまど〕
木かげに臥す者は枝を手折らず

〔韓詩外傳〕云、食其食者不毀其器、蔭其樹者不折其枝、〔本朝俚語〕

故郷には錦をかざる〔和漢古語〕同之 ○錦を着て郷に歸る〔に之部參看〕

〔史記項羽本紀〕云。富貴不歸故郷。如衣繡夜行。誰知之者。漢書繡作錦。師古曰。無人見之。

不榮顯矣。〔南史劉之通傳〕。令卿衣錦還郷。〔後選集〕。眼人不知。紅葉はをわけつゝ行は錦着

て家に歸ると人や見るらん〔麗草〕

故郷忘れ難し〔毛吹草〕〔和漢古語〕同之

〔禮禮言〕云。君子樂其所生。禮不忘其本。古之人有言。狐死正丘首仁也。吁人而忍忘故郷耶〔全〕

こがねを鑲め玉を磨く〔美麗を飾るを云〕〔故事要言〕

こがね刀もこふて見よ〔毛吹草〕

紺屋の白袴〔本朝俳諧〕同之 ○こがねの白袴〔和漢古語〕

上巻 紺屋の白袴といふ諺今もいへり、是ふる諺なり、〔山の井卷之四〕〔慶長〕「わらにふる

雪や紺屋の白袴」と云ふ句あり、〔崑山集〕「此句をのせて、貞徳の句とわれは、

ふるき事なり、案に當時の紺屋は、常に袴をはきたる故に、此諺もありしならん、今の世盲

人猿回はしなどの、常に袴を着ると、遊女の常に打掛を着るなどは、往昔の威儀のなごりな

るへし〔骨董集〕 ○〔鄒子〕屠者食菹菜、造車者多步行、鬻扇之翁手隨暑、賣妓之夫恒獨處、

紺屋のあざつて〔毛吹草〕〔和漢古語〕 ○紺屋のあざつてやのあざつて

〔吾吟我集〕「常もなき人は紺屋のあすあすてあひそめん日をのびくにする」

こまめのはぎしり〔民のかまめ〕

こまめのとこまじり〔俳言集〕引藤寺玉山書〕

こみ鏡にろり鎌〔俳言集〕

こみみ女にろり男〔全〕

こはれざいほひ〔毛吹草〕

こはるゝばぶつのはかばぶつ

こはいもの見たし 又怖いものは見たがる臭い物はかきたがる

〔王君玉雜纂〕又愛又怕〔俳言集〕

こはい顔すりや正月とおもへ〔全〕

火燧兵法〔全〕

火燧辨慶〔全〕

虎口の難を脱る

〔史記叔孫通傳〕。我幾不脱於虎口。〔續朝儀〕
琥珀座をすへとも穢るるを吸はず、磁石針を吸へとも曲れるを吸はず、

〔三國志〕云。琥珀不取腐芥。磁石不受曲針。〔釋草〕
聲なくて人を呼ぶ。○聲なうて人呼ぶ。〔毛吹草〕

〔史記李廣傳〕。桃李不言。下自成蹊。是徳ある人は言説をからずして人おのづから歸服する
險なり諺こゝに本つげり。〔全〕
こまろし時に手を搏つ

〔後漢書四十一〕。龐參傳上書云、方今西州流民擾動、而徵發不絕、水潦不休、地力不復、重
之以大軍、疲之以遠戍、農功消於轉運、資財竭於徵發、田疇不得墾闢、禾稼不得收入、搏手
困窮、無望來秋、百姓力屈、不復堪命、注兩手相搏言無計也。〔類聚名物考〕
こみに酔た鮒

〔毛吹草〕。酒ならぬこみに酔てや紅葉鯛。〔類聚名物考〕
鯉の瀧のぼり

〔幸氏三秦記〕云、河津一名龍門、水險不通、魚鼈之屬莫能上、江海大魚薄集龍門下數千、不
得上上則爲龍也、〔後漢書五、李膺傳〕。是時朝廷日亂、綱紀頽弛、膺獨持風裁、以聲名自高、
士有被其容接者、名爲登龍門、註龍門河水所下之口、在今絳州龍門縣、〔類聚名物考〕
飯のわたを娘にくはせ。〔鮒こち〕〔牛尾魚〕〔類聚名物考〕
こちの負先ではなす。〔全〕
好む所の小薙刀。〔世語盡〕
柱に膠する

〔史記〕簡相如云。王以名使括。若膠柱而鼓瑟耳、括徒能讀其父書傳。不知合變也。〔釋草〕
此の世は逆旅

〔李太白春夜宴桃李園序〕云。夫天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。而浮生若夢。〔俊成五
社百道〕。〔5〕つこをも旅ならすやはおもふへきうき世ばかりのやとこころさけ。〔本朝儀〕
江南の橋江北にうつせは。〔カサチ〕〔カサチ〕なる

〔周禮〕云。橘踰淮北爲枳。〔說苑〕云。晏子曰。江南有橘。齊王使人取之。而樹之於江北。乃
爲枳。所以然者何。其土地使之然也。〔全〕

狐・狼・野・干

二九十八

四字連続、「法華經」に出たり、野干と狐と同じからず、野干は形小く尾大なり、能木に登る、狐は形大にして、木に登る事能はず、「祖庭事苑」云。野干梵云悉迦羅。又名夜干。或名射干。

聲如狼。〔藤原〕

こせの日高〔民のかまき〕

こつては思案にあたはず

衣を染むるより心をろめよ

米をそまつにすると眼がづぶれる

事がな箇 ○ 事がな箇ふかん〔毛吹草〕〔和漢古語〕

〔盛衰記卷十八〕さなきだに、事がな箇ふかんと思ひける、北面の下藤共、〔皇朝古語〕

ござる度こそばた餅はならぬ

毎こよき事はかりはせぬといふ義なり〔俳言集〕

◎ 江 之 部

江戸中白壁〔渡り奉公人杯の誇言なり〕〔俳言集〕

江戸自慢〔全〕

江戸にて伯母様を尋るやう〔全〕

江戸つ子の梨子を食ふやふ〔なぐしするさき事〕〔全〕

江戸は人のはきだめ〔全〕

江戸つ子は口ばかり

〔江戸つ子は五月の鯉の吹流し口前ばかり腸はなし〕

江戸つ子は氣が早い

江戸の敵を長崎で打つ

江戸は物見高し

江戸紫に京緋色〔染色の名所〕

江の邊につながぬ船〔世語集〕

得手に帆を揚る ○ 得手一に順風又は追風に作る

是は人の心に密に思ひ立事ある時、幸に似付かはしき便ありて、やかて夫を事の序として、件の思立を遂る事あり、是を船の事に喩へて云たる也〔圖書編〕に云、南昌の章潢本清甫が

江 之 部

三百九十九

日本より唐を攻んとする事度々にて、動もすれば軍を發し船を馳て唐を慄かす故、此道を防
くの備を記したる書も亦數多あり、其中に云、若かれ入寇する時は、風の之く所に隨ひ、東
北より風吹時は薩摩よりす、或は五島より出て、大琉球小琉球に至て、又風の變を待て攻寄
る方角を窺ひ、北風多く吹時は廣東より攻入らんとす、東風多く吹けは福建に取かゝる、若
正東風に吹時は必五島より、天堂宮渡を経て、風を待東北の風には烏沙門に至りて、鯨を分
ちて非山海關門を過て、温州を攻んとす云々」是彼の風の得たる方を窺見て帆をあくるの心
也、〔故事要言〕

得手に棒〔俚言集覽〕

得手吉

得手物、好物て御座ると云を、人の名に擬して得手吉といふなり〔全〕

得手物て仕損する〔全〕

得たり賢し〔全〕

〔本朝俚諺〕俗語の部に、〔保元物語〕に云、宇野親治、得たりや應とてとあり、
得しらぬ口さく〔故事要言〕

得食に毒なし

得食は嗜食也、得は善也多也好也。〔禮記曲禮〕。入國馳。註。馳善調人也。疏。善猶好也。
疏の好字の意は得てよく人をふむと云心なれども今此に引はすきこのみてよく多く食ふと云
方に取たる也義は通して同し事也〔俚言集覽〕○〔愚按〕好物に崇なしといふに同し、凡特に嗜
好する物は、其人の體質、其物の性分缺乏する故なり、例へば糖分の欠乏する人は、甘味を
好むか如し、故に他人には毒となるべき食物も、其人には害なし、唯嗜好物は過食する故に、
害になる事あるのみ、

縁につるれば唐の芋を食ふ〔毛吹草〕〔和漢古語〕

縁の舞々〔世語叢〕

縁に引かるゝ

〔小町師〕春上「君にさへ縁に引かるゝ小松哉」重貞〔俚言集覽〕
縁者の證據〔大和故事〕同之

〔爲愚痴物語〕に、同じ穴の狐、縁者の證人なりとおもへ、〔全〕
縁と月日の末を待て〔全〕○縁と月日はめぐりあふ

縁なき衆生は度しかたし〔全〕

椽の下の舞 ○ゑの下の舞〔毛吹草〕〔和漢古語〕

〔犬子集〕蝶 親重「椽の下の舞かや庭に飛胡蝶」〔俳言集〕

椽の下の鉞つかひ（勢不便なるをいふ）〔全〕

椽の下の鴛籠まはし（短小者を嗤ていふ）〔全〕

椽の下の力持〔毛吹草〕〔和漢古語〕

穢多の博樂〔和漢古語〕〔世語蓋〕

ゑた、穢多と書けり、されども「ゑどり」の轉訛なるへしといへり、屠者を「法顯傳」に、名爲惡人別居、入城中則擊竹自異人則避之とあれば、我邦の風俗も相似たり、人の舍内に入らず、人と俱に食せず、同火せず、席をならへず、住居以谷以野、故に谷の者、野の者といふ、或は夙者ソクシヤと云、幾内夙村多し、皆穢多住す、穢多の稱も亦當れり、もと佛制に据るなるへし穢多を長吏といふは、張里の誤なり云云、賤民の一種にして、一村を成せり、是古の俘佃なるへしと、國人佐藤岡満いへり、張里は馬醫の名、穢多之を兼るをもて呼へり、〔和訓栞〕○〔愚按〕博樂又は伯樂といひ、馬醫の稱なり、屠者にして馬醫を兼るは、殺活自在にして至便なり、然れども一方より見れば、其業とする所相衝突して、危険甚しきものなり、諺蓋此等の意を兼るにや、

穢多、皮剥ぎ、御臺所人、（人がらわしき者をいふ）〔俳言集〕

穢多の子は皮をはぐ〔全〕

穢多も持た（穢多なれども金を持たと云事）〔全〕

穢多村へ猪

酔てサマク筆シツまく〔毛吹草〕〔和漢古語〕〔野語述説〕同之

〔吾吟我集〕「酒に酔ひくたまく人は何事もいさしら糸の亂れところよ」〔犬子集〕「花見にて

酔てくたまく糸櫻」吉次〔俳言集〕

酔に十の損あり

〔鷹筑波集〕「酔ては人に十の損する」と云句に「ねちわふて骨皆折らす舞扇」〔全〕

酔人サマシにけがなし

〔列子黄帝篇〕夫醉者之墜於車也、雖病不死、骨節與人同而危害與人異、其神全也、

笑の中の劍。○笑の中の刀。〔毛吹草〕〔和漢古語〕

〔唐書〕云、李義府貌足恭、與人言嬉怡微笑、而陰賊褊忌著于心、凡忤其意者皆中傷之、時號義甫笑中有刀、諺此より出たり〔夫木抄〕衣笠内大臣「何事をねもひけりともしられしな多みの中にも刀やはなき」又公朝「手にとれば人をさすてふいがくりの多みの中なる刀ねろろし」〔藤草〕

笑の中に刀を嘸ぐ 又笑の中に劍あり 又笑の中に劍をかす 〔俳言集覽〕

笑の眉をひらく 〔全〕

蝦魚の鯛交り 〔全〕

〔王君玉雜纂續〕將殿釣鼈〔昔言故事〕投瓜得瓊又以蜎投魚、抛磚引玉、同意なり 〔全〕

蝦魚くつたむくひ

閻魔の廟の訴へ 〔世語盛〕

閻魔の抹香くつたやう 〔俳言集覽〕

閻魔の鹽をなめたやう 〔全〕

枝を鳴らさぬ御代 〔藤草〕（か之部風枝をならさぬ云云互看）

枝を伐り根をからす

〔太平記〕直義欲誅師直、枝を伐て後根を斷んとての御意にて候らん 〔俳言集覽〕

枝葉の茂りたるは果實なし

書らること

〔論衡〕圓仙人之形體、生毛臂變爲翼、行於雲即年增矣、千歲不死此靈圖也、世有虛語亦有虛圖 〔古今著聞集〕いかで實にはさは候べき、わりのまゝの寸法に書て候は、見所なきものに候故に繪ららことゝは申にて候、方按王維が雪芭蕉あり芭蕉の謠、雪のうちのはせをのいつはれるすがた 〔全〕

書にかいた餅をくひたがる

多の子の火を踏たる 又世話盡に犬子の火を踏たる 〔全〕

多の子道しる 〔全〕

烏帽子に手綱打たする

〔伊勢貞丈隨筆〕に云〔春湊浪語下卷〕云、木曾義仲、治承に上洛ありし時、さしも院宣の御使に、小袴に直衣をかけ、烏帽子に手綱うたせて出わひし事あり、又藤九郎盛長、頼朝郷を憚

らす、烏帽子に手綱打せて悪口せしなど云事、俱に源平盛衰記に見ゆし、是等至て非禮なる
 躰を、いひし事なれども、必頭をはわらはさず、烏帽子に更るに、手綱をは打かけたる也、
 又俊寛、成経、康頼、鬼界か島に、流されし時の詞にも、此島には、男は烏帽子もいたゝか
 す、女は髪もけつらすと、島の男女の異様なるよしを、同じ書に記せしか、今は公卿殿上人
 を放ちては、都も鄙も、高さも卑さも、押並て物をいたゝく事をせず頭をわらはしぬるは、
 いつよりの事か、是を異体なるさまとも、更に思はぬ世となりしる哀しき、貞丈云、烏帽子
 に手綱打せといふは、烏帽子の掛緒ゆるみて、烏帽子の動くをいふ也、烏帽子の體をいふ、
 馬に手綱打たするに似たれば也、馬に手綱打たするといふは、手綱をゆるく持て、馬の首の
 うなつく如く、烏帽子のがたゝと動くを云也、是譬ことに云たる也、古の俗諺なるへし、
 然るに土肥經平春後浪語の作者也烏帽子に手綱打せてとふを、烏帽子かふらぬ時、烏帽子の代りに、手
 綱をかふる事、何の古書にも見ゆさる事也、感ふ事なかれ、〔全〕
 烏帽子の六波羅やう。

〔盛衰記〕烏はしのとめやう、衣紋のかゝりより始て、何事も六波羅やうと、いふてければ云々〔全〕

遠慮か無沙汰になる〔全〕
 遠慮ひだるしたて寒し。

越鳥南枝に巢をくふ〔毛吹草〕 ○越鳥南枝に巢をかけ胡馬北風に嘶ふ〔世話話〕
 越後者は助骨が二本足らぬ
 會者定離〔世話話〕

生者必滅、會者定離、是佛語に出つ、

猿猴が月を捉る〔世話話〕 同之 ○猿猴か月に愛をなし螳螂か斧を取て龍車に向ふ〔毛吹草〕

〔僧祇律〕云、有五百獼猴、見井中月影、語諸伴云、月今日死、落在井中、當共出之、我捉樹
 枝、汝捉尾、展轉相連、乃可出之、時諸獼猴即如主語、連獼猴重樹、弱枝折、一切獼猴墮井
 水上〔偈言集〕
 えせものゝ空咲ひ〔民のかまど〕

〔和訓栞〕に云えせ笑えせ者などいへり源氏にえせ受領枕草紙にえせさいはひ、えせ牛えせか
 たち鴨長明無名抄に、えせ歌職人を歌合にえせ采、えせ木、などもいへり、えせ笑は北史崔
 瞻か傳にいふ、冷笑なるへし、或は曲の字をえせとよめり、

榎の實はならはなれ木はむくの木〔和漢古語〕同之

榎の實〔東雅〕に榎とむくのきとは甚似し物也、〔清水物語〕に、人には此世のすきはひを、いらぬものと云なして、捨は我拾はんとの心持に候也、上人ころ耳はあかぬ人となはえて候へ、かやうに申ても、げにもと思ひ給はぬは、榎の實はならはなれ木はむくの木といひたるに同し、それは情のこわきといふもの也、〔世言集〕

鉛刀の一割

此語〔後漢書〕に出たり、又〔文選左大冲詠史詩〕、鉛刀貴一割。註東觀漢記。班超上疏曰。

臣乘聖漢威神。冀做鉛刀一割之用。註。濟曰。以鉛爲刀。只可一割。不可再用。〔嚴意〕

榮耀に餅の皮じく。又榮耀にはこつてども

〔事文類聚十七〕に云。鄭辭以儉素自居。尹河南。召甥姪、與之會食。有蒸餅。鄭孫去其皮而後食之。潁大陸怒曰。皮之與中。何以異也。僕嘗病澆俗驕侈。自奉奈何謂浮。甚於五侯家綺紈乳臭兒也耶。因引手取所弄者。鄭孫錯愕失據。器而奉之盡食焉。〔世言集〕

◎て之部

天にせくまじり地にぬきあしす

〔詩小雅〕云。謂天蓋高。不敢不局。謂地蓋厚。不敢不踣。〔本朝傳〕

天に仰き地に俯す〔世語盡〕

天知る地知る。○天知る地知る人知る〔野語述説〕〔世語盡〕

〔後漢書〕云。楊震爲東萊太守。道經昌邑。震初爲荊州。舉茂才王密。密時爲昌邑令。謁見。

至夜懷金十斤以遺震。震曰。故人知君。君不知故人何也。密曰。暮夜無知者。震曰。天知神

知子知我知。何謂無知。密愧而去。〔氏族排類大全〕。天知地知子知我知。とす、俗語此に本

つけり、〔嚴意〕

天は高さに居て身さにさく〔世語盡〕

天然磔に猪を撃つ

丹波の土民、山に入て栗を取けるに、奥山より熊一疋子をつれ來り、谷川のろはなる石をいたき上れば、子其石の下に入て、蟹を取て食ふと見ゆ、其折ふし、栗取の男、木にのほりて居けるか、いかにしけん栗四ツ五ツ取落す、熊これに驚きいたきたる石を捨たれば、下なる子おされて死けり、熊限りなく悲鳴しけるが、十段ばかり側に、野猪のふし居たるを、かれがわざとやれもひけん、たけりかゝるに、猪もおさあがり半時ばかりたゝかふに、前止一ツ

打をられ、横腹胸のあたりをひきさかれ、熊も所々かけられて、二匹ともに死けりと、中山氏が「醍醐隨筆」に見えたり、此事諺によくかなへり、「本朝體略」天狗たをし。

深山などに問々ある事也「癸辛雜識」云。丙申十一月十七日。冬到是秋。三鼓有大聲。如發火砲。震動可異。雞犬皆鳴。或云。天狗墜故也。とあれば、異邦にも亦これあり、「全」天狗のやどり、「毛吹草」天の與ふるをとりされは却て其どかを受く。

「史記陳餘傳」云。天與不取。反受其咎。「說苑」云。天與不取。反受其咎。時至不迎。反受其殃。天地無親。常與善人。「逸周書」云。天與不取。反受其咎。當斷不斷。反招其亂。「國草」○「史記越王句踐世家」范蠡曰。會稽之事。天以越賜吳。吳不取。今天以吳賜越。越其可逆天乎。且夫君王蚤朝晏罷。非為吳耶。謀之二十二年。一旦而棄之可乎。且夫天與弗取。反受其咎。伐柯者其則不遠。君忘會稽之厄乎。「愚按」是皆戰國爭奪の際の辭柄にして、濫に引用すべき語にあらざるなり。

天子に父子なし。○天子に父母なし。「毛吹草」

「増鏡」章秋 天子に父母なしと申すれば「盛衰記卷二」延喜の聖主の天子無父子とて寛平法皇の仰を、ろむかせ玉ひけるを、「同卷十二」二條院も、賢王にて御坐けれども、天子に父母なしとて、常に法皇の仰に背き申させ玉ひける故にや云々、「皇朝古蹟」○「乘穂録」に云、天子父母なしと、盛衰記にいへるは、北史に高歡立清河王世子善見議定白清河王、々曰、天子無父。荷使兒立、不惜餘生乃立之と、いふに本づく、「愚按」天子は至尊、无上御一人とて、並ぶものなき故、父母も當天子には從ひ奉る義と心得誤れるものあり、「孟子萬章篇」に咸丘蒙問曰、語云盛德之士君不得而臣、父不得而子、舜南面而立、堯帥諸侯北面而朝之、瞽瞍亦北面而朝之、云云、不識此語誠然乎哉、孟子曰、否、此非君子之言、齊東野人之語也云々と、其說甚詳なり、蓋「増鏡」「盛衰記」等の説は、孟子の所謂齊東野人の語なり、信するに足らず、抑皇國は天祖忠孝を以て國を建て玉ひ、歷世斯道を繼承して失はせたまはず、是其天壤無窮たる所以なり、豈父母なきの天子あらんや、「孝經」に云、昔者明王事父孝、故事天明、事母孝、故事地察、云云故雖天子必有尊也、言有父也、と以て此諺の非なるを知へきなり、天にあらば比翼の鳥地にあらば連理の枝。

〔白氏文集〕長恨歌曰、在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝これ唐の玄宗の楊貴妃とちかひをなせし事を作れる詞なり〔蘇軾〕天地を袋にぬふ

〔蜻蛉日記上二〕に人々今年たにいかてこと思して、世の中ころみんといふを聞て、はらからとおほしき人、また伏なからもの聞ゆ、あめつちを袋にぬひてとれかふにいとれかしくなりてさらに身には卅日みる夜、我もとにといはんといつは云、〔類聚名物考〕

天の分川の分に言ひなす
色々にさゝはりをいひて、事を言ひのがる事なり、〔古本今昔物語卷二十八〕天の分地の分に云なして止ぬる物を、〔皇朝古蹟〕

天人の五衰人間の八苦〔毛吹草〕

天に眼〔世語彙〕

天に口わり壁に耳あり〔俚言集覽〕

〔主従心得草〕古歌に「おしき事人はしらぬと思へとも天に口わり壁に耳あり」天に口なし人を以て言はしむ

〔平家物語〕清承炎上天に口なし人を以ていはせよと申す、〔調伏曾我論〕天に口なし人のいひ

事〔温故要畧〕に〔文德實錄第十一〕天無口假人口〔全〕

天道見通し又神は見とふし〔全〕

天の網〔全〕○天の網にかゝる

〔老子〕天網恢々、疎而不漏、

天に私なし

天道恐るべし

〔讀書錄〕天道可畏、聖帝明王、事天如事父母、

天道人を殺さず

天道様と米の飯はついてまはる

天に向て睡はく

經云、悪人の賢者を害するは、天に仰きて睡するが如し、睡天公に至らすして、遠て巳の身に隨ふ逆風に向て悪塵を颯れば上なる人を汚す事能はず、故に賢者は毀るべからず、福必ず降りて身を凶す、〔談錄資談〕

天から降つたか地から湧いたか
天から横にふる雨はなし
天爵は當り次第〔世語盡〕
天秤棒が上へ反〔全〕
天王様ははやすがねすぎ

四五十年以前の事也、神道者体の者、天王様ははやすがねすぎ、はやしたものに御札をやる
そといひて、江戸町々を歩行しとなり、今は絶たり云々、石原清楓子話、〔全〕

天一天上雨ふらす、十方暮風吹かす、八專に日和なし、〔全〕
天竺浪人〔故事要言〕

志氣のみ高くして、世間に容られざる、浮浪の徒を云ふ、又定業なき無頼漢を云ふ、〔故事要言〕に大惠普説ニ云、一の懶龍あり、雨を降す事を六ヶ敷がり、怠りけるほどに、龍王に怒られて、遂に難を逃れて、下界に降り、古き井の中に隠る云々、
天下太平

〔禮記仲尼燕居篇〕言而履之禮也、行而樂之樂也、君子力此二者、夫是以天下太平也、〔鄧析子

轉辭篇〕聖人寂然無頼朴之刑、莫然無叱咤之聲、而家給人足、天下太平、〔呂氏春秋夏紀〕天下太平、萬物安寧、

手が入れば足も入る〔毛吹草〕 ○手が入れば足も入る一寸延ればひる延る〔和漢古歌〕
〔吾吟我集〕「手が入れば足も入りけりをさな子の親のゆがけを足袋に直して」
手にあせをにぎる

〔元史〕云。憲宗召趙壁問曰。天下何如而治。對曰。先誅近侍之尤不善者。憲宗不悅。壁退。
世祖曰。秀才汝渾身都是膽耶。吾亦爲汝握兩手汗。〔投筆隨筆〕云。今世人勞觀人涉險而濟者。輒云爲爾捻兩把汗。〔本朝俚語〕
手なうして寶の山に入るが如し

〔大智度論〕云。無信如無手入寶山中。不能有所取。〔全〕
手ぐすねをひく

〔井蛙抄〕云文覺上人、西行を見て、うちにて手ぐすねをひきてとわり、〔全〕
手をやく

世俗、物にあたりてこりたる事を、手をやくといへり、〔四十二章經〕云。佛言愛欲人、猶執てノ部
四百十五

炬逆風而行。必有燒手之患。〔蘇軾が艶簡集〕云。祇怕其手可焦也。〔全〕
手のうちらをかへず。〔和漢古語〕

輒すく變改する事を云ふ、孟子曰、以齊王由反手、註反手言易、〔國語〕

手囊を引く〔毛吹草〕

手甲より目劫〔毛吹草〕〔和漢古語〕

〔吾吟我集〕「手甲より目劫なりけり亂れ碁の誤はなを側て見ぬる」

手足らはすの口劍。〔俳言集〕引爲愚痴物語。又口たゝきの手足らはす。

手ぶつちやうの口八丁。〔俳言集〕

手飼の犬にかする。○手飼の犬にくはる。〔世語盡〕

〔甲陽軍鑑〕信玄、信長へ手切の書に、手飼の犬に己が肉をかみひしかる、〔事文類聚前集〕盧

同月蝕詩曰。嗚呼人養虎被虎噬。〔全〕

手書きあれども文かきなし。〔全〕

手前味階て鹽からい。〔全〕

手前を棚へ上る。〔全〕

手上、手上に歴さる。

〔尤草紙〕おさるゝ物の品々、昔熊野の奥、十津川の里に狩人あり、ある時狩に出けるに、ふしきの事ありて、くちなはの、雉を取て服しけり、又其くちなはを、しゝの來りて服す、狩人之を見て、弓に矢をつかひ、はなたんとしけるが、まてしはし、此しゝを殺さんにはいとやすし、我を又いかなるなるものか殺さんと、思案して我家に歸らんとす、其山の麓にて、よき分別かな手上手上にれさるゝものを、若しゝを殺さは、爾を又蹴ころさんと、大木の上より天狗いひけると也、夫より此狩人、獵をやめて修行者となりぬ、十津川の奥、辨陀羅法

師是也、〔全〕

手柄はしがち。〔全〕

手鹽にかけ。〔全〕

手は寶。〔全〕

手は千里の面目。〔手は書也〕〔全〕

手にするた鷹をうらすやう。

〔榮花物語〕に手にするた鷹をうらしたる、なとらふやうにおもふ。〔全〕

手の物をとられたやう
手に入てもむやう
手酌貧乏
手に手を取る

〔小町踊〕春上 藤「山道は手に手をとりし藤かな」

手をかへ品をかへ 又色をかへ品をかへ 又名をかへ品をかへ

手にも足にもゆかず

手足がらみ

手でする事を足でする

手の内の玉をとられたやう

手習ひは坂に車を押す如し

手に物つかぬ

手の下の罪人

手盛八杯

敵の助言にも善くはつけ
敵に見ても善くはつけ
敵の異見にもよくはつけ
敵に双物を預くる

〔瑯琊代醉篇九〕何休美公羊學、遂著公羊黑守、左氏音旨、穀梁廢疾、鄭玄乃發墨守、鍼音旨、起廢疾休見而嘆曰、康成乃入吾室、操吾戈以伐我乎、

敵のさする功名

敵を見て旗をまく

敵にうしろを見せる

敵なきに矢をはなつ

挑燈につりがね

〔涅槃經〕云、猶蚊子共金翅鳥捕行遲速

後の事なれば、宗鑑法師が新撰犬筑波集に「片荷軽くて持やかかねけん」と云句に「つりがね

を挑燈賣にことつけて」とあるなど、はじめて物に見ゆるならん

挑燈はどの火が降る

是は人の貧窮なるをいふ、人の貧とは食の乏しさを第一とす、されは飢たる事を、詩にも飢

火といふ、飢ては必汗の出るものなり、巢元方が病源論にも、内に飢餓極りて熱を生ず、熱は火也、人火に向て久き時は汗自ら出ぬ、夏は火也、炎熱して人汗すともいへり、此心を以て、飢て身に汗する事は、其家に飢火ふると云義也、〔觀佛三昧經〕阿鼻地獄の相を説て云、城内に七ツの鐵幢あり、幢の頭に火沸出る事泉の如し、其炎流れ進りて、又城内に滯てりといへり、是より出たり、〔故事要言〕

挑燈持ち川へはまゐる〔俳言集覽〕

挑燈で餅をつく

提灯を借た恩は知れども天道の恩は忘れ

是は大恩を忘れて小恵に懐くを云ふ、假令は君父を後にし、他人に親しむか如きに喩ふ、

亭主關白〔俳言集覽引女夫草〕

亭主の好の赤烏帽子 又赤烏子を赤いわしとも云〔俳言集覽〕 ○〔旦那の好な云々た之部參看〕

亭主の好を客にふるまふ〔全〕

亭主八杯客三杯〔全〕

寺から里〔毛吹草和漢古歌〕同之又山から里とも云

〔木食楚仙獨吟〕「手習の小性は多々寺にして」前句「里へど贈る餅は一鉢」寺から里への故事に候や〔小町踊、春、花〕「家つとや寺から里へ兒櫻」現十〔全〕○事のさかしまな事を寺から里といふ、里より寺へ物を贈るへきに却て寺より里へ物を贈る事より、云ひ出たる詞なるへし、寺つゝきの子は卵からうなづく〔全〕○〔世話盡〕けらつゝきの子は卵からうなづく寺の邊の童は習はぬ經をよむ〔毛吹草〕寺に勝た太鼓〔全〕

〔俳言集覽〕に寺の始り向原寺なり、今の河内國西琳寺也、百濟國より所獻、十一面觀世音を本尊とす、

出る息は入る息を待たす

〔因果經〕云佛生比丘作無常觀、比丘曰、百年乃至一日、佛曰、勿作此語、出息不保入息在呼吸耳、

〔類聚名物考〕

出る株うたるゝ 又出る株頭をうたるゝ ○出る杭は打たるゝ又出る杭は波にうたるゝ

〔北條五代記〕出る株のうたるゝと云か如し〔傳家寶〕出頭船兒先爛底〔何道全老子述註〕搦而銳之不可長保、保安生曰、椽出頭而先朽、箭出頭而失身、〔俳言集覽〕

出船は船頭待たず〔全〕
 出からかひの入りからかひ〔全〕
 出つかひよりづがひ又大費より小費
 出物産物處さらはず〔全〕
 蝶は捕ふればわらはやみせさず

〔堤中納言物語〕虫めつる姫君てふはとらふればわらはやみせさすなり〔皇朝古語〕○〔倭訓栞〕に

わらはやみは瘧疾なりといへり源氏に見ゆ、菅直二豎の事に本つける訓なるべし、

蝶は菜の葉の味しらす菜の葉は蝶の味しらす〔俚言集覽〕

寵愛こうじて尼になす〔毛吹草、和漢古語〕

頂禮困じて尼となる〔故事要言〕（頂禮は寵愛の訛なるべし）

朝三暮四のいとなみ〔本朝俚語〕

是は毎日同じ事を爲して世を経る事にて、朝夕のくらしといふか如し、朝三暮四の出所は〔列子黃帝篇〕に祖公誑祖曰、與若乎朝三而暮四足乎、衆狙皆起而怒、俄而曰朝四而暮三足乎、衆狙皆伏而喜〔莊子齊物論〕にも見ゆたり人を籠絡して使ふに用ひたり、

泥中の蓮

〔傳燈錄〕云、鳩摩羅什、姚王以妓女逼令受之、乃自講說、譬如臭泥中生蓮花、取蓮花勿取臭

泥〔全〕

鳥雀枝の深きに集まる〔毛吹草、和漢古語〕同之

〔杜子美詩〕鳥雀聚枝深〔釋草〕

貞女兩夫にまみぬす〔全〕（ち之部忠臣云云の條參看）

田鼠化して鶉となる

〔禮記月令〕田鼠化爲鶉〔三才圖會〕に云田鼠といふは田鼠也、畿内江東にて「ウムロモチ」と

ふ又此鶉は鶉也〔俚言集覽〕

點の打人なし

〔源氏物語〕人に點つかるへさふるまひせじをともふものを〔陸奥雜記〕

鐵砲玉は行ぬけと想へ〔俚言集覽〕

弟子七尺去て師の影をふまず〔世語彙〕

鄰家の奴は詩をうたふ〔毛吹草〕〔世語俗談〕同之

〔事文類聚後集〕云、鄭玄家、奴婢皆讀書、一婢不稱意、使人拽著泥中、須臾一婢來問曰、胡爲乎泥中、答曰、薄言往愆、逢彼之怒、諺此に出たり、〔新草〕鄭玄は後漢の儒にして毛詩鄭箋の著者なり、一婢の問は詩經風式微篇の詞、一婢の答は柏舟篇の詞なり、

◎あ之部

朝起の家には福来る

〔垂加草〕に云、大黒夷子記云、夷子早旦晨起、火燒爲事家故名火寄子、是蛭子なりといふ、諸祭記、日月由來、惠比酒とかけり、此諺の意は、朝早く起る家はさかえ、おろく起る家は衰ふといふ事ぞぞ、〔本朝俚語〕

朝起は七ツの徳あり

〔明心寶鑑〕引〔景行錄〕云、觀朝夕之早晏、可以識人家之興替、〔傳家寶〕云、早起三光、遲起三慌、〔俚言集賢〕○〔宋樓鑰詩〕云、早起三朝當一工、朝寝坊の宵まどひ

〔說苑十六〕云、喜夜臥者、不能蚤起也、〔全〕

朝飯前

其位の事は、どうに知て居るといふを、朝飯前に知てゐるといふ、〔全〕○(爲しやすき事に
もいへり)

朝飯前には出来ぬ

物の並より重大なるを、甚しく言はんとて、朝飯前には動かされぬなどいふ、朝はひだるさ

故なり、〔蕉氏易林云、侗如日飢、〔全〕

朝腹の茶の子〔全〕

朝鉢は弘法様〔全〕

朝霞は其日の洪水又朝霞を朝やけども

〔詩經〕朝隴于西、崇朝其雨、〔世本古義〕諺謂東隴日頭西隴雨、信然、大率與霞相映、朝霞不

出市、暮霞走千里是也、〔全〕

朝霞に隣あるさすな〔全〕

朝露に笠を着る夕露に笠をぬげ〔全〕

朝山夕山

朝夕は山遠く見ゆるをいふ海船人の諺なり〔全〕

朝題目に夕念佛〔全〕
朝觀音に夕藥師

櫻陰曆談云、客問曰、凡詣堂社者、俗云朝觀音夕藥師、每月十八日朝拜觀音、每八日夕禮藥師、不知何義、答曰、按據宿曜經之說矣、謹檢彼經、每月十八日以朝爲吉時、以夕爲凶時、每月八日以夕爲吉時、以朝爲凶時、八日及十八日、於彼二尊爲娑婆有緣之日、宜哉、朝拜觀音夕禮藥師矣、〔全〕
朝惡比壽に夕大黒
朝油斷の夕屈み
朝雨に敷買け〔必露るゝをいふ〕
朝蜘蛛に福あり
足手からみ〔足手纏〕〔初井家日記〕
〔古今集〕「世のうきめ見えぬ山へ路入らんにはたもふ人ころはたしとけれ」即是足手からみの意也〔全〕
足本へも寄り付かぬ〔全〕

足本から鳥の起つ如し

〔吹草〕「立くるや足本からの酉の年」〔全〕
足本の明るし内

〔雁筑波〕「足本のあかい時たてかもの鳥」〔全〕
足をうらにする

〔本朝俚諺〕源氏物語に云、あしをうらにてたれもくまかてたまひぬ〔徒然草〕に足をうらにまどふか、曉かたよりさすかに音なくなりぬるころ、〔全〕
足を掃木にする〔奔走につかるゝを云〕〔全〕
足の爪からちりげのきりくまで 又わたまのきりく迄ども〔全〕
足の裏に粒の着いたやう〔全〕
足の向いた方へ行く

〔竹取物語〕あしのむきたらんかたへいなんす〔全〕
足か地につかぬ

〔夫木抄〕に人丸の歌「わきもこが夜戸出のすかた見てしより心そらなり土はふめども」〔全〕

足ふみたてぬ世の中

〔白氏文集〕に應向人間無所求。古黙應向を「アシフミタテヌ」とよめり〔全〕

足駄をわらへは雨かふる

足本を見てつけあがる

あしなえたつ事をわすれす

〔前漢書〕韓王信傳云。僕之思歸。如痿人不忘起盲者不忘視。〔說苑〕云。痿人日夜願一起。盲

人不忘視。〔東坡詩〕。鳥囚不妄飛、馬繫嘗念馳。〔本朝俚語〕

有てのいどひ無くてのしのび〔毛吹草〕○あるはいやなりねもふはならず〔俚言集覽〕

有りやなしや

〔伊勢物語〕名にしれおほいさ事とはむ都鳥我れもふ人はありやなしやと〔全〕

有がた迷惑〔全〕

有物に事を欠く〔全〕

有にまかせよ

〔本朝俚語〕に云、七字の口傳といひ傳ふる三事あり、「あるにまかせよ」「あるへきやうに」

「身のはどをしれ」以上三事なり〔遊生入牋〕云。太一真人曰、予有經三部。其只六。儒者誦之成聖。道士誦之成仙。和尚誦之成佛。而功德甚大。但要體認奉行。一字經曰忍。二字經曰方便。三字經曰依本分。是也。三經不在大藏。只在靈臺。有味乎言哉。方按、依本分の三字、あるにまかせよと、あるへきやうと、身のはどをしれ、との三事を兼たり、谷川氏、尋常の字をあるへきやうと譯されたり、〔全〕
有るはなく無きはかすをふ

〔寶物集〕に云、小野小町生死のことわりをさとりて「あるはなくなきはかするふよの中にわはれいつれの日までなげかむ」〔拾遺集〕藤原爲頼「よの中にあらましかはとれもふ人なきかねはくもなりまさるかな」選集抄には此歌を四條大納言公任の歌とす〔白氏文集詩〕。二十年前舊詩卷。十人酬和九人無。〔全〕

有る袖はふれども無き袖はふられず〔全引カナ、ホシ〕〔毛吹草〕

有るものは手からこぼるゝ又「あれは手からこぼるゝ」〔全〕○あるてからもるゝ

有る時は蟻がありなき時は梨もなし

〔小町睡、夏、瓜〕「ある時は蟻のすさみや砂糖瓜」〔源氏桐壺〕なくてぞとはかかる折にやといふ

引歌に「ある時はありのすさみににくかりきなくてそ人はこひしかりけり」ありのすさみと云事は有生て居た時はの意也〔全〕○〔吾吟我集〕物ごとにはわりのみなしとてももとの

はせじな世はなり次第

有りの儘なるは正直の證據

惡事千里○惡事千里を走る〔毛吹草〕

〔北夢瑣〕云。好事不出門。惡事傳千里。〔國草〕

惡事身にとまるとまると

〔春秋傳〕云。善善長。惡惡短。惡惡止其身。善善及子孫。〔全〕

惡事身にかへる〔和漢古語〕

惡に強ければ善にもつよし〔毛吹草〕同之

〔說苑〕云。惡惡道不能甚。則其好善道亦不能甚。又家語に見ゆたり、〔本朝俚語〕○〔愚按〕世人

此語を誤解して、惡事を爲す者は、亦善事をも爲す事と思へり、夫善と惡とは氷と炭との如

し、惡人何る善なる事を得んや、其見て善と爲すものは偽善のみ、諺の意は、不仁を惡む事

甚しきものは、必仁を爲すの徒たるをいへるなり、

惡女は鏡をうとむ

〔二程全書〕云。明鏡爲醜婦冤。〔全〕

惡人には友多し

〔素書〕云。同惡相黨。註云。紂之徒億萬。陌之徒九千是也。〔呂氏春秋〕云。同惡同好。志皆

欲、務以相毀。務以相譽。毀譽成黨。衆口薰天。〔省心詮要〕云。小人詐而巧。似是而非。故

人悦之者多。君子誠而拙。似迂而直。故人知之者寡。

惡はのへよ〔毛吹草〕

惡錢身につかす

惡人は刀のためしもの

惡妻は六十年の不作

相手のもたす心〔毛吹草〕〔大和故事〕〔俚言集引禪寺玉山書〕

〔聯珠詩格〕偶偏棚に題して梁鍾。刻木引糸作老翁。編皮鶴髮與眞同。須臾并能寂無事。恰似

人世一夢中。と云しも、其遣ふ人の心に隨ひて、善にも惡にも、順逆に身を任するをいふ也

〔故事警言〕

相●手●の●さ●す●る●功●名●〔俳●言●集●〕
相●手●か●は●れ●と●主●か●は●ら●す●

〔吾吟我集序〕「はしめのあひ手はかはれどもねなし主はかはらぬ恭すきなるへし」〔全〕
相●手●の●無●い●喧●嘩●は●出●来●ぬ●〔全〕
相●は●さ●み●は●せ●ぬ●も●の●

〔論衡〕四諱云。母以箸相受。爲其不固也。
相●酌●を●す●る●と●中●が●た●が●ふ●〔全〕
相●槌●を●打●つ●〔全〕

あ●い●異●奇●縁●
あ●ま●り●寒●さ●に●風●を●入●る●〔毛●吹●草〕〔和漢古語〕同之

〔犬筑波〕に「あまり寒さに風を入けり」と云句に「賤の女かあたりの垣を折焚きて」〔俳言集〕
あ●ま●り●嘘●で●得●て●ろ●見●つ●け●ぬ●〔全〕〔燈臺本くらしの意なり〕
あ●ま●り●圓●さ●ハ●轉●び●や●す●し●

古歌「丸くとも一ト角われや人心あまり丸さハころひやすきぞ」〔全〕

あ●ま●り●て●還●る●は●ど●〔全〕

餘●る●に●ま●ゝ●兒●な●し●〔全〕

餘●り●茶●に●福●あ●り● 又●餘●り●物●に●福●あ●り●〔全〕

餘●り●茶●を●の●め●は●年●か●よ●る●

今は餘り茶に福ありといひ、昔は餘り茶を飲めは年かよるといふ、〔砂金袋〕「大福のあまり
茶のまでや若夷」勝直〔南花はなし〕昔さる人の云、あまり茶を吞は、年かよるものじやと云
事を聞て、去る者のいふやう、是はうろであらう、しなひは茶といふ文字は、はたちの人は
十八と書たはどにといふ、されは歌にも「茶をすきて吞まは甘の人なりと十八はどのよはひ
にぞ見ゆ」〔柳菴筆記〕

商●人●の●ろ●ら●直●〔全〕

商●人●の●ろ●ら●誓●文●

〔吾吟我集〕「商人のろら誓文のたくひ哉また直もせさる君かかねこと」〔狂歌咄〕「商人の空誓
文や偽のかうへにやとる神もありけり」〔全〕
商●人●と●屏●風●は●曲●ら●ね●は●世●に●立●た●す●〔町●人●巻〕同之

曲則全、の意也、己か情を矯て、堪忍をすへしとす〔鷹筑波〕すくてはたぬ世の中るかし」と云句に、「商人の屏風にしのをしつらひて」〔全〕

商ひは牛の涎（氣を永くするを云）〔全〕

商人のよき衣着たるやう〔全引古今集序〕

秋茄子惣にくはすな〔毛吹草〕〔和漢古歌〕 同之

〔諺草〕夫木「秋なすひわさ」のかすにつけませてよめにはくれじたなにおくとも「愚按萬葉夫木に出づといふは也」〔似我蜂物語〕「秋茄子あさ」のかすにかさうへてよめにくはすな棚にねくとも」是はうち屋に御座候はさまの感作のよし、移山按するに、よめは風なるへし、正月の忌詞に、風をよめが君と云ふ、故によめと斗もいふなるへし、秋茄子はわけてうまきものなれば、早酒の粕につけて棚におくとも、風にくはすなと云事なるへし〔俳言集〕○〔世事百談〕に、古き繪冊子に、風のよめ入と云事を作りしものあり、今も猶錦繪などに残りて、たまたま見る事あり、こは風の異名を、嫁とも嫁の君ともいへるより、作意したるものと思はれたり、古歌に「秋茄子あさ」のかすに云云といへるも、風をよめといふあかしなり云云、秋の空と男の心は夜に七度かはる〔世語畫〕

秋財布に春袋

秋は財布をぬはぬもの、春は袋をぬふへしとと、「秋はアキ、カラ」を忌み春は「張ル、フク」の縁に取れり、〔俳言集〕
秋の夕やけ鎌を研げ（翌日の晴を知ると）
秋のあらと娘のあらは見えぬ
あつて砕けよ ○ あたれば砕く〔毛吹草〕

〔小町踊〕春上 春水「春の日のあつて砕く水哉」安用〔俳言集〕
あたらぬまでもはづれざりけり〔全引太平記理勢抄〕
あたらぬものは夢と樽蒲打〔俳言集〕
あたるも八卦當らぬも八卦 又當るもふしき當らぬもふしき〔全〕
あたる罰は薦をかぶつても當たる
網の目に風たすらす ○ あみの目に風たまる〔毛吹草〕〔和漢古歌〕〔諺草〕
網目にも風〔本朝俳諧〕同之

〔和泉式部家集〕「あみのめに風もたまらぬ浦に来てあまならなくなり居つるかな」〔古今六

〔註四〕 紀實之「あみのめに吹來る風はとまる」とも人の心をかゝたのまん〔涅槃經梵行品二〕

日、善男子、假令擲網能繫縛風、齒能破鐵瓜塊須彌、如來終不爲衆生作煩惱因緣、〔皇朝古塵〕
網なくて淵なのぞみる〔和漢古語〕同之

〔抱朴子〕云、夫不學而求知、猶願魚而無網焉、心雖勤而無獲矣、〔漢書〕云臨函而羨魚、不如退
而結網、是等諺の出所也、〔塵草〕

網をもたず海をのろく、土佐にては網もたすの淵のろく、〔俚言集覽〕
網の目から手を出すやう〔全〕

網もやぶらず魚も漏らさず〔全引他我身の上〕
合せ物ははなれもの〔毛吹草〕同之

佛書に云ふ、會者定離の意なり、〔小町踊〕夏、更衣「綿ぬきははなれものをやあはせもの」
葉言 又チラシ、麻「あはせものははなれものなる鷹野哉」私言〔俚言集覽〕

あふは別れの始 ○ あふはわかれ

佛書に會者定離の説あり、是より出たる諺なり、〔白氏文集〕に云、合者離之始、樂分憂之所伏
〔玉生二品集〕家語「5つの間に年月のこと思ふらんあふはひとよのけとのわかれを」〔塵草〕

合はぬ蓋あれば合ふ蓋あり〔故事新言〕

合口に鏗打たやう〔大平策〕と小刀に金鏗打たやう〔俚言集覽〕

蟻の塔をくむが如し〔毛吹草〕〔和漢古語〕

蟻が大佛（山家集に見ゆ）〔俚言集覽〕○奈良の大佛蟻かひく

蟻の塔わたり〔世語盡〕

蟻の熊野参りするやう ○ 蟻の觀音参り

〔大闢記〕に、番士五十六人つゝ入替り、夜番廻番、蟻の熊野参する如し、〔全〕
蟻の穴から堤がくづる

〔韓非子〕千丈之堤以蟻蟻之穴潰、〔全〕

蟻の思ひ天まで通る〔全〕

甘い言（甘口と云に同じ）〔全〕

俗に人を偽り欺く言を甘言と云ふ〔毛詩〕に云、盜言孔甘〔左傳〕云幣重而言甘誘我也、〔塵草俗
語の部〕

甘い醋ではさかぬ 又甘い醋では食へぬ〔全〕

あまやかし 又あまやかし子を捨る

〔十訓抄〕「愚なるたぐひ、親のあまやかし、めのどのもてなすに従ひて、いつとなくかゝら
んするをたれもひて、成立たん末の事もわきまへぬなり」〔全〕
甘茶でろだつる人

大納言以下、辨少納言、官の外記、史などまで、饗せらるゝ事なり、盛折櫃二合（小餘大二
小二）一合甘栗（大八中八）〔全〕

甘茶をなめる（罵る詞、人に唾をなめさせる事）〔全〕
あまた交はりて事なかれ

〔北條五代記〕早雲殿廿一ヶ條、數多交はりて事なかれと云事あり、何事も人に任すへき也、
〔全〕

あたま剃んより心を剃れ

〔六道講式〕云。適剃頂不剃心。染衣不染心。可恥恥。燕鎖の歌に「何ゆゑに捨ける身うと折
々はすかたにはぢよすみろめの袖」〔釋尊〕○〔鴨長明歌集〕「剃たさは心のうちの乱髪つむり
の髪はどにもかくにも」

あたまのぎり／＼から爪先まで

〔孟子〕。摩頂放踵。〔大學衍義〕。程子所謂徹頭徹尾者。〔俚言集覽〕
あたまを地につけてあやまる

〔戰國燕策〕。頓首塗中。願爲兄弟。而請罪於秦。注。塗泥也。自鼻之甚。俗語以頭踐地の字あり〔全〕

あたまはり學問（しくさし學問を云土佐の諺）〔全〕○標題學問○本屋學問

あたまの濡ぬ思案〔全〕

あたまかくして尻かくさず

愚人の己が不善を掩ふを、雉子の糞に首を入れて、尾をあらはすに喩ふ、〔全〕
過ちの功名 又けがの高名〔全引世語盛〕
過ちは好む所にあり

〔淮南子〕善遊者溺、善騎者墮、各以其所好、反自爲禍、〔俚言集覽〕
誤を以て誤を續ぐ〔全引カナ、ホシ〕

あやまり證文の一字のやう（女の眉を濃くはらひたるが拙さなり）〔俚言集覽〕

あやまつた稻荷様のやう〔全〕
穴端に腰をかけて

老人などの、其身の死に近きを自らいふ詞なり、〔漢書〕嬰勝謂門人高暉曰、吾受漢室厚恩無
以報、今老矣日暮入地、豈宜以一身事二姓、見故主哉、〔全〕

穴の貉を直段する
穴を掘ていひ入る

明日の事言へは鬼が笑ふ〔本朝俳諧〕（ら之部來年の事云々の條互看）

〔和訓栞〕古詩に人無百年期、強爲千年謀、鑄鏡作門限、鬼見指掌笑、と詔府に見えたり、あす
の事いへは鬼か笑ふと云ふ語は是によれり、
明日えらぬ世

雪山に寒苦鳥ありて、其鳴音、今日不知死、明日不知死、何故造巢、安穩無常身、と云事涅槃
經に見えたり、〔續拾遺集〕と「さてもげにあすしらぬ世のちぎりころたのむにつけて戀しか
りけれ」〔和訓栞〕

明日の百より今日の五十（後の千金より今の百文の條互看）

明日は明日の風かよく又あすはあすの神がまゐる

あすは雨ふり人は盗人

あとの祭り〔毛吹草〕〔同漢古語〕

あど足で砂をかく

あどの鷹が先になる

あまなれやれのがものからぬなく

〔古事記中〕七十八丁於是大雀命、與宇迦能利紀郎子、二柱各讓天下之間、海人貢大贄、爾兄辭
令貢於弟、弟辭令貢於兄、相讓之間、既經多日、如此相讓非一二時、故海人既疲往還而泣也、
故諺曰、海人乎因己物而泣也、

蚤の一本針〔俳言集覽〕

あまの命を拾ふ〔全引武者物語〕

あま家で棒を掉る〔俳言集覽〕

あま家の拾ひ杵〔全〕

あまめくら

清言をいふ又無筆者とも云へり〔鷹筑波〕「文月を詠めぬ人や明めくら」〔全〕
あいた口へ牡丹餅○あいた口に團子
争ふ物は中からとる○ばいあふものは中からとる〔俳言集〕

〔戰國策〕云。趙且伐燕。蘇代謂惠王曰。今日臣來過易水。蚌方出曝。而鵝啄其肉。蚌合而箝其喙。鵝曰。今日不雨。明日不雨。即有死蚌。蚌亦謂鵝曰。今日不出。明日不出。即有死鵝。兩者不肯相舍。漁者得而并擒之。〔本朝俳〕

争ひたはりてのちぎり木「いさかひはてのちぎり木」〔漢古〕喧嘩過ての棒ちぎり〔俳言集〕

〔源平盛衰記〕に梶原が事をうしりて、争はりてのちぎり木のふせいなりとて、人みな口をつぐむと記せり、〔本朝俳〕

あらい風にも中てぬやう

〔小町踊〕冬編「あらい風わてじと着する綿子哉」政次〔源氏さりつは〕更衣母「あらい風ふせき

しかげのかれしよりこはきがうろそしづ心なき」〔俳言集〕

あらしにぎりふるゆかけ〔全〕

浅みに鯉〔毛吹草〕

浅き川も深く渡れ〔世語〕

浅黄帷子黒小袖〔全〕

麻につる蓬〔毛吹草〕麻の中のものもきはたすけすしてのつから直し〔和漢古〕

〔荀子勸學篇〕云。蓬生麻中。不扶而直。〔大戴禮〕云。蓬生麻中。不扶自直。白沙在泥。與之

皆黒。〔史記三王世家〕亦有此語。〔草〕

麻布できがしれぬ

江戸の麻布に六本木と云所あり、何處に六本の木ありや、誰も知る人なきより、人の氣の知れぬにかけて云、俳諧の發に「夜の菊花は麻布で黄かしれぬ」〔俳言集〕

油に水の交りたるが如し〔毛吹草〕〔和漢古〕

油盡きて火消るが如し

〔涅槃經〕云、如燈油盡、明燄則滅、衆生愛盡則見佛性、〔本朝俳〕

あつさ忘れて蔭わする〔毛吹草〕

〔韓詩外傳〕云、食其食者不毀其器、蔭其樹者不折其枝、あつさ寒さも彼岸まで

青きは藍より出て藍より青し(荷子の語之部氷は水より云云の條參看)

〔西行家集〕鶯の古巢よりたつはとぎす藍よりも濃き聲の色哉〔歌草〕
青蜘蛛を吉事とす

古より言ひ傳ふ、吉備大臣異域に於て、野馬臺詩を讀むとき、觀音の威神力を以て、青蜘蛛
を感す、從此吾朝青蜘蛛の下るを吉事とす、〔南府〕に云東方朔が占書に曰、蜘蛛集則有喜、
烏鵲噪而遠人至、〔西京雜記〕云、蜘蛛集而百事喜〔世說故事苑〕

鶯も鴨の氣位〔俳言集覽〕

鶯の道中するやう(胸と尻とさし出して内々に足の女のあるくを云)〔全〕

わひるに文庫箱を負はせたやう〔全〕

吾妻男に京女郎(萬葉家持の歌にあつたをのこ)〔全〕

吾妻鳥の啼わいたやうに(全引今昔物語)

わはうにつける薬がない〔俳言集覽〕

わはう拂ひ(大小の兩刀を取上げて追拂ふを云)〔全〕

赤子を裸にしたやう〔全〕

赤いは酒の管〔全〕

あがり目下り目ぐるゝ環の猫の目〔全〕

侮るかなきで目をつく

〔和訓栞〕「かなき」文選古訓に筵をよめり、俗諺わなづるかな木に目をつくなぞいへり、あ

なづると云詞〔業式部日記〕おとなしと人のあなづりきこゆるころあしけれ〔全〕

あなづりかつらにたをれすな〔毛吹草〕○あなづるかつらにたふれあり〔雜草〕

鱧の貝の片おもひ

(萬葉集)「伊勢のあまの朝な夕なにかつくてふあはびの貝の片荷ひして」俊成卿の歌に「な

みかゝる岩根につけるあはび貝こやかた戀の類ひなるらん」〔本朝傳〕

雨ふりて地かたまる〔毛吹草〕

阿波に吹く風は讃岐にも吹く〔全〕〔故事要言〕

近江盗人伊勢乞食

怪しきを見て怪しまされは其怪しみ自滅す

〔水滸傳〕云、見怪不怪、其怪自解、〔俳言集覽〕○「千金方差性篇」云、忽見鬼怪變異之物、既

強抑之勿怪、咒曰、見怪不怪其怪自壞。〔桂館野乘〕に云、太田道灌江戸城を築て、初て居りしとき、庭前に菌を生ず、大さ大傘の如し、衆皆怪異とし道灌に告ぐ、道灌之を見、莞爾として笑て曰、此菌大なりと雖とも凡菌のみ、何ろ怪しむに足らん、若し此菌倒生せしならば怪と爲すへしと、既にして其菌倒生す、衆視て愕然たり、愈以て怪と爲す、道灌曰、余か言を待て倒生す、是余か指揮を受るものなり、若し妖怪ならんには、何ろ人の指揮を受んやと、數日の後、道灌左右數人と、爐邊に茶を喫す、忽ち爐中の鐵架自ら躍て壁に出、躍々として止まず、左右相視て色を失ふ、道灌熟視笑て曰、人は二脚なれども能く躍る、今此鐵架三脚あり、躍るも亦宜ならずやと、茶を喫し自若たり、暫あつて鐵架自ら止む、道灌曰、凡此等の異皆狐狸の爲なり、余か此に城さしより、其巢窟を失ひ、告くへき所なきを以て、聊衆を怖すのみ、何ろ怪むに足らんやと、竟に意と爲さず、既にして妖怪自止む、あやつり人形の糸のされたやう〔狸言集覽〕あこぎが浦にひくわみ

〔古今六帖〕「あふ事のあこぎが島にひくわみのたひ重ならば人しりぬべし」あこぎが浦の本歌なり「あこぎが浦に引綱は度重なればあらはれそする」といふものは、古今六帖の歌を、

あやまりしなり、〔孝經樓漫筆〕
飽くまで食ふて寝ると牛になる

〔嬉遊笑覽〕飽きて食て寝れば牛になると、小兒に教ふるは、食後に臥さしめざるなり、さて又此にも諺あり、名所和歌物語 三浦心撰に見しは、今愚老みちのくへ下りしに、栗原の郡つら川と云ふ在所につきたり、爰に池中に島あり、昔此里にぬひゑもんどいふ老人あり、僧を一人ふちする、此僧經をもよます、晝寢ばかりをせし處に、有る時黒き牛一匹はなれて、庭をはねまはる、縫衛門とらへて見れば、いまだはなづらをどほさず、此牛主なしとて、牛廐を過しつなぎ置ければ、晝寢を好む僧が牛になりたるなり、縫衛門晝寢して、又牛になりたり、是はきたいのためしなればとて、池をほり、此島に二疋の牛を放ち置たる事、百二十年以前の事なり、今も其二つの島に、時々出て見ゆると語る、愚老聞て無智の坊主、里の名に負つたら皮厚き牛となりたるも、世に不思議なり、「智はうすく欲にまどへるびくそくの面皮あつく名にやをふうし」此外僧の牛になりたる古物語多し云々、
あたゝかに着飽まで食ふ、世話盡

〔孟子〕云、飽食暖衣逸居而無教、則近于禽獸、

あなたをいへばこなたのうらみ〔毛吹草〕○あなたをいへばこなたのうらみけら腹立てつぐみ喜ぶ〔和漢古語〕

あが佛 ○ 吾佛尊し(わ之部互看)

〔源氏竹取〕などに見えたり、吾佛の義、吾念する人をさしでいへり、持佛より出たる詞にやといへり、伊賀阿我の観音〔親房伊賀記〕に見ゆ〔一葉集〕に親鸞上人「わはれにも二世をかけた里人のわが佛とや願ひ置らん」〔和訓栞〕

阿彌陀も錢はど光る〔俚言集覽引カナ、ホシ〕○阿彌陀の光も錢次第仰きて唾はく ○ 寝て吐く唾て身にかゝるとも

〔四十二章經〕云。惡人欲害賢者。仰天而唾。唾不汚天。還汚己面。諺云、にれたり、〔書〕怨は恩て報せよ ○ わだは恩にて報する〔毛吹草〕

〔老子〕云、報怨以德、諺これに本つけり〔全〕 ○ 〔鶴林玉露十六に云〕或曰以德報怨何如、子曰、何以報德、以直報怨以德報德、佛經載、釋迦佛在山中修行、歌利王入山獵獸、問佛獸何在、佛不忍傷生不應、歌利王怒截落佛左手、又問不應、又截落右手、佛是時即發願曰、我若成佛先度此人、無令枉害衆生、其後成佛、即先度之、十六弟子中、陳橋如尊是也、〔法苑珠林

九十九〕ニ載る所の新婆沙論の説なり、臂を斬るの縁少く異なり、歌利を羯利に作る、陳橋如は橋陳那なり云々〔漢語大和故事〕○〔梧窓漫筆一東照神君は、御幼少より御一生體をも恩にて報せんと御心掛被成たりと、晩年御近邊の人に御物語ありしと承り傳ふ、是は論語とは違へど禮記に以德報怨寛身の仁也云々と符合して難有寛大の御心なり云々
あまさかさま

〔平治物語〕に云、清盛いはく、池殿の御事は、いかなるあまさかさまの仰なりとも、違ふまじどころ存す、〔本朝俚語〕

天の探女

俗にものをさまたくる人われは、われはあまのさく或、あまのさくと云、是は日本記に、天神より使として、無名源成天書云無名姓者天之後國神也といふ者を、豊葦原中國にくだし玉へるとき、天の探女といふもの、天若彦にさかしらして、射ころさせし事を載せたり、是より出たる諺なるべし〔本朝俚語〕

あめのほくらもはしたてのまゝに ○ 神のほくらもとも云ふ

〔日本書紀〕垂仁天皇八十七年、春二月丁亥朔辛卯。五十瓊敷命謂妹大中姬命曰。我老也。不

能掌神寶。自今以後必汝主焉。大中姬命辭曰。吾手弱女人也。何能登天神庫ホツク。神庫此云五十瓊敷命曰。神庫能高。我能爲神庫造梯。豈願登庫乎。故諺曰。天之神庫ホツク隨樹梯之。此其緣也。あめねぶらする。

是は内心に人を害せんとして、口には甘言を以て交はる事の喻也、〔大學衍義〕云、啗以甘言而陰陷之、〔龍草〕

- あげ舟に物を問へ〔毛吹草〕
- あがつたり大明神〔俳言集覽〕
- あたら男に尾がさがつた〔全〕
- あづかり物は半分の主〔全〕
- あだし野の露鳥邊山のけふり〔徒然草〕
- あふた時は笠をぬげ
- あふも取らず蜂もとらず
- あきらめは心の養生
- あんじるより産むがやすい

◎さ之部

三界無安

- 〔法華經〕云三界無安猶如火宅〔龍草〕三界は上界中界下界也又欲界色界無色界なり又佛界衆生界已界なりとも云ふ
- 三界に垣なし〔世話燕毛吹草〕
- 三界の苦海〔俳言集覽〕
- 三界流轉の間〔全〕
- 三界の首柳又子は三界の首かせ〔全〕
- 三界は氷の上の泡〔全〕
- 三界の火宅四衢の露地〔全〕
- 三年三月

俗説に、應神天皇は、三年三月にして誕生ましましける故、三年三月と云世話ありといへり此説非なり、日本紀に據て考るに、仲哀天皇八年己卯の年、天皇神功皇后と共に、筑紫に幸ましくける、九年庚辛の年二月、天皇忽になやみ玉ふ事ありて、翌日に崩れさせ玉へり、

ろの年神巧皇后は、御懐胎ながら、天皇の仇をむくはせ玉はんため、三韓を征し給ふ、物こ
 と御心のまゝにて、三韓も降服せしかば、御歸朝ましまして、十二月十四日、應神天皇を筑
 紫の蚊田にうませ玉へり云々、あくる三年癸未の年正月三日、譽田皇子を立て、太子とし給
 ふ譽田皇子は、即應神天皇の御事なり、されは譽田皇子は、己卯のとし正月より、神后の胎
 内にやどらせ玉ひ、ろのとし生れ玉ふといへとも、實に天下の主と定め玉ふ事は、癸未の年
 正月三日なれば、是を三年三日と云ふ、庚辰の年より壬午の年まで三年、癸未のとしは、春
 立て三日なれば也、是を云わやまりて、三年三月と云ひ、殊に前後三年三月にして、譽田天
 皇生れたまふと云は不稽の誤也、「愚草」○「愚按」俗語に三及八の数は、一に對して多きを
 稱せり、尤双紙にも、吳越のみたれ三年三月とあり、福も三年置けは用にたつなどいへば、
 強ちに三月又は三日に限らず、大襟程久しき喩となせるなるへし

三年にかたふ笑ふ
 薩摩の諺なりかたふは偏類也少笑人を云ふ「俳諧集覽」
 三年もこらえる「全」
 三年たては三歳になる

三月庭訓公治長

此は倦やすき人の庭訓往來を手習ふに三月のあたりをやめ論語は公治長の篇にて止めるをい

ふ又三月庭訓須磨源氏とも云ふ土佐にて三月庭訓やの加減といふ「俳諧集覽」

三月の櫻さめ

嫁娶あるに三月を櫻さめとてさらふ也「全」

三月のさがりたご

江戸の氣候三月に至て紙蔭わがらざるをいふ「全」

三月の花見蟲

「天子集」「恥をしらみとなるや乞食」と云句に「小町ころ花見の頃に立出づれ」重頼「全」

三月綿をまかぬ馬鹿四月綿詩く馬鹿

信濃の諺綿の詩句の三月にある時は出来よろしく四月にある時は出来あしとなり

三人あれば公界「世話盛」

三人よれば人中「毛吹草、和漢古語」同之

「日本紀」に衆中をヒトナカと訓めり又古書に衆字作冊「國語」ニ人三爲衆と見ゆ「俳諧集覽」

三人よれば文殊の智恵

〔温古要畧〕三人よれば師匠の出来〔韓非子〕語曰、莫三人而迷必有一智〔論語〕三人行必有我

師焉、〔全〕

三人ばくちの一人を食、〔全〕

三人張に十三束、三人張は弓十三束は矢束也、〔全〕

三度目には馬の鞍も置きわはされぬ、〔民のかまこ〕○三度目は馬の鞍

三度目は馬からこけるより早い、〔土佐の諺〕〔俚言集覽〕

三度目の神正直、〔全〕

三度の食を一度に食ても、〔全〕

三度飛脚に三度あり、〔全〕

三途の瀬踏、〔世語〕〔三途は火途血途刀途を云ふ〕

三千世界、〔俚言集覽〕

三百六十餘箇日、〔全〕

三十振袖四十島田、〔全〕

三十の尻くくり、〔全〕

三國一

〔醒睡笑〕老僧のはたらき三國一〔毛吹草〕三國の一はなしや富士の雪、又三國一とて婚儀の時の謠あり〔小町踊〕チラシ九月十三夜「月は誰三國一のいもと妹」立圃又醜屋の招牌に書す

〔全〕○三國は日本唐土天竺を云

三國一の體○三國一の富士の山○三國一の彌陀如來、〔善光寺佛を云〕

三方の棄物

仁宗皇帝勸學文云、朕觀無學人、無物堪比倫、若比於草木、草有靈芝、木有椿、若比於禽獸

禽有鸞鳳獸有麟、若比於菽土、菽滋五穀、土養民、世間無限物、無比無學人、〔本朝傳記〕

三ぼうもてなしがら、〔毛吹草〕

三世の奇縁、〔世語〕

三途の瀬ぶみ

佛經に火途、血途、刀途、これを三途とす、火途は地獄の焦熱の苦ある故なり、血途は畜生道なり、畜生は互にかみあふて血をのむ故なり、刀途とは餓鬼道なり、餓鬼は爪刀の如くに

なりて饑ゆる故、互に切さくなり、和訓美津世加和〔世説支那草〕
 三寸は見なほし〔世説盡〕毛吹草
 三寸の見通し〔俳言集覽〕引〔カナ、ホシ〕
 三五の十八

此はこれれか心度の差過を知らずして自ら得たりとする志の喩也〔梅草〕己が屋の内にては道理あつて外様にては三五の十八ありとかや〔見聞軍抄八〕俗に所謂三五十八不合算に比して云云〔俳言集覽〕

三一小僧の哭説經〔雙六の諺〕〔全〕
 三尺さがりて師の影を踏まず 又七尺とも云〔北條時分諺留〕三尺去て師の影を踏まず〔全〕
 三すくみ

蛇蛙蛤蝮をいふ俗三竦縮の字を用ふ〔關尹子三極篇〕蝸蛆食蛇、蛇食蛙、蛙食蠅、蛆互相食也〔東坡詩〕睜目知誰暝、蟠腹空自脹、慎勿因蜈蚣、蝮蛇不放放、近世の狂句三すくみ羨殿様國家老〔全〕
 三里のまはり

三里の灸灸の場所の廣さをいふ〔世説故事苑〕明堂灸經云、男子三十以上不可不灸三里三里所

以下氣也、

三遍廻つて煙草にせう

座頭行儀（もてなしの饌菓などを包みもてかへるを云）〔俳言集覽〕

座頭根性〔全〕

座頭さへ京へのぬる〔全〕 ○座頭の京のぼり

座頭に沸湯をおびせるやう〔全〕

座頭の足駄に物のはさまりたるやう〔全〕

座頭のあたを戸板でたたく〔全〕

座頭の垣のそき〔全〕

座頭の索繩くふやう

〔尤草紙〕見苦しき物の品にて座頭の索繩喰〔全〕

座頭の中座敷〔全〕

座頭は牛七疋ほどすねる〔世説盡〕

座頭のぬいと月夜の明るは人しらす〔全〕

座頭の日高に着いたやう ○ 御前の日高に着くやう 【言集】
座頭を川中てはぐ 【全】
坐して食へは山も空し

【元曲選】坐喫山空、又秦簡夫東堂老、有坐喫山空、立喫地陷之語
猿も木から落る 【毛吹草】 【同之】

淮南子云、猿杭顛蹶而失木枝是史記に所謂、智者千慮必有一失と云に同じ
猿に烏帽子 【和漢書】

【史記項羽紀】云、説者曰、人言楚人沐猴冠而耳、信然、【全】 【通俗編】云、沐猴楚人語也、寧
即猴耳、

猿の水練魚の木登り 【太平御記】

猿のろくろ 【俚言集】

人の執務に缺掌する態を装ふて、其實は爲す事なきをいふ、
猿の尻笑ひ 【全】

猿か自ら尻の赤さを知らずして、他の尻の赤さを晒ふをいふ、

猿の人真似 【全】

猿は人に毛が三本たらず

或曰是は猿に識見なきを云ふ世説云、願長庚晝裝杖則類上益三毛、人間其故、願曰、裝借偽
朗有識見、正此是其識覺、【シカタイナシ】猿かこきものなれども毛が三本足らずして
人にえならぬ云云 【全】

猿樂は庭の者舞々は縁の者 【全】

猿樂の跡は七日面白し 【長のかまき】 ○ あとの祭三日面白し 【俚言集】

猿をくくる如し

【涅槃經】云、諸獵師純以糝膠置之案上、用捕欄猴、欄猴癡故往手觸之、觸已粘手、欲脫手故
以脚踢之脚復隨着、欲脫脚故以口嚙之、口復粘着如是、五處悉無得脫、於是獵師以杖貫之、
負還歸家、【本朝傳】

猿の雀亂又猿の雀亂したやう 【俚言集】

猿の餅買ふやう（右から左といふ語の如し） 【全】

猿の筈を折たやう（我爲して我駭くをいふ） 【全】

酒に酔ひ本性を忘れず、〔毛吹草〕全之 ○酒醉本性たがはず

〔事文類聚〕に云、女子と云へる人、好て大酒す、其人常に戒むれども聴かず、一日大に酔て嘔す、門人密に録の腸を取て、嘔の中に交置き、女子に見せて云、凡ろ人には五臟ありて能く活く、今公大酒せしに由り、臟一つを吐たり、四臟にて何ろ生さんやといひければ、女子熟視して曰、唐の三藏法師さへ長生したりと聞く、吾は今四臟あり、何ぞ死なんといひけるとなり、是も本心の違はぬをいふなり云々、〔古事要言〕 ○東坡飲酒説曰、世人言、醉時は醒時語、此最名言、

酒もりて尻さらる ○酒買ふて尻さらる、〔俳言集〕

是は奔走して御氣に入らんと思ひ、結句機嫌を傷ふ種となりて、却て罪を得、又は元來吾心に叶ひて、能く欲する處に従ふが故に、愛して酒などを吞ませ、彌能く勤めさせんとするに却て酒によりて事を蔑にし、大に心に背く者などあるをいふ、〔全〕

酒は諸道の邪魔、〔俳言集〕引太平記理蓋抄京軍 ○邪魔一に妨げともいふ

酒は本心をあらはす、〔全引理蓋抄〕 ○上戸本性をあらはす、〔し之部互看〕

酒は愛の玉帯

〔連歩玉葉集〕に酒異名「掃愁帯」又「忘愛物」〔俳言集〕 ○〔述異記〕に云、甘泉道中に虫あり、口齒悉く具はる、東方朔之を見て曰く、此口へ秦時牢獄の地なるが、罪人の愛積りて其氣此の虫となるなり、酒は愛ひを解くの徳あり此の虫を酒に漬さば即消えんといふ、是に於て此の虫を取て酒中に置きければ忽ち消ゆ、〔搜神記十一〕に此事を出す、彼には虫を牛に似たる歌とす、〔世説故事苑〕

酒は三献に限る〔全〕

酒は酒屋に茶は茶屋、又酒は酒屋餅は餅屋〔全〕

酒に呑まれる

〔法華經抄〕初則人呑酒、次則酒呑酒、後則酒呑人〔全〕

酒が盡れば水を呑む

〔東坡詩〕有酒醉不辭、無酒斯飲水、〔本朝俳諧〕

酒に酔て泥となる

東國の俗語に、酒に酔たるものを泥とよぶ、〔李太白詩集〕云、三百六十日、日々醉如泥〔全〕
酒は百薬の長

〔食貨志〕云、莽知民苦之、復下詔曰、夫擅食肴之將、酒百藥之長、喜會之好、〔考證千典〕酒は雨霧をばらふ

〔居家必用十九〕に云、大霧不宜遠行、行宜飲少酒從禦障、〔世説故事苑〕

士どこがぬば朽てくちせぬ〔毛吹草〕〔和漢古語〕

士は胎内にてぬき事を聞き七歳にて敵を撃つ〔關戸誌〕

士は渡り草 ○ さむらひは渡り者〔世語盡〕

〔承久記〕に、今ころ京方へも参り給ひたれ、其も關東よりころ進らせたり、侍は渡り草、昔

の躰くところよれ、今日ある用もなき物を〔陰徳太平記〕侍はわたりもの〔俚言集覽〕

士は食はずと高楊枝〔俚言集覽〕 ○ さすが士食はねと楊枝〔良のまこと〕 ○ 武士は食はねと高楊

枝〔ふ之部参考〕

士二言なし又君子二言なし〔全〕 ○ 武士に二言なし

〔恒言〕に云近古の諺に武士に二言なしといへり越語に、王曰無是貳言也、吾已斷之矣、是其

根源也、

鷺は起てどもあどを濁さず〔公引北條時分朝野群載〕 ○ 起つ鳥は後をけがさず〔蘇草〕

人はなからん後の世に誹らるましく、常に心あるへき事なり、さらでも、久しく住なれたる所を離るゝ時は、必ず人に忍ばるゝふしをも、爲し置くへくころあらまほしけれ、ゆならぬ梅か香は、人のものに折てやりたる跡のなごりさへ、猶なつかしくればゆるぞかし、〔蓬蘚の一〕

鷺を鳥にむららふ ○ 鷺を鳥に言ひ黒める

〔犬子集〕「白すみは鳥を鷺の喙ひ哉」〔徳元〕〔俚言集覽〕

鷺にされた

淀邊にて云ふ諺なり、閉門されたるをいふ、鷺の孤立したる如くなりたるに喩ふ、〔全〕

鷺の泥輪を踏むやう〔全〕

鷺足をつかふ〔全〕〔鷺歩といふに同じぬき足をいふ〕

さばるに煩惱〔毛吹草〕〔世語盡〕

〔吾吟我集〕「かまはしな是もさばるに煩惱の犬ははげしく人にかみつく」

さばらぬ神に崇なし〔俚言集覽引及山雜談〕

さばり三百 全引カナノホシ

さノ部

〔毛吹草〕「落す葉やさばり三百木々の風」

さはらはひやせ

さはつたら斬てしまへと云事「毛吹草」六月十五日江戸山王祭「暑き日のさはらはひやせ神祭」

慶友「俳言集覽」

才覺の花散り智恵の鏡もくもる「毛吹草」和漢古語

才智は身の響「梅園叢書」

才子に病多し

竿の先に鈴附けたる如し。○竿の先の鈴「世語集」

是を口かしましく、見る物開物につけて、用にも立たぬ事をいふて、心深く實にもと思ふ事は驚はかりも無き人に喻へたり、玄旨法印の「袖中抄」ニ、須磨の鈴舟と云事、源氏都より淀川の船に召されて、須磨に左遷玉ふとき、驛路の鈴を立る也、驛路の鈴と云は、天上人の田舎へ下り玉ふ時、馬の前へ此鈴を振らせて、道すからの非常を替ひる也、若舟に召されるれば竿にかけて立る也、されは日本は神國なる程に、何事も神代の法式の儘にする習はしなれば、此鈴をも振る也、梅園按するに此鈴の事、神代に出たりとは、内宮御鎮座本紀、倭姫世紀等也、此遺法に因り、今も驛馬の頭に鈴を付る也、「故要考言」

竿の先て星を打つ

〔無門關〕押棒打星、〔俳言集覽〕

竿てせゝるやう

寒さ小便餓るさ欠「全」

寒さ時にきたなき物なし餓るさ時にまづさものなし

〔史記秦本紀〕云。寒者利短褐。而饑者甘糟粕。〔醫事〕

在所育ちの麥飯「全」

在所住居の喜三次「全」田舎者のノンキなるをいふ

細工は流々仕上を見やれ「全引北條時分診留」

細工貧乏人寶「俳言集覽」

さまくゞりのふへん咄

〔全引北條時分診留〕○〔狭間くゞりは〕命者をいふ

さばあま

〔日本書紀應神天皇〕三年十一月處々海訛味之不從命、訛味此云佐摩賣玖則遣阿曇連祖大濱宿

翻平其誦味、因爲海人之宰、故俗人謔曰佐摩阿摩者其是緣也
先だつ鷹

〔空物語〕俊蔭さきたつ鷹は有けむ
先んすれば人を制す

〔史記項羽本記〕先則制人、後制於人
櫻は花にあらはるゝ〔毛吹草〕同之

〔金葉集〕源順政「深山木の其梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり」〔羅草〕
盛の花を野てくらす〔俳言集〕

皿に桃もる〔毛吹草〕
さしやき八丁〔全〕○さしやき千里〔俳言集〕

〔淮南子説林訓〕附耳之言聞於千里
山椒は小粒てもからし〔全〕

山賊の罪を海賊かあぐる
〔太平記雲景未來記〕喩へは山賊海賊と寄合て、互に犯科の得失を指合が如し、〔全〕

去あどへは行くとも死あどへは行くな〔全〕

肴は上臈に焼かせよ餅は下衆に焼かせよ〔全〕

草履片々下駄かた〜〔全〕

産三兩に子五兩〔全〕

算術者の不身代〔全〕

懺悔に罪を亡す〔世語〕○懺悔話をすれば三年の罪が亡びる、
里腹三日

材木屋の蔭て高くどまる

さじの先より口の先

さやはしりより口ばしり

◎さノ部

木に竹をつぐ〔和漢古語〕同之 ○木に竹をつぐ如し〔毛吹草〕木に竹を續たやう〔俳言集〕

〔萬葉集〕大伴宿禰池主歌序云、俗語以藤續錦是諺の意に同し〔本朝俳〕 ○〔鹿筑波〕木に竹
をつげるためしか藪椿

木を木金を金〔毛吹草〕〔和漢古語〕○石を石金を金

木のはしのやうにおもふ 又 木されのやうにおもふ〔俚言集覽〕

〔枕草紙〕法師ばかりうらやましからぬものはわらじ人には木のはしのやうに思はるゝ〔毛吹草〕木のはしのやうにいはるな梅ぼうし

木をはなれた猿 ○木から落た猿〔世語集〕

〔赤染衛門家集卷三〕たよりなきたびどは、我それもひつる、木をはなれたる猿もなく也〔淮南子〕猿穴題蹶而失木枝、〔皇朝古語〕○〔説苑〕香舟之魚蕩而失水則制於蟻蟻者離其居也、猿猴

失木禽於狐貉者非其處也、

木の皮ふんどうし〔世語集〕

木本竹末

木をわるには本より、竹をわるにはうらよりするをいふ、〔俚言集覽〕

木一倍本失ひ

木は原價廉にして、一倍の利ありても、遠路を販きては、費多くして贏利なきをいふ、〔史記貨殖傳〕諺云、百里不販擔、千里不販驢、居之一歲種之以穀、十歲樹之以木、百歲來之以德、〔全

木草物言ふ〔全〕

〔日本書紀〕葦原中國者、磐根木株、草葉猶能言語、

木草にも心をれく〔全〕

木に餅のなるやう

甘言をいふ〔鷹筑波〕木に餅のなるとやいはん松の雪〔全〕

木になつて腹をたつ〔全〕

木の俣から生れもせず又木の俣から出たやう〔全〕

木て鼻をこくつたやう〔全〕

木のぼり川立馬鹿がする〔全〕

木の曲りは直れども人の曲りはなほらす

木の實は本にこぼるゝ

氣のつかぬ人にはもらふへし〔世語集〕

氣は張弓〔俚言集覽〕

氣は心〔全〕

氣のよい佛〔全〕

氣のよい者は爺なし子をばらむ 又 氣の弱いものゝなし子をうむ〔全〕

氣ちかひも獨はくるはず〔全〕

氣ちかひの蜂にさされたやう〔全〕

氣を喰て茶を飲む〔全〕

氣の毒や蠅の頭〔全〕

氣で氣を病む

氣の利た化物は足を洗ふて引込む時刻 又 おばけの引込む時分

是は夜過て曉時分をいふ、因て事の時機におくれたるに、轉し言へり、

聞きにくきもの、世になしものゝ先祖咄

愚按、世になし者とは、世にあるの反にて、數にも入らぬ微賤の者をいふなるへし、〔菅家御

集〕に「おはれ我うき今までの友なき人のなさは世にありしは邊」とありて、世にあるは

榮達の時をいへばなり、〔俚言集覽〕

聞て千金見て一毫〔北條五代記〕

〔蠅打〕、聞於千金重、見於一葉輕、〔全〕

聞て極樂見て地獄〔俚言集覽〕

聞取り學問〔全訂目録草〕○耳學問

〔顔氏家訓〕嘗見謂於聽爲夸毗呼高年即富有春秋皆耳學之過也

聞取り法問〔全訂太平策〕

聞けは氣の毒見れば目の毒〔俚言集覽〕

聞くは其時の恥聞かぬは一生の辱 ○ 聞くは一旦の恥聞かぬは未代の恥〔全〕

聞かすの一杯〔全〕

雉と鷹〔毛吹草〕○多勢に無勢雉子と鷹

雉のかくれ

隠れても怨さがし出さるゝをいふ〔盛衰記卷三〕かほどの事に成て隠れ忍ひたればいかばかり

の事う、雉のかくれとやの風情か、〔皇朝古蹟〕

雉子も鳴かすば打たれまじ

〔河内志〕に云、津の國垂水に、岩氏と云人の娘、河内禁野の人のもとへ、嫁して行けるに、物

をいはずりければ、瘞なりと思ひて、たるみへ送りはへる、交野を過るに、雉子なくを聞て夫弓もて之を射る、其時、女輿の内より聲をあげ「物いはじ父はながらの橋ばしら鳴すは雉も射られざらまし」とよみければ、さては瘞にてはなしとつれ歸りぬ、〔國文編〕

雉子のひたつかひ。
〔古事記上五十二丁〕亦其雉不還、故於今諺曰雉之頓使トシヒトシカヒ本是也、是より先天若彦、天神の使命を奉けて、葦原の中國に降り、荒振神等を平らぐ、八年に至るまで復命せず、故に天神、雉名鳴女を遣はして、其狀を問ふ、天若彦無狀にして其雉を殺す、〔傳〕に云、頓を比多と訓む事は、書紀に頓丘此云昆陀烏とある、此れ正しき據なり云々、此の比多てふ言は、比多須良、比多毛能など、今の世にも云ひて、純ら一むきに片よりて、他を雜へぬ意なれば、本は一より出る事なるへし云々、さて此を諺にいひならはせる意は、此の雉の射殺されて、還らざりしに因て、人の世になりて、凡て大事の使をやるに、副使従者など無くて、獨なるをば、雉の頓使と云て、忌む事にせしなり、さるは上に其雉不還と云て、此諺を擧ぐれば、不還例を忌ひなりけり云々、〔返矢恐るへしの條參看〕

雉子の淺智慧〔俚言集覽〕

雉子の片股鷹の食〔回文〕〔全〕

君若たれば臣臣たり〔世語〕

〔論語〕君君、臣臣、父父、子子、諺是に本つけり然れども諺の意は、明君の下には必賢臣あるをいふ、若夫君臣の大義に於ては、君君たらずと雖も臣は臣たらざるへからず、〔古文孝經序〕に孔安國曰、君雖不君臣不可以不臣、父雖不父子不可以不子〔乘燭譚〕云、晋書劉惔が辭左傳杜氏の註、唐書韋湊の傳等に、此の語あれども、孔安國尤も古しと見たり
君を思ふも身をねもふ〔全〕

〔三五記〕事可レ休「ねはかたの秋の寢さめの長さ夜も君をぞ祈る身をねもふとて」〔愚按〕此語未だ善を盡さず忠臣は、君の爲に其身を有せず、楠公の詠に云、「身の爲に君を思ふもふたこゝろ君の爲には身をねもはじ」豈尊からずや、

君こゝろわれば民こゝろあり〔俚言集覽〕
君は舟臣は水〔毛吹草〕同之

〔家語〕夫君者舟也、庶人者水也、水所以載舟、亦所以覆舟又〔荀子〕に出つ〔釋義〕
君辱められ臣死す

君辱臣死、の語史記に出づ、蓋古語也、是大石長雄等が執りたる主義にして、千古不磨の金言なり、人臣たるもの宜く紳に銘すべき事なり、
金言耳に逆ふ

〔家語六本篇〕長樂若於口而利於病、忠言逆於耳而利於行〔毛萇〕○〔和訓栞〕に忠言を金言といふ、梵語に、佛語を金言といへり、

金の銜をほらばらす〔賄賂を行ふをいふ〕〔俚言集覽〕

金柑わたさの蠅すべり〔全〕

金の鯨雨ざらし

金の茶釜は七ツもある

金鍔さすか菰着るか

狐か虎の威をかる〔毛吹草〕同之

〔戰國策〕云、荆宣王問群臣曰、吾聞北方之畏昭奚恤也、果誠何如、群臣莫對、江乙對曰、虎求百獸而食之得狐、狐曰、子無敢食我也、天帝使我長百獸、今子食我是逆天命也、子以我爲不信、吾爲子先行、子隨我後觀、百獸之見我而不敢不走乎、虎以爲然、故遂與之行、獸見之皆

走、虎不知獸畏己而走也、以爲畏狐也、今王之地方五千里、帶甲百萬、而專屬之昭奚恤、故

北方之畏奚恤也、其實畏王之甲兵也、猶百獸之畏虎也、〔毛萇〕

狐を馬にのする如し ○ 狐馬にのせたる如し〔毛吹草〕〔和漢古語〕

是たゞしからぬ事のとへなり但し〔今昔物語〕に云、むかし仁和寺の東に高陽川といふ河あり、其河のはどりに、夕くれがたになれば、清けなる女盃たゞすみ居て、馬にのりて京の方に過る人あれば、其馬の尻にのせてたべどのろみのせぬれば、四五町も至て馬よりたどり下り狐になつてにぐる事、たび〜になりぬ下略〔本朝俚語〕

狐の子はつらじろ 毛吹草 ○ 狐の子は面が白

〔吾吟我集〕化粧にて人をまよはすたはれ女は狐ならぬぞこれもつらじろ

狐の媳入〔日の照ながら雨ふるをいふ〕〔俚言集覽〕

狐死して丘に枕す

是は本を忘れざる喻なり〔禮記檀弓〕云、狐死正首丘、

京に田舎あり〔毛吹草〕〔和漢古語〕同之

〔小町踊〕冬、水鳥京に田舎田舎に京や都鳥〔瓜瓞〕同〔テラシ、夏菊〕夏菊や京に田舎の萩の

色」立甫〔傳言集覽〕

京の妹に隣かへず〔世語集〕○京の從弟に隣かへず〔世語集〕(遠き親類より近き他人といふに同じ)

京の夢大阪の夢

夢物語をする前に、かく言ひて後かたるものなりといへり、〔傳言集覽〕

京の着たふれ又京の服たふれ信濃の喰たふれ下總の傲たふれ又堺の喰たふれ又紀州の服たふれ水戸の香たふれ尾張の食たふれ〔傳言集覽〕

京からもたちついて〔全〕

伽羅て作た佛同前〔全〕

伽羅をいふ〔諛言をいふ〕〔全〕

伽羅のろらたさ〔全〕

機の前に藥なし〔世語集〕〔大和故事〕〔和訓栞〕同之

愚痴暗鈍なる機の人ば、何の證もなき事にも、能く驚き迷ひて、心を苦しめ、氣を惱まして終に病となるものあり、如此の愚迷の煩に罹るもの、耆婆遍鵠が大方秘藥を以てするも、治

すべからず云々〔諸證辨疑錄〕恠病の部に或人旅に出て、郵亭に一宿しけるに、其曉に至て咽渴ける程に、不圖起て水を求むるとて、手水鉢に探り當りしかば、嬉しく思ひ手を以て香て寢たり、夜明けて見けるに、彼の手水鉢の水には、蟻虫ありて蠢々したるを見て、忽に心さはざし、香香たる水の内、定めて虫を香みつらんと思ひしより、腹痛み、寒熱往來して血を濁する事數石な、諸醫方術を盡せども驗なし、吳復圭、其病の起る所を聞て藥を製す其方に云、田中の泥を取て、赫糸を細に剉みて、掻交せ小丸となし、蠟を以て封して吞ます、此時病者に教へて、蒸器を窺はしむるに、果して蒸の内に、彼の江線を見るに至りて、病愈たりと云、〔故事警言〕

機によつて法を説く〔毛吹草〕〔世語集〕同之 ○人見て法どけ

〔法華普門品〕云、應以佛身得度者、即現佛身而爲說法、應以辟支佛身得度者、即現辟支佛身而爲說法、〔全〕

機を見て作つ

〔易繫辭傳〕云、君子見機而作、不俟時日、〔本朝傳〕

機に臨て變に應ず〔傳言集覽〕

昨日は今日の昔〔毛 草同之〕

〔新勅選〕源光行、あすもあらはけふをもかくやおもひ出んきのふの暮そむかしなりける〔新後拾遺〕惟宗光吉朝臣、別れにし月日や何のへたてにてきのふは人のむかしなるらん〔撰草〕

昨日のつゝれ今日の錦〔俳言集覽〕

昨日は嬌今日は姑〔全〕

昨日は人の上今日は我身の上〔全〕

昨日の淵は今日の瀬

〔古今集〕讀人不知世の中は何か常なるあすか川昨日の淵ろけふの瀬になる〔俳言集覽〕

筋玉の垢はともない〔俳言集覽〕

筋玉もつりかた〔全〕

筋玉を吊しあげる

膽をけしてさわぐをいふ〔犬筑波〕玉をつりその青柳の糸と云句に「春風にふらめさわたる

松ふぐり〔全〕

錐は袋を通す〔毛 草同之〕

〔史記平原君傳〕平原君合從于楚、得食客十九人、毛遂自薦曰、臣得如錐之處囊中、乃脫穎而去、非特末見而已、〔撰草〕○〔吉物語〕に錐ふくろに脱する習は、つゝむとすれど、此事京に聞えしかは云々、錐をたつるところなし

〔莊子〕云、堯舜有天下、子孫無置錐地、〔前漢書〕云、舜無立錐地、有天下焉、〔本朝撰〕

客の朝起〔俳言集覽〕 ○客の朝起宿の迷惑

客人發句に亭主脇〔全〕

客と白鷺は立たが見事

義理とふんどしはせねはならぬ、又義理と輝はかゝされぬ〔俳言集覽〕

義理のまからみ、又義理にからまる〔全〕

義理と人目

兄弟は他人の始り〔世語〕梅草同之 ○おとゝえ他人の始り〔和漢古語〕

〔鶴林玉露〕、陶淵明贈長沙公族書云、同源分派、人易世疏、慨然寤歎、念茲厥初、〔老蘇族譜〕

引云、吾所與相視、如塗人者、其初兄弟也、兄弟其初一人之身也、悲夫、〔俳言集覽〕 ○〔伊勢〕

貞丈手留の記に云、世の諺に、兄弟は他人の始と云ことあり、愚人は悪く心得て、兄弟は他人も同じ事と云意とおもふは誤也、兄弟は共に父母の骨肉を交て、同體なるものなれば、兄弟ほど親しきはなし、然れども兄弟の子生れては、伯父甥姪となり、其子又子をうみ、段々に親しみうとくなり、血脉のつゞき遠くなりて、果は他人となる故兄弟は他人の始りと云也、
兄弟は兩手の如し

〔後漢書〕云、語曰、兄弟左右手也、〔晉書〕邵續傳云、兄弟如左右手、〔莊子〕云、兄弟爲手足、夫婦如衣服、衣服破時更得新、手足斷時難再續、
狂人走れば不狂人も走る〔世語〕〔毛吹草〕

〔徒然草〕に、狂人の真似とて大路を走れば、則狂人なり、悪人の真似とて人を殺さは悪人なり、〔淮南子〕云、狂者東走。逐者東走。東走則同。所以東走則異。俗諺は淮南子の語意と異なれども辭似たる故に此に載す、狂人狂へは不狂人も狂ふとも云、〔俳言集〕
狂紋の狩衣の菊とぞ、〔全〕
杵に弦〔毛吹草〕同之

古き諺に杵に弦といふ事あり〔毛吹草〕に、杵子定規といふに並へ出し、俗にそれは無理などいふ程の事なり、藪に馬鍬の類〔他我身の上〕三の巻に、馬鹿氣なる町人、子を一人もたれしがたしなむ藝もあまたあるへきに、かくし藝なりとて、其子に兵法をならせらるゝほどにやうくてもてを習ひあぐるほどに、いつともなく陽氣者になりて、あうこの喧嘩、この辻きりの手柄とて、まことしからぬ事のみ、物かたりにもしいだして、着るものにも、よのつねのかたこもんはつけず、下がへには、さねに。つる。な。ど。か。け。ち。ら。し、肩先には、南無妙法蓮華經などはねまはり、大脇差の落しざし、小髪すり下げかさ頭巾云々とあり、彼鎌輪奴に反して、無理非道を言ふをあらはし、いふくにも染しものか、古書には見當らねど、手杵に弦をかけし形なるへし、さて俳諧に見えたるは、〔年中日發句〕慶安元年「宮人のかくるや杵につるあふひ」秀吟〔新續大筑波集〕萬治三年「ある人俳諧には望月をも弓といふへきにやと問はれ侍りしにかく書てやり侍りけり」もち月を弓といはゝや杵に弦〔大津順忠〕柳亭筆記
杵にあたり棒にあたり

〔演義文〕捉雞鬪狗、〔俳言集〕
近所劫にたゝず〔棋客の常言〕〔全〕

近所に事なかれ又村には事なかれ(全)

窮鼠反て猫を噛む(全引)初井家日記

〔鹽鏡論〕窮鼠噬狸、窮鳥懐に入れば獵師も之をとらず

〔太平記〕叡山開闢事に、兇鳥懐に入時は、狩人も是を哀み、殺さざる事にて候、(俚言集覽)

九牛の一毛(毛吹草)同之

〔前漢書司馬遷傳〕云、假令僕伏法受誅、若九牛亡一毛、(蘇草)

九死一生

〔離騷〕云、亦余心之所善、今雖九死猶未悔、(俚言集覽)

麒麟も老ぬれば驚馬に劣る(毛吹草)同之

麒麟は駿馬をいふ(戰國策)云蘇子說齊閔王曰、語云、麒麟之衰也、驚馬先之、又燕田光曰臣

聞麒麟盛壯之時、一日而馳千里、至其衰也、驚馬先之、(蘇草)

麒麟のまづさ

〔十訓抄卷二〕人に一度のどがあればとて、重き罪を行ふ事よく思量あるべし、麒麟といふ

さ獸、たのづから一頭のみやまりなきにわらず、人としても、いかでそのことわりをばなれ

ん(類聚名物考)

歸鷹友をしのふ(和漢古語)

季のはてをいひ

〔源氏物語〕玉葉、此月は季のはてなりなど、お中びたる事をいひのかる、(皇朝古語)

權花一日の榮

突と書けり、願くは清水舞臺にも、二度人の、此事思ひとまらん事を書記して、愚人に示し
見せたきものなり、〔類聚名物考〕
輕忽キヨウコツのあたまたに蠅がたかる

愚按するに、俗に輕忽といふは、遽に事かしましく異様なるをいふ、盛衰記の意の如し、〔俚言集覽〕

興もあすもさめる〔全〕

岸の額に根のなき草〔全〕

銀の替りに鉛を受取たやうな顔をしてゐる〔全〕

牙をかんで日を送る〔全〕

饑饉は海から〔全〕

巾着のいかのぼり〔全〕（金の無くなりて巾着のかるさを云ふ）

衣れは衣さむ〔全〕

強將の手下に弱兵なし

〔錢竹汀恒言錄〕云、死人頭邊有活鬼、強將手下無弱兵

器甲貧乏又器用貧乏村寶
甲子の雨は六十日のふり
去年の曆あてにならず
疑心暗鬼を生ず

〔梅園叢書〕上略こはねろろしと思ふときは、其處に乗じて、いろ／＼のもの變怪をなす事あり、昔ある者妻の死しける、出やせまじと思ひ居けるが、むかしの有さまの如く、よる／＼來りける、男大に難義して、祈禱手を盡しけれども、しるしなく或る道人にゆきて問けるに、道人碁をうち居けるが、碁石を一握かれが手に入れ、かの幽靈に向ひ、是れ何ぞと問ふべし、これは知らずば必ずきたるまじ、若しらば、黒か白かを問へと云ひければ、いとど歸り是は何と問ければ、碁石といふ、黒か白かと問へは其色を答へけり、男怖れて又道人にかくと告げれば、さそわらん、直に其碁石を持ゆき、數はいくつと問ふべし、幽靈決して數をしらじ、其時此碁石を投付なば、幽靈全く來るまじといひけり、男又立歸り數はいくつと問ければ答へず、時に碁石を取て投付けるに、掻消すやうにうせけるが、再び來らずとなり、吾心の妄想より起るものなれば、我しる事をは彼も知る、碁石の數は我知らざる故彼しらす、彼

しらざる時は決して出でず、吾心決定する故、目明にして眼花なく、耳さはやかにして蟬も
わらしもなきが如し、故に眞言陀羅尼、是によつて魔魅決して近づかじと、決定する故、是
を犯すものなし云々

◎ゆ之部

夢はよるかたらず

〔源氏物語〕横笛彼夢は、思ひゆはせてなんきこゆべき、よるかたらずとか、女房のつたへにい
ふ事なり、河海孫真人云、夜夢不須説、〔皇朝古語〕

夢をいけぬにいむ

〔小侍従家集〕「今ころはわふよにわふと見し夢をいけぬにいむと思ひあはすれ」〔全〕

夢にはりにて見ゆる子は孝子なり〔全引聖物類〕（は之部互看）

夢に富見る〔上吹草〕夢に富見るわらんべに花もたせたる如し〔和漢古語〕

夢にばた餅〔俳言集覽〕

夢に道行く心地〔全引太平記大塔宮熊野孫〕

夢にも壁にも

〔雑和集〕「ねぬ夢に昔の壁を見つるよりうつゝに物ぞかなしかりける」集の詞も奴の身ま
かりて後すみける所の壁にてをかきけて侍りけるを見てよめる祐盛云是は常の人の詞に夢
にも壁にもなんぞ云ふ詞也壁に見るといへる深故也初利天に七寶宮殿あり其壁には人の夢の
ありさまこんする末の身の姿皆うつりて見ゆる也夫は夢にもわらずうつゝにもわらず此歌は
家の壁にかきたる手を見るが初利天の壁に昔の事のうつりたるを見るに似たるをよせて詠め
り〔後撰集〕「まどろめは壁にも人を見つる哉まどろしからなん春の夜のゆめ」〔俳言集覽〕
夢に夢見る〔和漢古語〕

〔莊子齊物論〕夢之中又占其夢焉、俗語とは異なれども似たる事也〔全〕

夢と鷹とはわはせがら〔民のかまど〕（の之部呪阻事云々の條下参看）

夢の中にたのしみ盡て眼の前に悲み來る

〔太平記資朝後基補傳〕夢の中に樂盡て眼前の悲愛にあり○夢の世の中〔俳言集覽〕

夢はどか夢

〔倭姬世記〕泊瀬朝倉宮御宇二十一年丁丑十月朔云云天皇祥御夢〔莊子齊物論〕夢飲酒者且而哭
泣夢哭泣者且而田獵、〔全〕○愚按どか夢は逆夢なるへし其吉凶多くは相反するか故に云ふ

夢ちがひ。獏の札。

〔一代男草子〕に是を寶船と共に賣出し也も二物にてありしをひとつにしたるにこそ今は寶船の繪に神前の獅子狛犬の如き物二つ向ひ合せてかきたるは誤にてたゞ獏一をかくべきなり

〔喜遊笑談〕

夢は五臟のわづらひ。

〔梅園日記〕云、素問方盛衰論云、肺氣虛則使人夢見白物、腎氣虛則使人夢見舟船溺人、肝氣虛則夢見菌香生草、心氣虛則夢救火陽物、脾氣虛則夢飲食不足、此皆五臟氣虛、陽氣有餘、陰氣不足、云云と此によれる謬なるべし、〔呂東萊讀書記〕云、一體盈虛消息、通於天地應物類、故陰氣壯則夢涉大川恐懼、陽氣壯則夢涉大火燔炳、陰陽同壯則夢生殺、甚飽則夢施、甚飢則夢取、是以虛靈爲病者、夢揚、以沈實爲病者夢溺、精滯而寢則夢蛇、飛鳥脚髮則夢飛、

弓折れ矢盡くる〔毛吹草〕〔和漢古語〕〔談草〕同之
〔傳燈錄〕云、僧問弓折箭盡時如何、師曰去、〔本草〕
弓を袋に納む

〔詩周頌〕云、明昭有周、式序在位、載戢干戈、載櫜弓矢是より出たる謬なり、〔國草〕

弓矢の禮義〔世語〕

弓も引き方〔俳言集〕引技業編、森寺玉山書

弓矢と人は約といふ事をかたくす

〔倭訓栞〕云、小夜の寝さめ、弓矢と人、やくと云ふ事の、かたくはべるべきとぞ承りし、承久の亂の時、院宣の御受文にも、武士は約を變せぬよしを、義時朝臣もかゝれしと見わたるは、約字にて契約の事なるへし、〔俳言集〕

弓矢の殺生は科にして罪ならず〔全引大友興慶記〕

弓矢の立合(きつ)としたこと〔俳言集〕

弓矢取る身は名ころをしけれ〔全〕

弓筆の道(文武と云事)〔全〕

弓と弦〔全〕

湯わむしから

初湯によく湯をあむすれば姿きよらに、ねひたつと云ひ習はせり、〔空物語〕 湯ひらきをんな子は、見るかひなく、おひいてたまふ、くちをしかるべし、ゆわむしからどかいふなるもの

を、「皇朝古語」

湯をわかして水になす。「毛吹草」「和漢古語」

湯の辭は水になる。「俳言集覽」○湯の遠慮ども

湯谷松風に米の飯。「全」

湯腹も一時松木柱も三年。「全」

湯屋の喧嘩。「毛吹草」

雪のはてはねはん。「全」

雪佛の湯好み又雪佛の水あろび。「太平記理盡抄八幡御託宣」、雪佛の湯なぶり。「俳言集覽」

雪は豐年の瑞又雪は豐年の貢ぎ物。「農業全書」に雪は豐年のためし。

「本朝俚諺」毛詩信南山傳云、豐年之冬必有積雪、謝靈運雪賦云、盈尺則呈瑞於豐年、朱子曰

雪非能爲豐年、其所以然者以其凝結陽氣在地至來歲發達而生長萬物也。「全」

雪のあくる日はまをとの洗濯又雪の明る日はまをとの穿鼻又雪の朝は裸子の洗濯又裸子を裸虫

とも云。「世語盡」に雪降には裸子の着物洗ふ。

雪の翌日は常に晴天なる故にかくいふとぞせんさくの方は非なるへし。「全」

雪は犬の伯母。「全」

「韓時外傳」注云、犬喜雪馬喜風豕喜雨

指を銜へる。

「淮南本經」云周鼎著僮、使銜其指、以明大巧之不可爲也、注僮、僮之巧工、及周鑄鼎、著僮像於

鼎、使銜其指、假僮在見之、伎巧不能復驗、但當銜僮其指、故曰、以明巧之不可爲也。「俳言集覽」

指を結ひて覺とす。

「鶉衣物語忘翁傳」老曾の森の草、かりろめの人の約束も、小指を結ひ、手のひらにしるして

も、行水のかすかくはかなさ云々。「全」

指むざしとて切て捨られす。「全」

夕立は馬の背を分る。「世語盡」同之

「小町師」夏夕立、脊をわけてふる夕立や午の時「○通俗編集對」夏雨分牛脊、秋風貫臙耳、

夕寝まどひ

「小町師」夏夕顔付晝顔、晝顔や夕寝まどひの朝ふせり。「全」

夕顔の蔓に狭箱はならぬ。「土佐の諺」。「全」

ゆゝ部

幽靈の飛脚に來たやう〔全〕
幽靈の濱風にあふたやう

人の衰弱甚しきを形容す、濱風と云ふは、舟幽靈と云ものあるか故ならん〔世事百談〕に云、海上にて覆溺の人、夜のまされに行かふ舟を沈めんとあらはれ出るよし、唐土の鬼哭灘と云所は、怪異いと多し、舟の行かれば、没頭、隻手、獨足、短禿の鬼形、百餘群り遊び、來て舟を覆へさんとす、舟人の食物を投與れば消失るといへり、我邦の海上にもまゝあるなり風雨はけしき夜殊に此怪多し、俗に是を舟幽靈と云、其妖をいたすはしめは一握ばかりの綿などの、風に飛來る如く、波にうかひ漂ひつゝ、やかてうの白きものやゝ大きくなるに隨ひ面かたちいでき、目鼻ろなはり、かすかに聲ありて、友を呼ぶに似たり、忽ち數十の鬼あらはれ遠近に出没す、已に船にのはらんとするの勢ありて、舷に手をかけて舟のはしるをどゞひ船人等も潛行さのかるゝ事能はず、鬼聲をわけて「イナタ」貸せと云語音分明なり、こは舟人の俗語に、大柄杓を「イナタ」と名くる故也、扱事に馴たる者柄杓の當をぬき去て、海上に投與ふれば、鬼取て力を極め水を汲入て、其舟を沈めんとするの趣あり、若當あるものを與ふれば、波を汲みて舟を沈むといへり

油断もすきもならぬ

油断大敵○油断強敵となる〔毛吹草〕

〔管子〕云、百事之成也必在敬之、其敗也必在慢之、故敬勝怠者吉、怠勝敬者凶、〔傳言〕○〔諺草俗語ノ部〕油断の條に云、涅槃經第二十二ニ云譬如世間有諸大衆滿二十五里、王敕一臣持一油鉢、經由過其令傾覆、若棄一滴當斷汝命、後遣一人、拔刀在後、隨而怖之、臣受王敕盡心堅持、或人の云、此油鉢の喩より油断の字出たるならん○〔鳩巢小説〕ニ云、永井信濃守尚政殿、段々御取立にて召仕はれ候時分、井伊掃部頭殿へ參り被申候は、私事御厚恩にて結構に召仕はれ候、夫に付、御奉公筋に何卒平生心得に罷成事候は、仰聞られ下され候様に仕度候、其元の義は兼て格別に存候故、最前より一言も承り度存候得共、何とやらん諂ひの様に相聞へ候故、只今迄延引仕候、御老人と申し、御先代より御奮功の事に候間、御一言承り候て平生のたしなみに仕度旨申されければ、掃部頭殿感じ申され、奇特千萬なる事にて候、如何にも久敷御奉公仕候故、心付候義も有之候間可申入候、但し卒爾には相成不申、精進致され某の日參らるべく候、則是にて精進落し申され候様に致さるへき旨にて歸し申され候、借其日になり、麻上下にて參り候に掃部頭も麻上下にて、此方へとて奥の間へ相伴ひ、扱申されけ

るは、油断大敵と申事、人の申儀にて候、覺申され候やと尋ねらる、信濃守成程覺罷在候旨申され候へは、夫か即ち御自分への傳授にて候旨申され候へは、此一言、二六時中失念致され間敷と申され、其後鬘斗鮑杯出して、料理を出し返し申され候由、掃部頭不學の人の由に候得とも、大公望の丹書を武王に傳へ候と、和漢雅俗深淺は有之候得共一理にて候、由良の漆は千軒ある千軒あれば俱ぐひ又千軒あればともぐらし、由良漆ハ紀伊ニあり又丹後な

りども云へり可檢〔俳言集〕
由來なきけば有かたひ
ゆるぐ杭はぬくる〔毛吹草、和漢古語〕
ゆがみ木も山のにぎはひ〔世語彙〕 ○拈木も山のにぎはひ。
百合若大臣のやう

嗜睡を云ふ〔倭漢三才圖繪〕睡眠條、按相傳、九州有人名百合若、性嗜睡、或三日三夜不寐、〔全〕
行合神に行合て煩ふ〔全〕
住き大名に歸り乞食
床が高過て天井が低くなる

め之部

目わたる鳥〔鳥朝古歌、同之〕

物の早き事に喩へたり〔文選張景陽雜詩〕ニ云人生瀛海内、忽若鳥過目、古歌ニよしわしに心ひかれて朝夕の目わたる鳥のゆくゑしらすも〔野草〕 ○散木集〔たまたまかにくるとはすれと目をわたる鳥のはやくも歸りぬるかな〕
目ぼろあはれと口ぼそなし〔民のまこと〕

飲徒を好む者の衆きをいふ、又目利は寡く、利口衆しと云義にも通す、〔俳言集〕

- 目の上の瘤〔全〕
- 目の下の罪人〔全〕
- 目をまはす〔全〕
- 目をまろくする〔全〕 ○目と三角にする
- 目から入て鼻へぬける〔全〕
- 目から火が出る〔全〕

めノ部

目薬氣の薬

〔犬子集〕吉岑にて「芳岑の花や目薬氣の薬」頼重〔全〕

目やにが鼻垢を笑ふ〔全〕

目くじらをたつる〔全〕

目やみ女に風ひき男

目も口はど物をいふ○目も口はど用を達す

目の鞘のはづれた○目のさやをはづす〔世語集〕

目の鞘は目睡を云〔吾吟我集〕「ぬくとも我目のさやをはづすは何の用にか太刀のきつさ

き〔小町踊〕「ラシ稻妻」稻妻や秋さぬと目にちやの紋〔吾吟我集〕

目の正月

〔境海草〕追悼「我涙目に正月もなき世かな」頼成〔全〕

目の出る程阿る又目の玉のぬける程とも

〔竹齋物語〕「目の玉のぬけあがるはをしかられて此むめ法師とす」と行〔全〕

目に物見せん

〔卜養狂歌集〕夜更て後月はれければ又よみはべる「空をばれこよひはたさそくれの月はつき

りはれて目に物見せん」〔鷹筑波〕「秋さぬと目に物見する」葉哉〔全〕

目の黒いうち〔全〕

目の横にされた人〔全〕

〔莊子天地篇〕夫子無意于横目之民乎〔全〕

目は臆病手は千人〔全〕

目は人の眼（説文字原ニ目人眼也）〔全〕

目をすつて鼻かます間〔全〕

目引鼻引

〔梅悪進善〕に〔砂石集〕めひき鼻引かはをらばめて〔全〕

目へ入れてもあすくない（鐘愛をいふ）〔全〕

目口かはき

〔岡氏家訓〕ニ云、世俗のめくちかはさといへる人を郷原といふ、此郷原は、機轉利根にして才
覺人に勝れ、中事名利の欲心を本として、利害の分別利根によつて、かげひなたの目利上手に

て、義理を欠く事をはじす云々、

目で見ても鼻でかく

目の玉の黒いうち

盲者の杖を失ふが如し、〔毛吹草〕〔和漢古語〕全

〔陳同甫集〕に別去惘然、若盲者失杖、〔草〕

盲者蛇におぢす、〔全〕同之

古歌「ふみあてばめくらもへびにたづべきがしらねばやすき和歌の道かな」〔俳言集〕

盲の垣のそき、〔毛吹草〕〔和漢古語〕○盲のかへのそき、〔本朝俳言〕○盲の窓のそき、〔民のかまど〕

盲に抜き刀、〔俳言集〕引鉄寺玉山書、○壁に鐵砲盲に抜刀、

盲に道ををろはる、〔俳言集〕

盲の鏡又盲の鏡法師の櫛、〔全〕

盲の器量吟味、〔全〕

盲のぶぐりあて、〔全〕

盲千人目明千人、〔民のかまど〕

盲にくみくはする、〔世語〕

盲も京へのぼる

飯の上の蠅を追ふ

〔犬子集〕「さばへなす食の上をば拂ひかね」〔鷹筑波〕「はらひをもすれどものかす又戻り」と

云句に「飯の上にはやはひまはるらん」〔俳言集〕

飯の高盛を食がはれる側で犬めがりんきする、〔全〕

飯たきを三年すれば目がつぶれる、〔米をうまつにすればなり〕〔全〕

飯を食ふて直に寝ると牛になる、〔全〕

飯前のたばこと死前の念佛は身に入らぬ、〔全〕

命は天にあり又命は天にありはた餅は棚にあり

〔史記高祖紀〕云、命乃在天、雖扁鵲何益、〔俳言集〕

命は義によりて輕し、〔世語集、野語述説〕同之

〔後漢書朱穆傳〕云、身爲恩使、命緣義輕、〔草〕

命は食に在り、〔毛吹草〕〔和漢古語〕

〔管子權言篇〕命屬于食、治屬于事、
牝雞うたへば家亡ぶ

〔周書〕牝雞無晨、牝鷄之晨家之索、〔本朝傳記〕

牝雞につゝかれて時をうたふ〔毛吹草〕○牝雞すゝめて雄雞時をつくる〔傳記集〕
牝牛に腹つかるゝ

〔袋草子〕良運云、女牛に腹つかれたるたぐいと云々、〔古今著聞集卷五〕女牛に腹つかれぬる
哉といひけり〔同卷十二〕傍輩ども女牛に腹つかれたる心地して〔十訓抄〕牝牛に腹つかれぬる

わさ哉といひける、〔傳記集〕

女夫はいとこはど似る〔毛吹草〕

夫妻いさかひ貧乏の基〔傳記集〕

妻いどをしの子いどをし○めいどをしの子いどをし〔毛吹草〕

是は我妻の愛に溺れて、父母に孝ならず、又は後妻の愛にひかれて、庶子に偏愛し嫡子を廢
する如き、愚をなすをそしる詞なり、〔故事要言〕

名人は人をろしらず〔毛吹草〕〔和漢古體〕同之

許魯齋曰君子省己、胡邊毀人乎哉、〔藤草〕

名馬が蝦蟇になり美人がかつたいになる〔傳記集引不住同心物語〕

名馬に癖あり

冥途から火を取に來たやう〔冥途を地獄とも云ふ〕〔傳記集〕

冥途の道に王もなし

〔古今著聞集〕脱漏十一に云、延喜帝、冥途にて笙の窟の聖に逢て、讀玉ひける歌とて、〔幽奈
落涅槃の底に入ぬれば刹利も須陀も替らざりけり〕とあり、〔故事要言〕

面々の楊貴妃〔毛吹草〕〔世話集〕

蓮荷を食ノは愚になる

是れ俗に専ら稱ふる處なれども、其故を知らず、按するに是れ生蠶の事なるへし、蓮荷生
蠶國音相似たるか故に、俗誤て或は蓮荷と云ひしならんか〔東坡志林〕云、王介甫が學、穿鑿し
て新説を出すを喜び、嘗て劉貢父に問て曰、孔子不徹蠶食、何也、劉貢父對て曰、本草に生
蠶多食損智と云へり、夫れ道は非明民、將以愚之、孔子以道教人者なり、故に不徹蠶食、愚に
なることを教ゆる所以なりと、介甫新説を好む故貢父戲
介甫欣然として笑ふ、其の己に戲を悟れり、

以下東庚辰三月十一日食盤粥甚美、歎曰無任吾愚吾食盤多矣、因并賣父言說之以爲後
世君子一笑云云と見えたり〔世説故事苑〕

みノ部

身をつみて人のいたさをしれ〔皇朝古語〕「本朝俚言」○我が身をつみて人の痛さを知れ（わ之部参看）
身さへ心に任せぬ

無住法師、萬事世間運に任せてあるべき心の述懐に「我身猶我おもふにもかなはぬに人を心に任すべしやは」「よしさらば物を心に任せじな心を物にうちまかせつ」と〔釋尊〕
身はならはし

「小町家集」「手枕のすき間の風も寒かりき身はならはしのものにぞ有ける」〔寂蓮法師〕里はあれぬ空しき床のあたり身を身はならはしの秋風ぞ吹〔全〕
身にわまるうれしき

「新勅撰」〔朝人不無〕うれしさをひかしは袖につみけりこよひは身にもわまりぬる哉〔全〕
身を捨てころ浮む瀬もわれ〔毛吹草、和漢古歌〕同之

「世事百談」に云身を捨てころ浮む瀬もわれといふ歌の下の句、人口にもいひ、かの樂劍家の傳書といふもの、なごにもしるし傳ふれども、上の句を知るもの希なり、空也上人の詠歌なり、繪詞傳に「山川の末に流るゝとちがらもみすてゝころ浮む瀬もわれ」又尤の草紙のうかぶものゝ品々といふ條に「ものゝふのやたけ心の一筋に身を捨てゝころ浮む瀬もわれ」如此異同ありといへども、空也上人繪詞傳なる歌、しらすもよく正しといふべし、

身にまざる寶なし〔俚言集、朝引北條、分記〕
身しらすの口たゞき〔全〕
身は一錢目は百貫〔和訓栞〕
身わりて奉公

「十訓抄十二」身おねはころ君にも事へ奉れ云々〔全〕
身の毛よだつ

「涅槃經」云舉身毛豎、又云作是念已、身毛皆豎〔仁王經〕云、時諸大衆阿須輪王、聞佛所說未來世中七〔異〕、身毛爲豎、〔本朝俚言〕
身でないものは骨なます〔民のかまど〕

みノ部

身から出したる錆〔毛吹草〕〔和漢古語〕 ○又より出せる錆刀、又身から出た錆は砥ぐに砥がない

〔俳言集覽〕

〔桓譯新論〕豈所謂肉自生蟲而人自生禍者耶、〔吾吟我集〕寄刀戀「思ひしみて思ひさるにもさ
られぬは身より出せる錆刀かも」〔鷹筑波〕「身から出たさびか夕立の濁水」

身で身をくふ又身で身をつむる〔俳言集覽〕

〔貞觀政要〕魏徵曰、爲君之道、必須先存百姓、若損百姓以奉其身、猶割股以啖腹、々飽身斃、
身を大秤にふる〔全〕

身と佛は見れば見る程奪ふ〔全〕

身過世過〔全〕

身は恩の爲につかはれ命は義によりて輕し〔十訓抄〕（命は云々の部に由り）
見るに目慾〔毛吹草〕 ○見るに目慾さばるに煩惱〔和漢古語〕

〔吾吟我集〕「小座頭のはれぬ思ひやましならん見るに目の欲起るばなう」

見るを見まね〔和漢古語〕

見ぬが心にくし〔毛吹草〕

見目は果報の基〔全〕

見ぬ京物がたり〔毛吹草〕 同之 ○しらぬ京物語〔翁問答〕

是は見届けず聞も届けずして、覺束なき事の、不思議な事あるや、又は権ならざる國所の分
野なごを、聞はつりたる儘に打任せ、付け添へて言ひちらすなどといふ、〔故事要言〕

見流し聞き流し又見たら見流し聞たら聞流し又見捨聞捨〔俳言集覽〕

見るは法樂〔全〕

見聞も功學〔全〕

見ての極樂住ての地獄〔全〕 ○聞て極見て地獄

見ぬが極樂しらぬが佛〔全〕

見ぬ事清し

見ぬ化物に膽を消す

見えばるよりほこばれ

見ざる聞かざるいはざる

〔省心鈔要〕云、耳不聞人之非、目不視人之短、口不言人之過、庶幾爲君子、〔本朝傳言〕 ○無住

法師の歌「言はざるも見ざる聞ざるよりも猶思はざるころたもちがたけれ」

見直し開直し〔全〕
見ぎはまざり

〔源氏雲隱〕に云、薫は内大臣になりて、世をまつりてちたまふに、人のなびきしたがへること、故院の御時よりみぎはまざり、下界〔全〕

水にゑがくことし〔毛吹草〕〔醫草〕同之

〔涅槃經〕云、如書水速滅不久住〔百喻經〕云、書水爲記〔佛祖通載〕云、如筆書水〔全〕
水はひきさうにながる

〔孟子〕云、人性之善也猶水之就下也〔家語〕云夫水似德其流也則卑下倨拘〔淮南子〕云、使水流下弗能治〔孫子〕云、水之行避高而就下、〔本朝傳記〕
水のたるやうなり

此諺ふるき事なり、二條良基公の〔小島のすざび〕に云、いろ／＼の具足とも、水のたるやうなるかぶどのくはがたとあり、〔全〕
水を乞て酒を得る

〔萬葉集卷十八〕夫乞水得酒從來能口、〔皇朝古語〕

水はさかさまに流れず〔毛吹草〕〔世話書〕曰く

〔盲沙汰謠〕世は末世に及ふといへども、月日は地に落ちたすはず、水はさかさまに流るるゝなし

〔俳言集〕

水至て清ければ魚すまず〔全〕○人至てかしてければ友なし水至て清ければ魚すまず〔和漢古語〕

〔家語〕云、水至清則無魚、人至察則無徒、
水は方圓の器にしたがふ〔毛吹草〕同之

〔孟子疏〕荀卿曰、表正則影正、鑿圓則水圓、孟方則水方、〔韓非子〕云、爲人君者猶孟也、民

猶水也、孟方水方、孟圓水圓、〔醫草〕○〔實語教〕水隨方圓器、人依善惡友、

水鳥くがにまどふ〔毛吹草〕〔和漢古語〕

水入て垢落ちす〔世話書〕〔民のかまじ〕〔爲し甲斐のなき事〕

水三合あれば大池〔民のかまじ〕

水の泡となる

〔増鏡〕に帝猶摩國に着かせたまふ、大倉谷といふ所少し過る程にそ、人磨の塚はありける、

明石浦を過させたまふに、鳥かくれ行船ども、はのかに見えてあはれなり、水の泡となりて
浮世を渡る身のうらやましきはあまのつりふね、〔後撰集〕

水・麩・へ・落・た・飯・粒・の・や・う 〔全〕

水・の・ゆ・く・へ・と・人・の・ゆ・く・へ・は・し・れ・ぬ 〔全〕

水・鏡・を・見・る・と・愛・敬・か・落・る 〔全〕

水・を・棒・で・打・つ

〔七脩類〕云、水上打一棒、猶言無用也、〔全〕

水・は・飲・み・次・第・う・ろ・は・つ・き・次・第 〔全〕

水・は・窪・み・に・身・を・よ・す・る・鳥・は・梢・を・慕・ふ

〔色音論〕に、されは世間のかたりにも、水はくほみに身をよする、鳥は木すゑをたふとは、

よくころこれをいはれたり、〔全〕

水・て・物・を・焼・く 〔全〕

水・は・三・尺・流・る・れ・は・清・く・な・る

耳・の・垂・珠・〇・耳・の・た・ぶ

俗に富貴貧賤は耳のひくにありと云、〔神相全編〕云、耳厚而堅、聳而長、皆壽相也、輪廓分
明聰悟、垂珠朝口者主財壽、貼肉者富足、耳薄如紙、貧窮無倚〔事文類聚別集〕云、節度李忠
臣因奏對、德宗謂曰、卿耳長大貴人也、忠臣曰、臣聞驢耳甚大、龍耳即小、臣耳雖大乃驢耳
也、上悅之、〔事〕〇因に記す德川氏の時二條の城にて、久世三四郎坂部三十郎兩人に加増あ
りしを、大久保彦左衛門聞て、其儘登城し、兩人の下城を待うけ、路次にて出會し、遙に聲
をかけて、其方兩人登城は何事にて候をやと尋るを、三四郎功者なる故、其顔色を見るに、
打果すへき体に見えける故、三十郎をつめりければ、三十郎答て、されは存よらざる御加増下
され候、何の武功も無之處、たぶにて罷成候とて、耳を叩いて見せければ、彦左衛門打笑て
そはたぶにて罷成候や、よき合點まで候、左様のくされ知行は入り申さず候とて、其儘立
歸りしと云と、大谷木長通の〔醇室漫筆〕に載せたり

耳・を・洗・へ・は・牛・を・引・て・か・へ・る 〔世語彙〕

耳・は・壁・を・つ・た・ふ 〔全〕

耳・を・尊・み・目・を・い・やし・む

〔後撰集序〕世にゐる人、聞く事をかしてしと見る事をいやしとざる辨によりて、〔新古今集

序「目をいやしみ耳をたふとふるあまひ、いろのかみふるまわとを恥といへり、〔類聚名考〕
耳の鳴るは吉事を聞く、

〔三朝實錄太宗記〕上謂文館諸儒臣曰、朕憶從來左耳鳴必聞佳音、右耳鳴必非吉兆、今左耳鳴

出師諸具必有捷音〔全〕

耳學問

〔揚惡進善〕に耳學問のろはつらと、片言交りに言ちらし、〔荀子文子〕上學神聽、中學心聽、

下學耳聽、〔宋書沈慶之傳〕不如下宜耳學、〔世說新語〕〔荀子勸學篇〕小人之學也、入乎耳出乎口、

口耳之間則四寸耳、曷足以美七尺之軀哉

耳をふさぎて鈴をぬすむ

〔淮南子〕に云、有盜鐘而走者、鎗然として聲あり、人の之を聞を恐る、乃ち自ら其耳を掩ふ

とあり、諺之に似たり、〔常言道〕云、掩耳偷鈴、不搜自己房幃

耳を取て鼻をかむ〔太平策〕耳をとつて鼻へつぐ

〔鷹筑波〕「耳とつてかむとやいはん菊の花」〔俳言集〕

耳にふくりんをかくる、〔全〕

耳にたこの入るほど

数々同し事を聞くを、耳に聾腦の入るほど聞くといへるは、舟のゐるに同じかるべし、〔全〕
味・噲・の・味・噲・臭・は・喰・は・れ・す

〔海人藻芥〕に云、二條良基公の仰に、上藤の上藤しきと、味噲の味噲くさきは、下品なりと
御利口あり、是によつてれもふに、書をよむ者は、常に人より謙りて、學者臭からぬ様にすへ
し、總して一生我は書をよみたりと思はす、よむ事の足らざるをなげき、月日のたつ事を惜
むへし云云、〔本朝傳記〕

味・噲・鹽・の・世・話

〔前漢〕咸宣爲左大史、其治米鹽之事小大皆關其手、是瑣細なる事をいへり、所謂味噲鹽の
世話なり、江府の土俗は、所帯をつかさどる者をみろとよへり、〔全〕
味・噲・をつ・ける

〔太平記三十五〕に桃井直常敗軍の段に、當時の人の落首なりとて「唐橋や塩の小路の焼しこ
る桃井殿は鬼味噲をすれ」といふ狂歌を載せたり此下の句の味噲をすれといふは今俗の味噲
をつけると云ふ事と聞ゆ云々〔熊石雜語〕

味増茶は千石取もならぬ。〔俳言集〕
味方千騎の便。

〔太閤記〕隠州判官代、早船をつかはし加勢したまへかし云云、早速一千余人に勢にて合力あり誠に味方千騎の便とはかやうの事をころいふべけれ。〔全〕

味方魚負。〔全〕

三歳兒の横草履。〔世語集〕

三歳兒にならつて淺瀬を渡る。又三つ子に教へられて淺い川をわたる。〔俳言集〕

三歳兒に花。又童に花。〔全〕

三歳兒に鬚のはへたやう。〔太平記〕みつ子につりひげ。〔全〕

三歳兒の魂百まで。〔授業偏〕三つ子の智慧が七十まで。〔全〕

三年の後の初枕。

〔伊勢物語〕「あらたまのとしのみとせをまらわびてたここよひころにいまくらすれ」〔倭訓栞〕

戸令に、夫没落外藩、有子五年、無子三年、不歸、及逃亡有子三年無子二年不出者、並聽改

嫁と見えたり今も三年の公法あり。〔全〕

三日法度

〔唐話纂要〕官無三日禁愚按俗言の意は官に三日の禁なき筈なれども時として禁令の行はれずして息事あるをいふ。〔全〕

三日さき知れば長者。〔毛吹草〕

三隅どられて碁を打つな。〔俳言集〕

蓑蟲の家作。〔世語集〕

蓑着て家に入るを忌む。〔類聚名物考〕○門にいらは笠をぬげ

蓑になり笠になり。〔俳言集〕

都も旅はうし。〔毛吹草〕

都の目はづかし。〔全〕○都は月はつかし田舎は口はつかし。〔俳言集〕

都にも田舎あり○田舎に都あり。

道高ければ魔盛なり○佛さかれは魔さかる。〔ほ之部考〕

〔砂石集〕此故に道高ければ魔盛なり〔温故要畧〕道盛魔盛之文出萬善〔同敝集〕室町物語佛法さかれは魔さかる。〔俳言集〕

道草をくふ

〔倭詞彙〕東鑑に駄馬道中喰大事〔小町踊〕チラシ花野〔鷹匠は先つ道草の花野哉〕立圃〔全〕
道は遠くとも直をゆけ〔全〕

〔古歌〕「世の人の直路といふは曲がる道まがると思ふ道が直路よ」

美濃と近江の寝物語

〔犬子集〕「寝物語に宵ふかしぬる」と云ふ句に「肌寒や秋にあふみの國境」徳元〔全〕

美目より心 ○人は見目より只心

右から左（即座に取かはすと云ふ）〔俳言集覽〕

右や左の長者様〔全〕

微塵積りて山となる

〔古今集序〕高き山もふもとの塵ひちよりなりて〔説苑〕土積成山豫樟生焉〔全〕

微塵眠に入れば大山も見えず

〔避暑錄〕一指蔽目大山弗見諺の意に同し〔本朝醒睡〕

實のなる木は花からしれる〔俳言集覽〕

實を見て木をしれ

蚓の地を動かす志精術海を埋むる怨〔俳言集覽引大友興隆記〕

蚓の天上するやう〔全〕

みぎはささり

〔源氏雲隱〕に云蕪は内大臣になりて、世をまつりてちたまふに、人のなひき従へる事、故院

源の御時よりみぎはささり、下略〔全〕

南竹藪殿隣

是は居を移さは隣をかねて察すへしとの事なり〔左傳〕に諺云、非宅是卜、唯隣是卜と、諺の意

に叶へり、〔全〕○〔尤の双紙〕あきはつる物の品々に、南に竹藪殿隣さい／＼用をいふ知音、

殿のわかうの私御用、

冥加恐ろし

〔太平記〕師直奢侈に、殊更冥加の程も如何と覺えて、うたてかりしは云云、〔俳言集覽〕

箕賣笠で箆る〔全〕

彌陀の光も金次第〔全〕

未熟の藝講り

五百十六

〔東齊記事〕云、歐陽永叔、每誇政事不誇文章、蔡君謨不誇書、呂濟叔不誇棋、何公甫不誇飲酒、司馬君實不誇清約、大抵不足則誇也、〔全〕
御影は帝のうへ〔全〕〔加之部陸は云々の條參看〕
木乃伊取が木乃伊になる

此諺古くより言傳ふ、其起原をいかにと詳れば、木乃伊の出る國は、赤道の下に當る國にて、極熱の地方なり、其所にいと廣々たる砂地あり、其邊を往來する人は、土にて製造たる車にのりて直る事なり、萬一誤て地に落れば、忽焦れて木乃伊となる、又其木乃伊をとらんとて土の車に乗て行く者あり、其者も乘たる車破ふるゝか、崩れて地に落れば同しく木乃伊となるといふ、是全く據なき妄説なり、木乃伊の事は、陶九成か輟耕錄に書たり、其説に云、木乃伊は天方國の人、年七十歳になれば、身を捨衆人を濟はんと願ふ者あり、飲食を絶て唯身を潔め蜜を食とし、月を経て便溺悉く蜜のみとなる、既に死するに及べば、國人集りて死體を殮るに、石の棺をこしらへ、頭も漏れざるやうにして、棺の中に蜜を入れて骸をひたし、石を以て蓋とし、棺の外ニ年月日時を鐫付て、是を土中に埋む、百年の後を待て蓋を開く時は、

棺中悉く密封となりてあるなり、這を木乃伊と云ふ、抑木乃伊は何の藥に用るものと尋れば、折傷の妙藥にて、如何なる怪我なりとも此木乃伊を少許服する時は、忽ちに平愈るといへり、此木乃伊は、天方國の中に住む人といへとも、得る事難し、依之是を奇藥と尊むと云傳ふ、亦一名蜜人といふと、何れにしても我國の所行にて、神國などには忌嫌ふ所爲なり

〔閑窓瑣談〕

海驢の寢流れ

〔歌林捨葉集十一〕夢「我戀は海驢の寢流さめやらぬ夢なりながらたえやはてなん」〔笠内大臣〕
注此歌判者光俊朝臣云、海驢まづ何ともえよみとき侍らず、或は海驢は鮫魚にや侍らん、雲海流わたる時空に向ひて、浪に眠りて流れ行くにや、夢見る事ぞはかりかたかるべき、およふ此事自ら知れるにはあらず、就之論勝劣未得爲之責彌のかれかたし云云、愚按日本紀海驢此云美知とあれば、内大臣は美知とよませたまひしならん、トドとよめるは後人のわざなるべし、海驢今俗にアシカと云、能登にてトドと云と聞けり、鮫魚にはあらず、鮫魚は和名抄佐米とあり、〔傳言集〕

みノ部

五百十七

◎し之部

十分は覆るゝ〔毛吹草〕同之

〔家語三恕篇〕云、孔子觀於魯桓公之廟有欹器焉、夫子問於守廟者曰、此謂何器、對曰、此蓋爲宥坐之器、孔子曰、吾聞宥坐之器、虛則欹、中則正、滿則覆、明君以爲至誠、故常置之於坐側、願謂弟子曰、試注水焉、乃注之、水中則正、滿則覆、夫子喟然嘆曰、嗚呼夫物惡有滿而不覆哉、是十分はこまるゝの喻也、〔醫草〕

十遍よまんより一遍うつせ

〔鶴林玉露〕云、唐張參手寫九經、每言讀書不如寫書、高宗以萬乘之尊萬機之繁、乃亦親澠宸翰、遍寫九經、又嘗御書光武紀、賜執政徐俯曰、卿勸朕讀光武紀、朕出讀十遍不如寫一遍、今賜卿、聖學之勤如此、〔醫草〕

十七八は藪ぢから〔毛吹草〕
十八よれば十國のもの〔全〕
十人は十色

和歌「しれがしな世の人の顔のさま」にかはればかはる心々を」〔全〕

十死一生〔和漢奇覽〕〔漢書外戚傳に出づ〕

十王が勸進もくはうがため〔長のひま〕

十把ひとからげ〔六々部集〕

十月の狸は寝たあとも百する〔世語益〕

十月の戸たて啓者〔俚言集傳〕

十月の中の十日に心なき者をやどふな〔全〕

十月の木の葉髪〔全〕

十月の木の葉落し〔全〕

十月の投木

〔農業全書〕十月の投木とて、十月は皆陰の月にて、陽木動かねば投捨てもよくつくといへり、

〔全〕

十語五草

〔秋齋問語〕竹葉物語、うつは物語、世つき物語、いや世つき物語、穢世つき物語、ます鏡、榮花物語、狹衣、水鏡、伊勢物語、己上之を十語といふ、徒然草、枕草紙、四季、御傍の記、

しノ部

御湯殿の記、己上之を五草といふ、是十語五草とて嫁入の具なり、築棚にかさるなり、飾様は小笠原の習とするなり、〔全〕

十九たちまち廿日よひやみ、〔全〕

十八の後家はたつが四十の後家はたぬ、〔全〕

十年一トむかし

主と病には勝たれず、〔毛吹草〕〔和漢古塵〕

主と親にはかたれぬ、〔俚言集覽〕

古歌「主と親無理なるものと心得て氣に入るやうにするか忠孝」西山公壁書に「主と親とは無理なるものと思へ下人は足らぬものとしるへし」

主の前とすべり道は早く通る、〔世語塵〕

主の門は泣けて通れ、〔俚言集覽引〕〔森寺玉山書〕

主の仰せには親の首打つ、〔世語塵〕

〔俚言集覽〕に云此諺は、主を重く言はんどの言葉なれども思ふしき諺なれば、言ふまじき、恭の語なり、○〔愚按〕此語の謬される事辯するに足らず、夫れ忠と孝とは人道の大本に

して、車の兩輪鳥の双翼の如し一を缺けは人にあらず、豈不孝の忠臣あらんや、尙ほ忠孝兩全の條參看すへし、

主關白〔民のまこと〕

主わしらひ、〔貞享節用集世話詞に主塵答をよむ〕〔俚言集覽〕

主思ひ、〔全〕○主思ひの主威し、

主従は二世

〔春榮論〕「いかに汝三世のよしみを思ひ云々」〔全〕

主の庶子より老の總領、〔世語塵〕

主人の指圖て栗の木をゆすふる、〔俚言集〕

主の太刀は右に持我か太刀は左に持、〔全引尾布重狂言〕

主の物て義理をする、〔全〕

主の胸をさくるやう

主か主なら家來も家來

死一倍の銀を借る

世には不孝の惡徒ありて、奢侈に耽り、厚利の金を借り、以て遊蕩に資す、之を死一倍と名づく、「上官融が友會談叢」に云、宋の陰州節度米使信と云ふ者、儉嗇にして財を蓄へ、錢百萬緡を積む、其子太た侈れり、然れども父在すを以て自由にする事克はず、富める人を恃て、厚利を約束して錢を借り、近隣の惡黨を集め、馬鞍衣服を飾り、恣に遊獵す、其契券の詞に云、若くは死鐘聲絶、本利齊致之、云々と見ゆたり「世説故事苑」

死に近づけは蝨去る
〔酉陽雜俎〕云、相傳ふ人將に死なんとする時、蝨身を離れて去る、又或説に病人の蝨を取て其牀の前に居て、病を下す、差る病には蝨人病に向ふ、差えざるには蝨病人に向はすと云へり、〔全〕
死ぬ子みゆよし

〔土佐日記〕死にし子かはよかりき〔皇朝古蹟〕
死た子の年をかそへるやう〔俳言集〕
死しての長者より生きての貧人

〔白氏文集の詩〕身後堆金拄北斗、不如生前一樽酒、〔本朝俳話〕

死ぬ者貧乏〔言集〕
死んでは一文にもならぬ

〔萬葉集五〕山上憶良、沈疴自哀文、〔遊仙窟〕九泉下人、一錢不直、〔全〕
死んで骨は光るまい

〔吾吟我集〕死する身の骨も光らずやればつる金の扇を見るにつけても〔全〕
死人に妄語〔長のかまじ〕
死人生鼠に及ばず

〔萬葉集五〕山上憶良沈疴自悲文下死人不及生鼠〔俳言集〕
死人口なし〔全〕

死ねがな眼くじらん〔全引桑寺園山書〕
死にまさる土脛〔全〕
死馬に針をさす〔全〕
死なぬものなら子一人へらぬものなら金百兩〔全〕
死花が咲く

知て知らざれ「毛吹草」同云

〔老子〕云、知不知上也〔釋〕○〔說苑〕云、非所言勿言、以避其患、非所為勿為、以避其危、知らざるを知らずとせよ

〔論語〕云、知之爲知之、不知爲不知是知也、〔全〕

知らぬ神に崇なし全引北條時分語也

知らぬが佛見ぬが極樂〔全〕〔毛吹草〕上句同

知らぬ佛よりなじみの鬼〔全〕

知らぬ人の行末〔全引北條時分語也〕

知らぬが秘密

〔瓊海草〕「花と見し雲はしらぬがひみつ哉」苦心〔全〕

知らぬ米商ひより知つた糠商ひ

知らぬ小歌を謳ふ〔毛吹草〕〔天和故事〕同之

多く世の戒となる事端は、必ず民の口號とする謳歌にあり、天文書に云、螢惑と云星は多く世の浮沉吉凶を掌るが故に、時には兒童と變し、相交りて遊戯し、歌を謳ひ、又は時俗の衣服を

變へしむる事あり、是皆貴賤國家の讖文となりて、善惡興亡悉く其應なき事能はず、譬へは去る冬より、洛中の童男女、東海道逢坂の邊なる、賣繪の事を早歌して、「振れや〜大鳥毛」といひならはしければ、其明年、將軍家御養君、御賀の上使あり、騎馬金銀を饒め、見物の群衆目を驚かし、又此春の童謡に「いさや春駒引き連て、袖引連て今參る伊勢參り」といひけるが、程なく洛中の稚き子供等、男女貴賤を別たず、伊勢參宮する者其數をしらず、皆七才以上十五才以下の者にして、皆旅の思ひを知らざる者なり云々〔畷耕録〕に云、至元甲子、阿合馬と云ふ人、中書平章と云ふ官に至る、此頃の樂府の中、盛に胡十八の小令といふを唱へ時行せり、其心を知る者のいふ、阿合馬が此の重き官を授かり、擅に權を秉れども、只十八年なるへきかど云ひしが、果して至元壬午に至て、伏誅せり、其後五年を経て、桑阿と云ふ人、又中書平章に拜せられ、尙書省に立つ事あり、然るに此桑阿は、負暴殘忍なる事、阿合馬に十倍せり、其頃又言ふ「桑字折けて四十八」といふ謠あり、桑の字を後に改めて思はず知らず相の字とす、折けて四十八となる事をしらず、桑字は、十を木の上に三ツ書く故三十なり、木字は十と八とを合せたれば、郁台四十八なり、是を改めて相字とするは、木の十八に目を横にする時は、四の字の形となる、是を以て云ふなり、果して四十八日を歷て

敗績せしとなり、〔故事要言〕○〔愚按〕これ所謂童謡にして、本居翁のいへる許刀和邪なり〔丹鉛〕に説文諸作各、註各从肉言、按爾雅、徒歌謂謠、不用絲竹相和也、童子歌曰童言以不由人教也と、仍は數例を下に附記して參考に資す、

門や木戸や矢倉や、慶長十八年の頃より、京童の、門や木戸や矢倉やと、いひはやりければ十九年の暮に、秀頼公ひはんをくはたて、俄に門木戸矢倉を作りける、是も後に思ひあはせけるよし、〔辰物語三十本〕

肥前藩 寛永年中に、人の身に瘡の出来て其名を誰いふともなく、ひせん瘡といふ、見る人聞く人ひせんれこりたるといはぬ者なし、同く寛永十四年に、西國肥前に吉利支丹といふ、邪法の一揆おこり、武士うけたまはりて害之、これも後に思ひあはせける、〔全〕

何を仰せ出さるゝかを仰せつけらるゝ 寛永十六年の頃御法度に、何を仰せさるゝ、かを仰つけらるゝもれちおろれて世をせばく、色々まじしき事をいひければ、其ごとくをのつから八木たかく、飢饉の世となる、此頃又よござりまじやうなふと云事はやりければ、やかて目出度よき事のあるへし、〔二話一言〕

舊幕府の末府下の童謡に「蔵の窓から鬼が尻出して、世界破れるやうな屁をたれた」といふ唄

はやりたれば、間もなく其寶庫焼亡し、東照公の遺物迄灰燼に委したりとぞ、又其前天保の頃より「桐が芽をふく葉が括れる西にくつわの音かする」といふ唄はやりしは、正しく王政復古の兆なるへしといへり、

- 知らずは半分直〔俳言集覽〕
- 知らずは人に問へ〔全〕
- 知らぬ字はかなで書け〔全〕
- 知た中は涼しい又知た同士は涼しい又思ふ中は涼しい〔全〕
- 上手の手から水がもる〔全〕
- 上手の猿が手を焼く〔全〕
- 上手の猫が爪をかくす〔全〕
- 上手べつたりうろしつかり〔全〕
- 上戸本性をあらはす

〔文選傳武仲舞賦〕漫既醉其樂康、嚴顔而怡憚兮、幽情形而外揚、文人不能懷其藻兮、武毅不能隱其剛、注翰曰、懷藏、藻辭藻也、文人之醉、不能藏其辭藻也、武毅之人、醉則不能隱

其剛勇、〔四章〕

上戸の額、盆の前〔毛吹草、和漢古醫長のまき〕〔常に熱さをいふ〕
上戸毒をしらす下戸薬をしらす

上の上は下の下、知る下の下は上の上を知らず〔和言の語〕

上臈が立てばははひ立つ、下臈がたてばはこり立つ〔全〕

上田五段に味噌、油柴澤山に小者一人〔全〕

上の作に下の秋あげ

豊作の年は、秋收の時分、雨降るを常とすといへり、

四百四病より貧病つらし〔和漢古醫〕同之〇四百四病より貧の苦み

〔維摩經〕云、是身為災百一病惱、僧肇註云、一大増損則一病生、四大増損則四百四病同俱

起〔百緣經〕云、人死之時四百四病同時俱起〔義楚六帖〕云四百四病百一風、百一黃、百一熱、

百一痰病等〔本朝傳記〕

四十二の物争ひ

〔四十二物の争〕といふ歌物語の冊子あり、うは似たるもの二ツを題にて、歌をよめるなり〔遠

碧軒隨筆〕に曰、四十二の禁忌の事、書物に見へず、双六の采の目、兩箇にて四十二あり、

されは四十二までは、王老衰微の争あり、之を過れば法外の心にて、何事も足らすといふ事

なし云云、是にて物争の數を四十二とする事の據明にしられたり〔世事百談〕

四十二の二ツ子

世俗男の四十二を厄年といふ、四十二を略すれば四二なり、是死に通すといひ、四十二歳に

て二才の子あれば、父の年を合せ四十四、略すれば四四なり、是死に通すといひて、子をす

つるものあり、此事和漢の書に曾てなし、妄昧の所爲といひながら、其罪なげくにあまりあ

り、是等の俗習をかたく禁すべし、〔全〕〇因に記す〔橘庵漫筆〕に云、世俗四十二歳は疫年なり

とて、俄に鬼神に媚て、奸巫貪黷の爲に財を費して、福を祈り邪祟なからん事を願ふ、何の

據ありて斯く四十二歳を恐るゝや、疫年の説、おこがましく記したる書許多あれども、望洋

たる杜撰、男子の見る物にあらすと、名ざへ覺なきりき、按するに男子は太陽にして、其廻れる

年重陰なり、四と二と合せ老陰六の數となり、不足すへき陰は、却て有餘の四上に有て、陽を剋

する故恐るゝなり、又女子の純陰なるに太陽の三三と並ひ廻る年故、慎むなるへし、うの疾を

俄に恐るゝ事、水の溢れ來り、火の疾くうつるが如し、何ぞ四十二歳に至れば火災水難の起る

しノ部

か如く、凶事の俄に來らんや何故之を神に媚ひ佛に歎きて、幸を求むるや、殊に國により二の正月とて年替をするなど、親族朋友を招き大に宴し、美酒佳肴をつらね、饗應善盡すこと、冠婚の禮の大なるよりも甚しく、これを祝へり、其愚の甚しきや慎むへきを却て祝し、大宴を設るに至る、是恐るまじきを驚き、慎むへきを祝す、是何事や、已慎て罪を天に得れば、避る所なし、いかさま一休和尚の口號に「心だに誠の道にかなひなは守らすともちかはがまはぬ」と、菅神の御詠を吟しかへたまふもをかし、或曰四十二は死と云ふ訓にて、三十三は散々といふ音なり、故に疫年として忌めりと云へり、何れより出し説やしらす、何ぞ四十二三十三に限るへけんや、一生涯を常疫として、平素其獨を慎まば、鬼神巫覡を頼むにまさらんか、四十足りの子をいひ、〔白朝古歌〕

四國に狐なく佐渡に狸なし。

〔愼愁官華夷珍玩續考卷十〕此人嘗云、猫不過楊子江言獨過金山則不復捕鼠、厭者至金山剪一紙猫投水中則不忌、南人嘗云、牛不過嘉興金牛橋過者即死、厭者牽之淺水而渡則不忌、〔類聚名物考〕○愚按嘗て佐渡に在り土人の言を聞くに曰、佐渡になき物は狐と盗人なりと此説と違へり、

四國を廻りて猿になる。

四國を廻りて猿になるといへる説は、風來か放屁論に、今童謡に、一つ長屋の佐治兵衛殿、四國をめぐりて猿となるんの、二人の連衆は歸れども、お猿の身なれば置て來たんのといへり、其頃言ひはしめしにはあるへからず、説はもとよりありしにや、さて此説は誤ならん、四國猿といふ事よりうつりしか〔舊本今昔物語〕に通四國邊地僧、行不知所、被打成罵語あり、〔奇異雜談〕、丹波與郡に、人を馬になして買し事、又越中にて人馬になるに、尊勝陀羅尼の奇特にてたすかりし事など見ゆ、皆昔物語より云ひ出し事也、されは此説久しき事と知らる、後人之を猿といひかへた事と思はる、又按するに〔搜神記〕に蜀中西山、高山之上有物與猿相類、長七尺能人行、善走名猿、一名馬化、或曰獲同行道人有後者、輒盜取以去云々、取女去而共爲室家、其無子者終身不得還、十年之後形皆類之とありし、これなどより出たるかするへからず、猿に類すといへば猿の方に似つかはしく、又馬化とも云ふ名をひかめては馬ともいふへくや、〔脩海笑談〕

四海波しづか〔小説〕

〔楊萬里集〕六合塵清、四海波靜、〔俚言集覽〕

四海を家とす

〔後漢書〕王者以四海爲家、以兆民爲子、〔全〕
四十八願 又大覺の四十八願 又彌陀の四十八願 〔全〕
四十坊主は鹿の角二十坊主は牛のふぐり

鹿の角は落つべくも見えぬものなれどもあざみの花を食へば落るものなりといへり四十年紀
の僧人は墮落すさまじく見えて多くは墮落す牛のふぐりはふらさがりて落んかと思ひて落ち
す二十ばかりの僧人は後の出身の志願ある故に墮落すへく見えて反つて墮落するもの鮮し因
て喻へていふ 〔全〕

四六衾は夜の物 又四六衾は奴の寝具 〔全〕
師弟は三世 〔僧傳〕師は三世の契親は二世のむすび

〔辨慶物語〕にむとにどまるとは三世の主君、前にすゝむは三世の師匠〔寶物集〕に師弟は他生
のちさり淺からず、 〔全〕

師匠は針の如し 〔世語新語〕又師匠は針の如く弟子は糸の如し
〔三世物語〕に師は針の如く弟子は糸の如くとわれは、末の弟子等無間に落つへさるもの也、 〔全〕

師には従がへ

〔成語考〕門人學孔聖、孔趨亦趨孔歩亦歩、注顔淵曰夫子歩亦歩、趨亦趨、夫子奔軼絕塵、而
回蹕若乎其後矣、夫子曰、吾終日與汝交臂而失之、可不哀與、
師走坊主

近松門左衛門作の、夕霧の淨溜瑠は、傾城阿波の鳴戸と題す、吉田屋の段、伊左衛門の詞に
紙衣さはりがあらしく引けは破れる、廻めば跡にしはす坊主しはす浪人どあり、姿やつ
くしく、便なげなる者をして、師走坊主、師走浪人といふ諺の、むかしありし故に、か
くつゝけて書たるなり、盆には僧の物もらふ事常なれども歳暮にはさる事もなきといふ〔落花
集〕寛文十年刻「佛名を唱ふは師走坊主哉」 正此諺は實の僧の事にて前に記したる三日坊主な
ど云は違へり云云 〔川柳集〕

師走川へはまれば餅をつく 〔俳言集〕

師走女のけしやうには山の神もこはがる 下句疫神が恐るゝともいふ

〔堀川狂歌集〕おしろひをばけくしくぬりちらす顔は師走の雪女かも 〔全〕
師走女に目をかけな 〔全〕

しノ部

尻尾を見せぬ

陸游が姚平仲小傳に、西子入五湖、姚平仲人青城山、它年未必不死、直是不見末後一段醜境耳、故諺曰、神龍使人見骨而不見尾、〔瓦礫雜考〕

尻尾を出す〔俳言集覽〕

〔洛陽伽藍記〕後魏孫騰取妻、三年未脫衣臥、私怪之伺其睡熟陰解衣、有尾三尺、懼而出之、

變爲一狐〔羅怪錄〕云云、按俗以作偽者露其本色曰狐狸精露尾、此其事也、〔通俗篇〕

尻もむすはぬ糸〔毛吹草〕〔和漢古語〕○後もむすはぬ太平樂〔俳言集覽〕

〔吾吟我集〕糸遊「たつとも霞の衣ぬひえぬや尻も結ばで亂る糸遊」〔枕草紙〕ぬたさものと

みに物ぬふに、ぬひはつと思ひて、針をひきたれば、はやうしりを結ばさうけり、又かへさ

まにぬひたるもいとねたし、〔犬子集〕「はころふや尻もむすはぬ糸櫻」〔俳言集覽〕

尻といふとも口と言はるゝな〔民のたまご〕

尻齋のかゆさと獨笠のかはゆさはやるせがな〔世語書〕

尻やけ猿

性急の人を尻焼猿といふ〔世説〕曹著輕薄才、長於題目人、常目一達官爲熱鐵上糊〔其實語〕

也、〔朝野僉載〕云、魏光乘好題目人、姚元之長大行急、謂之趁蛇鶴鶴、待御史王旭短而黑醜、

謂之煙薰木蛇、楊仲嗣躁率謂之熱鐵上糊、〔類聚名物考〕

しりくらの観音

しり暗い観音とは、後暗いにて、地藏の後といひしに同じ、六観音の縁日を十八日より配當

して、廿三日に終る、七観音には十 七日を加はし 観音の縁日の後はいくらいと、轉して解すべし、是も古き諺

なるへけれど、譬の事と聞へて耳たつ故にや、古き物の本に見えず、たま〜東海道名所記二

の巻に、茶屋に女あり、茶を後むきて侍り、お姿を見れば、如意輪観音はと美しうおはしますか

後向給ふころ心えねといへば、樂阿彌かいふやう、これもいはれあり、三十三身の外に、昔より

尻くらの観音とてこれありといふとあり、はや當時の尻くらしと思ひ僻めなるべし、〔用捨種〕

尻の毛逆ぬかるゝ

尻に帆をあげる

鹿見て矢はく、○しんを見て矢をはく、○いんを見て矢をはく〔解字〕○鹿をし、又はかせぎ

と云ふ

〔戰國策〕云、見兔顧犬、亡羊而補牢、〔藤原雅康關東海道記〕に、矢はせの里を見やりてもの

し、部

のふやおさむる國のいくさ見て矢はきの里とこをさふらん」〔本朝傳〕
鹿は射手の前に来る。

〔家語〕云、行勝者必遇其敵、諺の心に同し〔全〕

鹿を逐ふものは山を見ず。○鹿を逐ふ獵師山を見ず。〔毛吹草〕

〔淮南子〕云、逐獸者、目不見太山、嗜欲在外則明所蔽矣、又云、逐鹿者不顧兔、〔釋言〕

鹿の角を蜂のさしたる如し。〔毛吹草、和漢古語〕

鹿まつ所のたぬき。(思ひの外なる事)

〔盛衰記卷二十〕鹿待處の狸とは何事にや〔皇朝古語〕

鹿三代に松一代松三代に鳥一代。
〔坤雅〕云、舊説、鳥性極壽、三鹿死後能倒一松、三松死後能倒一鳥、〔傳言集〕

〔和訓栞〕云神宮にもはら猪鹿を忌むよりいへるなるへし、梵書獅子身中の虫と混するは謬なるへし、大祀の散齋致齋に、肉を罰せられし事律に出たり、太古の神ともさこしめしぬれど中古より穢に准へたり、鹿を穢惡の物と宣ひしは世記に見ゆ、神道臆説に穢なしといふは非

なり、

しはさださはしぬらん。〔毛吹草〕

蛇の道は反鼻か知る。〔毛吹草〕〔世語類〕

蛇は一寸より其貌を知り、人は一言にて其志はしらるる、

〔活板會我物語〕に蛇は一寸を出して其大小を知り、人は一言を以て其賢愚をしる、〔傳言集〕

蛇は一寸より大海をしる。〔毛吹草〕

蛇が蚊を香たやふ。〔傳言集〕

蛇の目をわくであらつたやう。〔全〕

蛇が出さうで蚊も出ぬ。〔全〕

蛇は生れなからにして香氣あり。

信なき龜は甲をわる。〔蓋葉抄〕全之

〔一切有部根本、毘奈耶律〕に云、過去世に、釋迦如來と提婆達多、一所に相ひ生れ給ひき、釋迦は雁に生れ、達多是龜となれり、舊好年久し、或時早魃にして、此の龜の潜む池水盡く涸れたり、龜是を歎くに、雁言ふ我れ木の枝を含む可し、龜汝は之を啗て放つ可からず、我れ

枝を含み飛んで、水の豊かなる所に移らん、必ず口を開く可からずと、堅く約すれば、龜は其意を領し、雁の教に従ふ、既にして飛へるに、偶々人あり、是を見て笑ふこと限りなし、龜是を以て、彼の銜へたる枝を放ちければ、爲めに落ちて、甲破れ遂に死せりと見へたり、是れ信なき龜は甲をわると云へる始めなる可し、〔世説故事苑〕

信われは徳あり〔毛吹草〕

〔浦上論〕かくれたる信あれば、あらはるゝ徳ありとは、かゝる事をや申すへき

信徳入かはり〔俳言集覽〕

信心も徳のあまり〔全〕

信は莊嚴より起る〔毛吹草〕同之

〔筆晴〕云、或問、浮屠氏以身爲旅泊、何必殫盡金朱華耀土木、曰小人性貪、非窮極奢侈無以起其信心、俗に阿彌陀も錢ほど光るといふもこれに似し、〔本朝俳諧〕○〔愚按〕〔略賢王か帝京篇詩〕に、不觀皇居壯、安知天子尊といへるも此意なり、

信濃者の大飯食ひ〔俳言集覽〕

信濃盛〔全〕〔飯の高盛を云ふ〕

七尺去て師の影をふまず

此諺佛書に出たり、當に七尺去らず、師の影をふまずと云ふべし、〔善見論〕に云、弟子從師行、不得違師七尺、〔沙彌威儀經〕云、弟子從師行、不得以足踏師影、〔釋尊〕

七人の子

子を多く持てるをいふ、〔盛衰記卷一〕日本國には、男子七人あるをば、長者と申事なれば、人多く羨みけり、〔皇朝古塵〕

七人の子は持つとも女に心ゆるすな〔全〕

〔愚按〕此諺は太閤秀吉公の遺訓より起りたるものにて、軍事又は政務の機密をば、婦女に打明かすまじきを言ひたるものなるべし、な之部七の子云々の條下參看すべし、

七月のわかれ鳥

〔和訓栞〕に、七月のわかれ鳥といふは、春雛を生て、其雛長して後は反哺して、七月には必他所にわかれ去るものなりとぞ、是孝鳥なり、〔俳言集覽〕

七難九厄〔全〕

七艘船のやうな面

しノ部

長崎の諺と、是は昔長崎へ、唐蘭の舶多く湊ひしに、一とせ只七艘着たりし事あり、長崎甚
困窮して、人々の面不人相なりし故に、不人相の者を七艘船といふ、〔全〕
七・天・狗・を・は・た・ら・く・又・ツ・ッ・テ・ン・ゴ・ウ・働・く・と・も・八・天・狗・と・も・云・ふ・〔全〕
七・福・神・

狩野家の畫にかけるは、ゑびす、大黒天、毘沙門天、辨才天、壽老人、布袋和尚、福祿壽、
是を福神とす、大阪の寶船にかけるは、事代主命(ゑびす)大己貴命(大黒天)伊弉久島明神
(辨才天) ○〔嬉遊笑覽〕に、仁王經に七福即生七難即滅と云文あり、七神神もそれより出た
らんと云こと、余か七福神考に已にいへりとあり、〔全〕
七・里・けん・ばい・〔カナ、ホシ〕

〔異本下養狂歌集〕七里けん梅花によきよ春の風愚按俗に七里見敗と書けり西教寺朝音曰、
七里結界、出安宅神咒經〔全〕○〔南留別志〕七里けんばい又けんばいをふるなど云見敗なり、見
敗見敗家と云咒文あり、惡魔を拂ひ遠さくる文也、

杓子定規〔毛吹草、和漢古語〕〔漢韻のこゝへ〕同之
〔用捨箱〕に云、鍋取杓子と云物の圖あり、解に云、此圖の杓子の柄いたく曲れり、案するに

昔は皆かくの如くなりし故杓子定規の諺あるなるへし、此古製、百餘年前までは、江州多賀
社より守に出す杓子のみは、残りありしとおぼしく、尤の草紙、曲れる物の品々の條に大工
のかねや、藏のかぎ、檢物屋の仕事、なへのつる、おたがじやくしと、並へ出せり、

- 杓子で腹切る〔俳言集覽〕
- 杓子馬も主がつかへはあらく〔全〕
- 杓子で招かるゝと三年の内は死ぬ〔全〕
- 杓子で辛を感るやう〔全〕
- 杓子は耳かきにならぬ
- 白河夜船〔毛吹草、和漢古語〕
- 白紙も信仰又白紙も信心から〔俳言集覽〕
- 白水を流す

〔穢譯名義集〕輔行曰、昔有長者名曰鳩留不信因果與五百俱行、遠見叢樹想是居家、到彼唯見
樹神作禮曰、説己飢渴神則攀手五指自然出於飲食、甘美難言、食訖大哭、神問其故、答曰、
有五百伴亦大飢渴、神令呼來如前與食衆人皆飽、長者問曰何福所致、答曰、我本伽葉佛、時

し、ノ部

極貧於城門外磨鏡、每有沙門乞食、常以此指示分衛處及佛精舍、如是非一壽終生此、長者大

悟、日飯八千僧、淘米汁流出城外可以乘船〔全〕
白犬に咬れて灰のたれかすにおづる〔全〕 ○(白犬を黒犬ともいふ、く之部參看)

白歯齒を見せぬ〔全〕
下として上をはからふ事なかれ〔毛吹草〕同之

〔論語〕子曰、不在其位不謀其政、諺此に出たり〔蘇草〕

下々を土に取立てぬもの〔俳言集〕引北條時分詠

下地は好なり御意よし又藝はぬさなり御意はよしとも云〔全〕

下腹に毛がない〔全〕

下手に組む(相模より出たる語)

獅子奮迅のいさはひ

〔法華經〕諸佛師子奮迅之力〔大般若經〕如師子王自在奮迅〔祖庭事苑〕云、奮迅振毛羽貌、予
思皇極經世云、雷奮迅而出、傳燈錄云、龍奮迅三昧、以此說考之不可言振毛羽之貌〔本朝
傳記〕

獅子身中の蟲

〔仁王經〕乃是住持護三寶者、轉更滅破三寶、如師子身中虫自食師子、非外道也〔梵網經〕如師
子身中蟲自食師子肉〔法苑珠林〕引〔蓮華面經〕云、譬如師子身肉所有衆生、不敢食彼、師子身自
生諸蟲、自啖食師子之肉、〔佛祖通載〕云、不丁義者、互不相許如師子身虫、全○〔下學集〕
喻人自損其身也、言師子雖已死、百獸尚畏其威、不能食其肉故身中生虫、自食其肉也、見仁
王經
獅子は子を谷へ落して其勢を見る

〔太平記十六卷〕楠公訣別の條に云、獅子子を産て三日を経る時數千丈の石壁より是を擲く、其
子獅子機分われは教へざるに、中より跳返りて、死するを得すといへり、況や汝已に十歳に
餘りぬ、一言耳に留まらば我教誡に違ふ事なかれ云云、〔世言集〕
獅子も頭のつかひから 全
獅子王狐を捕るに虎を捕るの勢ひを以てす

〔石橋謠〕獅子は小虫を食はんとて先づ勢をなす〔全〕
仕合は袖つまにつかず

〔狂言記西〕西番口のうら／＼仕合と云て、袖つまにうつてふるものはなし。〔全〕

仕合橋なくて渡りがならず。〔全引森寺山書〕

仕上が肝腎

仕事は神田で御飯は越後

仕事幽霊飯辨慶 ○仕事幽霊飯辨慶其癖夏疲寒細りたまに肥れは腫病

借金の山をつく

〔鶉衣〕借物の辨に、今の世の人借金の山なして云々、〔俳言集〕

借金を質にたく。〔全〕

〔兔園小説〕竊鬼に、近世江戸牛天神の社のほとりに、貧乏神の禿倉ありけり云云、何物のし

わざにや有けん、其神體を盗取て禿倉のみ残りりと、四方赤に見へたり云云、貧乏神を盗み

しはいかなる心にやありけん、借金を質におくといふ諺と、佳對なり笑ふへし、

借金の淵にはまる。〔全〕

借金脱。〔全〕

借金首丈け。〔全〕

正直のかうへに神やどる。○神は正直の頭にやどりたもふ。〔加之部書〕

〔倭姫世記〕云、日月雖照六合須照正直頂、此語即出所なり〔曹昭東征賦〕云、人好正直而不回

兮、精誠通於神明。〔本朝傳〕

正直は一旦の依怙に非といへども終には日月の憐みを受く。〔世語集〕

正直正法

正法に奇特なし。

フシギ

〔資治通鑑綱目〕貞觀中有僧自西域來、善呪術能令人立死、後呪之便蘇、太宗擇飛騎中壯者試之、皆如其言因以聞傅奕、奕曰、此邪術也、臣聞邪不干正請使呪臣必不能行、帝命僧呪奕、奕初無所覺、須臾僧忽僵仆、若爲物所擊遂不復蘇。〔瑯邪代醉編〕宋陳仲微爲莆田尉、甌山浮屠與郡學爭水利不決、仲微按法曲在浮屠、他日浴檄過寺、其徒文揭其事以爲問、旦暮呪詛、仲微見之曰、吾何心哉、吾何心哉、質明首僧無疾而死、夫以曲在己之僧而呪無心之仲微、邪不犯

正得死宜矣、此たぐひの事尤も多し。〔本朝傳〕

正五九月はたゞり月。〔琅邪代醉編〕云、宋人以正五九三月、食素誦經、己可笑云云、〔俳言集〕

し、部

舌は福の根

〔老子〕夫舌禍福之門、〔釋草〕

舌三寸の嚼にて五尺の身を損ず。○舌三寸の嚼に五尺の身をはたす。〔毛吹草、和漢古語〕

此諺は、一言輕々しく發すれば、駟馬も追かたきと云ふ意にて、言語を謹むべき戒とせり、

〔釋草〕

○〔童子教〕車以三寸轄遊行千里路、人以三寸舌破損五尺身

舌を二枚につかふ

舌三寸に胸三寸

身代が蒲矛になる。〔傳言集賢引森寺玉山書〕

身代を餅に搗く

身代を棒にふる

身代は火の車

鹽にて淵を埋むが如し

〔毛吹草〕菊「鹽て淵をうづむたぐいか菊の霜」小町踊「冬、霜」鹽てふちをうめし霜夜の氷哉

〔傳言集賢〕

鹽をつくる

俗間からき目を見するといふも亦同し〔丹後風土記〕云天女恨和奈佐老夫、和奈佐老婦曰、無
異荒塩依云荒鹽村、〔心敬僧都佐々女言〕云「ころよりたごうき事にしはじみて入江のはた
てからき世の中」〔本朝傳〕

鹽を撮みて水に入る。〔傳言集賢引元曲通益兒鬼〕

鹽賣も手をなめる。又鹽を賣れば手がからくなる。〔全〕○鹽を賣りても手をなめよ

親しき中に垣をせよ

〔吳草廬省心雜言〕隣里欲高牆、親情欲遠方、〔本朝傳〕

親しき中は遠くせよ。〔傳言集賢引北條時分願書〕

親は泣き寄り。〔毛吹草、和漢古語〕 ○親は泣きより他人は食ひより

〔和漢珍書考〕云、親の泣き他人の食寄と云語は、古來言傳へたりと見えたり、明ノ李青甫望雲
錄卷二肉族以親泣哀喪、他家以陳會酒樂と書たり、併此書は近代の書なれば、出所にはあて
かたし、日本の俗語は明代以前より云ふと見えたり、李青甫も古語を望雲錄に書しやしられ
たり、

釋迦に提婆〔毛吹草〕 ○釋迦に提婆太子に守屋〔俳言集覽〕

釋迦に心經〔北條時分醒〕 釋迦に經〔世話錄〕 ○釋迦に説法孔子に語道 又釋迦に心經孔子に論經

〔小町踊春上〕鷺嵯我野にて鳴や鷺釋迦に經〔俳言集覽〕

釋迦の鼻垢はど〔至て少きこと〕〔全〕

しうどの塙ふさがり〔毛吹草〕

舅の酒であひひこをもてなす〔毛吹草、和漢語古〕 しうどの物て友婿もてなす

〔唐話纂要〕云把官路當人情、又云借花供佛、是謔と同意なり〔和漢珍書考〕云、冊府支龜續篇

第二百九十三卷十六 越一に一民あり、吾が舅の喪に過る、渠があひ掣ありけるが、曾て出合

はず、此時舅の哀喪に兩人の掣出合へり、故に舅の喪にて相掣觸と云ふなり、舅の物て相掣

振舞ふとは誤なるべし〔愚按〕此書往々無稽の說あり疑はし

舅の十七見た者がない

舅の門と麥畑はふむほどよい

姑の前の見せをこけ 又夫の前の見せ麻桶とも云〔俳言集覽〕

姑の涙汁〔至少なるをいふ〕〔俳言集覽〕

生者必滅

〔尤之草紙〕まことなるもの品々に、生者必滅の世のありさま云々、是佛書に、生者必滅會者定

離と云ふより出つ、〔法言〕に有生者必有死、

生前の面目〔俳言集覽〕

食をねがはうつはもの

願ふ事ありとも、心に思ふのみにてはせんなしとの事なり、〔盛衰記卷二十二〕食を願はし器

といふ下説の喩あり、君もどうく國々庄々を分け給はり候ふべし、中にも義盛には、日本

國の侍の別當を給はり候へ、〔皇朝古體〕

食に餅をさくらふ〔民のつまみ〕

仁者は愛へず〔毛吹草〕 〔論語の語〕

仁者に敵なし〔全〕 〔孟子の語〕

出、士、犬、畜生〔サムライ〕

此は農工商の三民より、相手に取り難き者をいふ、〔狂言記鹿狩〕出家侍といふていかにも似

やうた物で御ぢやる〔俳言集覽〕

出頭鼻をつく塵頭目をつく〔全〕

支證の出しおくれ〔毛吹草〕 ○證據の出したくれ〔和漢古語〕

支證なき手柄〔全〕

〔熊坂謠〕しせうなき手がら似合はぬ僧のうでだて、さころをかしく思すらん、〔吾吟我集〕

「支證なき手柄をはなす音をころから鐵砲と人の聞らめ」

吝い妨主に檀那がない 又しつこい妨主にも〔俳言集〕

吝ん坊の柿の核〔全〕

二龍のたゝかひ

〔史記〕云、彭越曰、兩龍方闘、又見漢書、〔江談抄〕云、江帥大徳談せられていはく、善相公

三善紀納言紀長口論のとき善相公曰く、オなき博士はわぬしより始まると時に、紀家は秀才な

りこれをもつて思へは、善家はやんごとなきものか、惟宗孝言これを聞て、龍のくひ合はくひ

ふせられたるもまげならず、他の獸は寄つかざるものなりと、此事詳に今昔物語に見えたり、

〔本朝偃蹇〕

二男總領を得たり〔世語彙〕

慈悲は上よりくだる ○慈悲は上から下る福は下から起る〔毛吹草、和漢古語〕

〔顔氏家訓〕云、夫風化自上而行於下者也、自先而施後者也、是以父不慈則子不孝、兄不友則

弟不恭、夫不義則婦不順也、是諺の意に同じ、然れども此事父兄夫に對しては言ふべし、子

弟婦の爲には言ひがたし、〔嚴章〕

慈悲をたればばたれる

〔常語藪〕に良善被人欺、慈悲生患害と云ふに同じ、

自業自得〔俳言集〕

此語佛書に多し〔書大甲中〕天作孽憎可違、自作孽不可逭、と此意なり

自慢高慢馬鹿の中

熟し柿のうみ柿〔俳言集〕

熟し柿のやうに酔ふ〔全〕

溢柿の核深山〔全〕

溢皮がむけぬ〔凡て人の未熟なるを云ふ〕〔全〕

沈めばうかぶ

〔古歌〕「河水に流れながるゝとちがらも身をすてゝころ浮ふ瀬もあれ」〔異本保元物語〕云、爲

朝爲義をいさめて、世間のならひ必ず「様ならず、沈めは浮ふ理あり、〔本朝傳記〕

沈む瀬あれは浮ふ瀬あり〔俚言英覽〕

時節流るゝ如し〔和漢古語〕

しんさむしるを去らず〔毛吹草〕

舍利弗の智慧〔全〕

しな玉とるにも種がなければならず〔全〕

しはざれば喧嘩の基〔世語集〕同之

しはざれば強敵の義歎強は「しひ」の假名なれば「しは」とも活用すべし〔俚言英覽〕

しかてにて水を汲ひ〔毛吹草〕

しうこうが手〔全〕

思案の案の字が百貫する〔全〕

須彌山とたけくらべ

○「富士山と丈くらべ」とも云

是及びなき事に喩ふ〔涅槃經〕云、欲以手爪接須彌山、欲以口齒舐囉囉剛、新六帖に入道左大

辨「つめのうゑに山をはのせてありくとも又あふことはなまかたき哉」〔本朝傳記〕
朱にましはれば赤くなる〔毛吹草〕全

〔家語〕に云、丹之所藏者赤、漆之所藏者黒、是以、君子必慎其所與處、〔野客叢書〕云、近朱

赤、近墨黒、見傳玄太子箴、〔家語〕○〔明心寶鑑〕大公曰、近朱者赤、近墨者黒、近賢者明、

近才者智、近癡者愚、近長者徳、近智者賢、近愚者暗、近佞者諂、近儉者賊、

積善之家には餘慶あり〔毛吹草〕全之

〔易繫辭傳〕云、積善之家必有餘慶、積不善之家必有餘殃、〔全〕

芝蘭の友〔家語〕○家語に出たり〔比之部人は善惡の友によるの條下參看〕

麝香もかげは腦にはいる

〔瑣碎錄〕云、鹿茸、麝香、肉蓯蓉、切不可就鼻聞、蓋有微蟲、〔全〕

職敵〔毛吹草〕同之○商賈は供かたき

〔亢倉子〕云、同道者相愛、同業者相嫉、〔本朝傳記〕○〔素書〕同美相妬、同業相仇、

巡の拳にも外るな〔毛吹草〕同之

拳と皆人悪く心得て、頭を打の拳とす非也、手の内にわつかの物を握りて、片端より列座の

人に施して来る時、慎て一人も残すへからず、若誤て一人も洩さは、其得ざる人怒の心を起して、終には鬪争の端ともなるへき事と云心也、「五雜俎に、中山の君は、一杯の羹より國を亡し、一壺の漿を以て士二人を得、願榮は糸を分つを以て難を免かれ、慶院は糸を慳て禍を取と云へり、此意也、「故事要言」

辛抱の捧か大事〔俳言集覽〕

柴舟の宵こしらへ〔手廻し過たる事〕〔全〕

莊屋と赤猫に油斷すな〔全〕

象棋料簡碁分別 又象棋眼碁分別〔全〕

邪を拒むには邪

〔大平記〕菊池合戦に、邪を禁するにわ邪を以てす、〔全〕

常々よしのはれ着なし ○上々着のはれ着なし

常に佳服をするものは、はれの衣服の用意なきを云〔全〕

しゆつくわいほうこう身をもたす〔毛吹草〕〔和漢古語〕未詳

深淵に臨み薄氷をふむが如し

〔詩小旻〕云、戰々兢々、如臨深淵、如履薄氷、〔聖草〕

精けの中の粗〔俳言集覽引藤寺玉山抄〕

壽命三寸樂四寸〔枕を作る法〕〔俳言集覽〕

蝨の皮を捨て剃ぐやう〔全〕

秀歌返事なし〔同引〕〔砂石集五〕十訓抄十二

書物學問一失火物識學問一疫病〔俳言集覽〕

磁石鐵を吸へども石を吸はず

〔淮南子〕云、若以磁石之能連鐵也、而求其引瓦則難、〔本朝俳言〕

神力業力にかなはず〔俳言集覽引爲感知物語〕

是は自ら不善を爲しつゝ、幸福を神に祈るとも感應なきを云、又人乗ければ天に勝の意なり、

日月は地に際ちす

〔盲沙汰論〕世は末に及ぶといへども、日月は地に落給まはず、水はさかさまに流ることな

し、〔俳言集覽〕

蜆貝で海を測る (漢書以蠶測海) [全]
しんんのものうさは蘇一手

〔續狂言記三岡大夫〕したゝ童が手をぶつた、扱も痛やく、誠にしんんものうさは蘇一手を
とるといふが、此事であらうなうく痛い事哉、[全]
したゞり積りて淵となる [世語彙]

〔拾遺集〕元輔我宿の菊の白霧今日毎に幾世積りて淵となるらん
新宅は煤拂ひせず

〔貞丈雜記〕新宅は三年の間煤拂せぬもの也と、俗に云ひ習はず事あり、古よりいひ傳へたる
事也、東鑑卷三十一に云々、[俳言集]

心も戀もない、又性も戀もない [全引續無名抄]
常命六十

〔身のかたみ〕夫人間のありさま、常命むろちと侍るに、ことしも過はへりぬ、[俳言集]
娑婆で見た彌治郎

誠人を知らぬ人のやうにするを云ふ、娑婆で見た喜太八ともいふ〔江戸廣小路〕「娑婆で見た

彌次郎が松に一時雨」[全]

沙彌から長老になられぬ [世語彙] ○沙彌を経て長老に至る [俳言集]

舍利が甲になるまで [俳言集]

殊勝なる狂言にかしき談義 [全]

汗くひ看經唐がらし熱湯順禮長左衛門

のどかに永き諭へ、轉して馬鹿くしき事にもいへり、又汗吸看經親孝行長いかたまたの長左

衛門、越後の諺なりと聞けり、[全]

尺八はどのよだれ [毛吹草]

握々は血を惜む、又狸々は血を惜む日本の武士は名を惜む (に之部参看)

聖天の煮こりのやう

聖天を祈るるは、其像を油にて煮るより出つといへり、
助泥がわりこ

人をうつけにしたる事なり、〔古本今昔物語卷二十八〕九條此に依て助泥か破子と云事はいふ
なり、此故事今昔にくはし、禪林寺上座助泥か滑稽なる僧にて、破子の數をわざと違へて僧

正を欺きし事也、〔皇朝古語〕

初一念

詩を作るより田を作れ

〔齊民要術〕諺云、智如禹湯不如常耕

◎ひ之部

人は一代名は末代〔毛吹草〕同之

〔白氏文集〕詩云、遺文三十軸、軸々金玉聲、龍門原上土、埋骨不埋名、〔歐陽公本論〕云、同乎萬物生死、而復歸於無物者、暫聚之形、不與萬物共盡、而卓然不朽者、後世之名、〔本朝文粹〕云、夫形者百年之旅館也、名者萬代之嘉賓也、〔隱草〕

人は死て名を留め虎は死て毛を留む、又人は名を惜み虎は毛を惜む

〔埤雅〕云、語曰、人死留名、豹死留皮、故君子疾沒世而名不稱焉、〔全〕

人の故を見て我身をれも、○人の上にて我身を思へ〔毛吹草〕

〔論語〕云、見賢思齊焉、見不賢而內自省也、諺ここに本つけるなるへし〔全〕
人の振見て我か振なはせ〔淺淵のしるへ〕

〔論語〕三人行必有我師焉、擇其善者而從之、其不善者而改之〔明心寶鑑〕云、性理云、見人之善而尋己之善、見人之惡而尋己之惡、如此方是有益、古歌に「はつかしき人の振見て我よりをうつす鏡のかけとしれかし」
人を鏡とせよ

〔墨子〕云、君子不鏡於水、而鏡于人、鏡於水則見容之面、鏡於人則知其吉凶、〔唐書〕云、魏徵薨、太宗臨朝歎曰、以銅爲鑑可正衣冠、以古爲鑑可知興替、以人爲鑑可明得失、朕常保此三鑑、內防己過、今魏徵逝、一鑑亡候、〔隱草〕○古歌「よき人に向へはわれど身をはちて人こそ人の鏡也けれ」

人至てかしてければ友なし〔毛吹草〕同之

〔家語〕水至清即無魚、人至察則無徒、〔全〕

人に一癖 ○人に人癖、馬に馬癖、

〔晉書〕云、王濟有馬癖、和嶠有錢癖、杜預有左傳癖、又王福時は兒を譽る癖あり、黃魯直に香癖あり、李愷に地癖あり、李涉に竹の癖ありしと云、慈鎮の歌に「人ごとに一のくせはあゝるものを我にはゆるせしき島の道」〔隱草〕

人に舞はさるゝ

〔史記封禪書〕註云、秦皇漢武爲諸燕遊恠之士、舞弄之、若偶然、諺の意に同じ、偶は人形の事也、〔全〕

人は善惡の友による

〔家語〕云、與善人居、如入芝蘭之室、久而不聞其香、即與之化矣、與不善人居、如入鮑魚之肆、久而不聞其臭、亦與之化矣、是以、君子謹其所與處、〔全〕

人事いは目代たけ ○人こといはむしろしけ〔毛吹草〕

〔龍城録〕云、俗諺云、白日無談人、談人則害生、昏夜無談鬼、談鬼則恠至、〔毛吹草〕
人食ひ馬にも合口〔毛吹草〕同之

是は馬の蹄嚙なるも、能之に馴る者あり、放逸無道の人といへども、能く其氣に合ふ者あるに喩へたり、〔呂氏春秋〕云、人有臭者、其親戚兄弟妾妾無能與焉、自苦而居海上、人有悅其臭者、晝夜隨而不去、これ異言同旨の譚なり、〔全〕
人の口をろろし

〔國語〕云、諺云、衆心成城、衆口鑠金、〔史記鄒陽傳〕云、衆口鑠金、積毀鎖骨、〔荀子〕云、

傷人言甚於矛戟、况形紙筆乎、〔夫木集〕後京極「世の中は虎狼も何ならず人の口こそ猶まざりけれ」〔全〕

人の情は世にある時

〔菅家御集〕に友と云題にて「おはれわがうき今までの友なき人のなきさは世にありしはど」〔杜子美詩〕貧交行、飜手作雲覆手雨、紛々輕薄何須數、君不見管鮑鮑賈時交、此道今人棄如土、〔本朝體〕○〔和訓栞〕云、世にあるは世に用ゐらるゝを云世さかりなといへり
人の口に甘ければわが口にも甘し

〔性靈集〕諺云、奴口甘郎舌甜、〔全〕
人をのろは穴ふたつはれ

〔法華經普門品〕云、呪詛諸毒藥、所欲害身者、念彼觀音力、還着於本人、古歌に「おしかれど人をはいし難波かた我身のどかにかへるしらなみ」つみもなき人をうけべはわすれどさおのか上にそおふといふなる」〔全〕
人になる

〔文選〕云、成人不自在自在不成人〔性理大全〕云、朱子曰、聖人千言萬語、只是要教人做

人、古歌に「人となり人とならばやとそおもふらさずば終に墨こめの袖」〔全〕○古歌「神といひ佛といふもたのますに只善人になるよしもがな」又「人多き人の中にも人ぞなき人となれ人となせ人」
人つく牛をば角をきる全

〔徒然草〕人つく牛は角をきり、人くふ馬は耳をきりて其しるしとす律の戒なり、しるしをつけずして人をやぶりぬるは主の咎めなり〔野樵〕に引律既牧云、畜産能人者截兩角人を思ふは身をおもふ人をにくむは身をにくむ 偶言集覽 北條時分註也

〔家語〕愛人者則人愛之、惡人者則人惡之、人かたきはとらぬころよけれ

人にはにくまれぬがよしと云ふ事なり、〔榮花物語〕花山うめつるをねきて、此女御のわたまはんを、世人いかにいひ思ふへからんと、人かたきはとらぬこそよけれなど、ねはしつゝ致したまへは、〔皇朝古語〕

人の事は目に見ゆる〔毛吹草〕○人の事は目に見ゆる我身の事は人に問へ〔偶言集覽〕〔中論〕見人而不自見者謂之朦聞人而不自聞者謂之聵、慮人而不自慮者謂之瞽、

人は盗人火は焼亡〔全〕〔和漢古語〕故事要言

人性は善なりといへども、又欲心なき者少し、火は日用必需の物なれども、油断すれば焼亡の虞あり、故に對比して要慎すべきをいふなり、易の大傳にも、愾藏誨盜といへり、人ははて〔全〕○人は人はて

人は終焉が大事なり、棺を蓋ふて事定まる所以なり、人のいけん餅をつく〔民のたまご〕人の虚言は吾が虚言

人の語りたればとて、人中に差出て吾知顔に語る事勿れとの心なり、古の君子愛を以て三思一言の教あり云々、〔故事要言〕人の善惡は友による

人生れ落より賢人なる者なし、其幼稚の時より馴る所に随ひて、貴賤賢愚の階分るゝものなり、喻へて云はんに、蛙の子の、初手足を具して、稍飛ふことを得て、各東西に別れ住むなり、皆其住止まる所に依て色を易ふ、或は草村に止まるものは其色青く、黄土に止まるものは黄なり、是俗に云赤蛙なり、朽たる木の空、又は人の屋の邊に止まるものは、黒き點を生

して其色朽たる楯に似たり、此色を求めて、此虫の住止まるにあらす、住事を知りて色又自來れるに非されども、皆是自然の化にして、吾知らず馴るに隨ひて化せらる、虫の上をさへ遁外るゝの理なし、況や人心をや、假にも心を放にし悪人を友とせされのこゝろなり〔全〕

人には添ふて見よ〔毛吹草〕同之 ○人にはろふて見よ馬には騎て見よ〔和漢古語〕
人の賢愚正邪を知らんとならば、先づ其人に昵ひて、其行跡を見よとなり、彼の孔子の言にも、其人を知らずんは其友とする所を觀よ、其君を知らずんは其使ふ所を觀よとなり、是亦其善には従ふへく、惡には遠さかるへしとどの心なり〔全〕

○〔家語〕俚語云、相人以居、相馬以與、
人の親は子ゆゑのやみにまよふ〔尤之双紙〕
人の目は九分十分

人の見る所大方違はざる意、〔初音草嘶大鑑〕小僧か云いつれ人の目は九分十分でござる、長老様も左様ねつしやりますといふた、〔難波都維形〕人の目は九分十分、八助の思ひ入もこちどうも同じ事云云、〔俚言集覽〕
人の目は天につく

〔實語教〕云、人眼着天勿隱犯用、
人の心は九分か十分〔俚言集覽引極草〕

〔曲禮〕云、敖不可長、欲不可從、志不可滿、樂不可極、と諺此意なり、
人の思はく一言にて知る〔世語集〕

〔論語〕子貢曰、君子一言以爲知、一言以爲不知、言不可不慎也、
人の願は天従ふ

〔萬葉集五〕山上臆良沈痾自哀文、人願天従、如有實者、仰願願除此病願得如平〔俚言集覽〕
人の過ち我か仕合〔全〕
人の太刀て高名する〔全〕
人のふんどして角力をとる〔全〕
人の口にある〔人口に膾炙するをいふ〕〔全〕
人の口のはにかゝる 又人の口のはにのる

〔荒木田守武世中百首〕「虎にのり片破舟にのるとても人の口齒にのるな世の中」〔全〕
人の口に舌は立てらぬ

〔小町踊〕春上、梅、「風の口に戸や立られぬ宿の梅」〔兼吉全〕

人の噂をいへは鴨の味がする〔全〕

人の命は醫者の手習ひ〔全〕

人の長は二十五の曉までのびる〔全〕

人の一寸我が一尺 又人の一寸は見ゆれど我が一尺は見えぬ、

〔蓋管録〕云、里語云、見他短一寸、不知己短一尺〔全〕

人の十難より我が一難〔全〕

人のなさけは身の仇、人のつらさは身の寶〔全引北條時分語〕

人の事言はんよりひぢあか落とせ〔淡瀬のしるべ〕

人のわるきは我がわるきなり〔全〕

〔常言道〕云、論人我當思、人即我、我即人、

人の噂も七十五日

人の桃灯で明りを取る

人の財布で鰐口をならす

人の疝氣を頭痛に病む
人の弓を引くな

〔無門關〕云、勿挽他弓、勿乘他馬、勿辨他非勿知他業、

人は蔭が本〔俳言集引北條時分語〕人は蔭が大事

人は見目より只心〔俳言集〕

人は人我は我

〔孟子〕に柳下惠をいふ、爾爲爾我爲我、雖袒裋褌於我傍、爾惡汚我乎、〔俳言集〕

人は情の下になつ〔全〕○人はなさけの下にすむ

人は心が百貫目〔全〕

人はわるかれ我よかれ後生大事や金はしや死でも命のわるやふに〔全〕

人は人中田は田中

人は言はぬがわれいふな、

人は武士花は櫻

人は神の御末

人は萬物の靈〔尚書泰誓上の語より出づ〕

人は見かけによらぬもの

人を見る目から血がたる〔世語述〕

人を待つな待たるゝ〔世言集〕○人に待たるゝとも待つ身になるな

人を使ふはつかわるゝ又人をつかふは苦をつかふ〔全〕

人を馬鹿にする 又人を空気にしたとも

〔遊仙冠〕云、自隱多慾則欺他獨自服、注輕凌慢於人則斯也、〔全〕

人を壁にする〔全〕

人を人臭いとも思はぬ 又人を人とも思はぬ〔全〕

人と契らば能く見てかたれ〔全引北條時分殿〕

人と屏風はすぐには立たず〔世言集〕

○古今著聞集に云、爲輔右大將藤原定方孫朝頼ノ子 中納言口傳にかゝれて侍るなるは、人は屏風のやうな

るべきなり、屏風はうるはしう、ひきのべつれば、たふるゝなり、ひだをとりてたつれば、

たふるゝ事なし、人のあまりにうるはしくなりぬれば、えたもたし、屏風のやうに、ひだあ

るやうなれば、實うるはしきかたもつなりと侍るとかや、〔劔向世説〕云、宋世爲之語曰、

王光祿如屏風屈曲從俗、能蔽風露、

人と入物是有合せ

人をたすけるは出家の役

人に剛臆なく氣に進退あり

〔太平記廿九藥師寺公義遁世事〕人に剛臆なく氣に進退ありと申事の候間云云、〔全〕

人に貸すな傘 又させはせ傘、壁に立てな傘、人に貸すな傘、

〔萬葉集〕「雨零者蓋將跡念者笠乃山、人爾莫合蓋零者漬跡裳」〔全〕

人に人鬼は無い〔全〕

人に高下なし心に高下あり

〔學友抄〕故人無高下、唯心有高下、〔全〕

人木石にあらず

〔文選鮑昭詩〕人非木石豈無感、〔論衡儒增〕人之筋骨、非木非石、不能不解〔全〕

人増せば水増す〔全〕

人ある中に人なし

〔古歌〕「人多き人の中にも人そなき人になれ人人になせ人」〔全〕
人橋をかける〔毛吹草〕

〔吾吟我集〕寄橋戀「思ひ川へたてゝころはしきなみに人橋かけて戀渡りぬる」
人噛み馬に騎たやう

〔五代史〕郭崇韜傳、俚語云、騎虎者勢不得下、〔俚言集覽〕

人取る龜は人に取らるゝ〔全〕
人生れて三國にてはつる

〔活版會我物語〕人生れて三國にてはつるとは理なり我生るゝ所は伊豆の國でたつ所は相摸
國最期の所は駿河の富士のすろ野の露ときえなんふしぎさよ〔孟子〕曰、舜生於諸馮遷於負
夏卒於鳴條東夷之人也、〔全〕

百日のひでりにはわかぬを一日の雨には飽く ○百日のてりにはわかで一日の洪水にあく〔民の
かまひ〕〔田家五行〕云、千日晴不厭、一日雨便厭、〔本朝俚語〕

百日に百杯は盛れども一日には盛れぬ〔毛吹草〕

百日の説法屁ひとつ

百貫の馬にもたり〔毛吹草〕〔世話話〕

〔和名抄〕たう驚をよめり馬脚屈重也とあり馬病なり

百貫の鷹も放さねはしれぬ〔俚言集覽〕逸物の鷹も放さねはとらす〔全引縁寺玉山書〕

百貫のかたに笠一蓋〔全〕

百鬼夜行〔宇治拾遺齋廣隆寺牛祭文〕

〔下學集〕に節分夜也〔寶物集〕に、九條右大臣師輔は、百鬼夜行にゆきわひ、三條大將光行は、
若君の時、神泉苑にて、かの百鬼夜行にわひたまふ、〔全〕

百八煩腦

〔撈海一得〕謠に、百八煩惱の夢をさますと云事わり、〔宋洪邁俗考〕云、鐘聲一百八撞、以應

十二月二十四氣七十二候、〔全〕

百足の虫は死してたふれず

〔續日本紀〕辛卯詔、百足之虫乃至死不顛、事波輔多乎美止奈母聞食、〔墨子〕に、百足之蟲三斷
不蹶、〔全〕

百になつて百事を覺える〔全〕

百になるうばもかふてははてじ〔毛吹草〕

百里の道は九十里が半

〔戰國策〕云、行百里者、半九十里、此言末路之難、〔俳言集覽〕

百里の道も一足から〔全〕

〔老子〕云千里之行始於足下

百様を知るとも一樣を争ふ事なかれ

〔毛吹草〕〔和漢古語〕〔世語集〕

〇「百様を知て一樣をしらすは争ふ事なかれ」とも云〔俳言集覽〕

百出して天窓をはる

〔木食楚仙獨吟紹巴評〕うしろみの慢するつらはうたてしな、別の子細なしシロ百出してわたまはりたし〔全〕

百官ぶらり

〔全〕

是は用にも立ざる、古器古書を買集めて、娛む者の愚を笑ふの詞とす、此語の始は、五雜俎

に云、南燕の慕容徳、知たりし時、妖賊あり、王始と名つく、帝位を羨て、衆を大刀山の菜

燕谷に聚めて 百官を猥に授け、自號して太平皇帝と稱し、父を太上皇と云、兄二人を征東

將軍、征西將軍と呼ひしも、容徳之を追討し、捕へて馬市に斬る、殘黨は逃れて、元の賊

徒となり、百官の名は、中にふらりと云心より、云ひしもの也、〔故事要言〕

百歳の童

〔恩地左近太郎開書〕に、百歳の童とやらんの如く、年たけても愚なるあり、十歳の翁とやら

ん、幼より賢さあり、〔俳言集覽〕

百姓讀

字音を邊傍にて讀むを云「ツクリ」に従ふと云事也〔全〕

百姓の雁を押えたやう〔全〕〇百姓の人を切たやう

百て買った馬のやう

〔海録碎事〕襄陽耆舊傳、南陽太守張忠曰、吾年往志盡、譬如八百錢馬、生死同價、〔全〕

百病は氣から起る

百石三人泣きぐらし

徳川氏の制、士分録高百石は、玄米百俵即四十石なり

百聞一見に如かず

五百七十四

〔漢書趙充國傳〕云、百聞不如一見〔陳書蕭摩訶傳〕侯安都曰、卿曉勇有名、百聞不如一見百姓の去年物がたり〔毛吹草、和漢古語〕百年もなじんだ狗兒のやう〔俳言集覽〕百物語

鬼神の話といふ〔東里新談〕俗に百物語といふ事わり中華にもありし事なり、柳宗元が龍城録に、君晦嘗夜坐、退之與余三人談鬼神變化、時風雪寒甚、窓外點々火明若流螢、須臾千萬點不可數度、頃入室中或爲圓鏡、飛度往來乍離乍合、變爲大聲而去、謔曰、白晝其談人、談人則害生、昏夜無談鬼談鬼則怪至と、是百物語の出處也、愚案百物語の出處ともいひかたし、此はふと鬼神の變化を談し出したる也、鬼神を談する事とてあるにはあらず〔全〕貧は諸道の妨げ

〔活版會我物語〕、「源太には思ひかへられしと、身ひとつのやうにたれもひける、貧は諸道のさまたけとは、面白かりける言葉かな」、〔竹齋物語〕に、貧は諸道のさまたけ、阿彌陀も錢はと光る故なり〔全〕

貧の竊みに戀の歌〔和漢古語〕同上句〔毛吹草、和漢古語〕同

〔潜夫論〕云、禮義生於富足、盜竊起於貧窮、〔唐話纂要〕飽煖思淫慾、饑寒起盜心、〔徒然草〕人きはまりてぬすみす〔犬子集〕「貧の盗人腹下すらん」と云句に「わまりた、戀の歌しきたべすきて」〔俳言集覽〕〔野語述説〕云、人於色不能無思、其及思之、寤寐反側不忘之、則發之言爲和歌也、此是上古之朴質而感物所動、所以爲自然之文也、後世設淫奔之品題作和歌、皆無用之閑言、長淫導奸者也、

貧は病より苦し ○四百四病より貧の苦しみ

〔文選〕曹顔遠感舊詩云、富貴他人合、貧賤親戚離、〔和漢古語〕貧すれば鈍する〔淺瀬のしるへ〕同之

〔朝野僉載〕云、人貧智短、馬疲毛長、〔唐話纂要〕云、人貧智短、福至心靈、〔俳言集覽〕貧は詔ふ 野語述説 ○富ては驕り貧さは詔ふ

〔論語〕貧而無詔、富而無驕何如、貧は菩提の種富は輪廻の絆

〔一言芳談〕に、「貧は菩提の種、日々に佛道に進む、富は輪廻の絆、夜々に惡業を増、〔俳言集覽〕

貧は世界の福の神〔町人義〕
貧の樂は寢樂

〔紅梅千句〕寢樂にはれろはれましや小夜枕〔政信〔俳言集〕〕
貧乏性

萬事不幸なる者を貧乏性と名く〔太上感應編圖說〕に曰、雍某と云者あり、聰明にして多能なれども貧し、人々雍某を嫌ふて之を避く、稱げて耗神と云ふ、或時二人碁を打つを見る、雍某偶負者の傍に坐る、負者曰雍某我が傍に坐はりし故に負たりと、怒て毆て血を流す、一友に遇ひて我が不幸を口説きければ、其友大に笑て酒を飲みけるか、忽ち酒に中られて大病となりぬ、是より増々人雍某を忌む、〔世説故事苑〕

貧乏問なし〔世語盡〕

貧乏の煮る粥はしるくなる〔俳言集〕

貧乏の鳥は盆に淫亂をする〔全〕

貧乏柿の核澤山〔全〕

貧乏人か灰を播けは大風か吹〔全〕

貧乏も三年置けは用に立つ 又福も三年置はとも〔全〕

貧者かなひ難し〔世語盡〕

貧乏竹か福竹か

此は鞭に作る竹節の數をかくいひて數へ、福竹といふ所の節にて截をいふ、福徳貧乏とも數ふるあり、鞭はかりにあらす、物いみ多き人はよくする事也、〔俳言集〕

貧乏神の前立〔全〕

貧女の一燈 又長者の萬燈貧女の一燈〔ち之部參看〕

貧僧のかさねとさ

貧乏子寶

貧乏者の聲高

貧乏園をどる

貧者有徳者苦者樂者〔者字皆獨りよむ〕

日に三たび身をかへり見る〔羅草〕〔毛吹草に省みよ〕

〔論語〕會子曰、吾日三省吾身、諺是に出り

日暮て道をいそぐ〔毛吹草〕〔和漢古歌〕

日暮て道遠し〔和漢古歌〕同之

〔史記〕伍子胥曰、吾日暮途遠、故倒行逆施之、〔白居易傳〕云、日暮道遠、吾生已蹉跎、〔雜草〕

日暮の歌念佛〔民のまこと〕

日暮と大晦日はいつもいろかし〔世話書〕

日照の高木履〔全〕

日濟を借て留守をつかふ〔俳言集覽〕

日なたひきの辻番〔全〕

日方の宵よわり

〔倭訓栞〕ヒカタ萬葉集に日方吹といへるは、申酉の風をいふ、蝦夷にても然いへり、夕日の空

に吹を船人の語に日方の宵よわりといふ、晚に其方より吹は強きものながら暮する程に、

必ずよわる也といへり、〔俳言集覽〕

日かげの水も湯になるおもひ〔全〕

日かげの豆もはしけ時 又日かげの豆もはしけ時ははしける〔全〕

日がな一日〔日ひと日と云事整一日即終日也〕〔全〕

火の手を擧る〔全〕

火に入り水に入る

〔中務家集〕よとよにもしはたれつゝたがために火にも水にも入れる心ぞ〔類聚名物考〕

火のはたに子をおくが如し〔和漢古歌〕

火の消えた回り燈籠〔俳言集覽〕

火の消えたやう〔全〕

火水の争

〔梅松論〕に「公家と武家水火の争にて」又「水火の争」と音に云す之部に收む〔全〕

火を水に言ひなす 又火になり水になり〔全〕

火打匣て焼味噌をやく 又火打匣て飯をたく〔全〕

火を吹く力もない〔全〕

一ト村雨のあまやどり〔毛吹草〕

一ト浦遠へは七浦ちがふ〔全〕

- 一ト口物に頬をやく(悪事は一度犯せば後回復しかたきといふ)〔俚言集覽〕
- 一ツ穴の狐(全)
- 一ツ椀の物をくふと中がわるくなる又わひ箸をすると中たがふともいふ〔失敬は狎習より生するをいふ〕〔全〕
- 一ツ鍋の物をくふ
- 一人喧嘩はならぬ

〔傳家寶〕孤掌難鳴、〔俚言集覽〕

獨子は國にはゝかる(世語集)

飛驒の工又飛驒の工和泉の杣〔全〕

〔延喜式〕民部式凡飛驒國、毎年貢工百人云々、

飛驒の工が打つすみなは(尤の草紙)

〔夫木抄〕匠とにかくに神はおもはじひだたくみうつすみなはのたゝひとみちに

飛蛾の火に入るが如し

彼岸過ての麥の肥

春の彼岸過て麥の糞をするは效なく却て害なり養ひも時によるをいふ
彼岸過まで七雪

此はあつさ寒さも彼岸までにはむかへていへるなり〔俚言集覽〕

彼岸太郎八専次郎土用三郎寒四郎〔全〕

〔世事百談〕に云、農家にていふ諺に、彼岸太郎八専次郎土用三郎寒四郎」といふことあり、これは彼岸の節に入り、はじめの日天氣よく、八専は二日め、土用は三日め、寒の入りは四日め、天氣よく晴れて、寒暖も順にれたやかなれば、豊年なりとて、その日の快晴を祈るとかや、宋の孔平仲の談苑に、江南民言、正旦晴、萬の皆不成といへり、これもためし試むるに果してしかり、

引臼のせんのぬけたやう(全)

ひくの山の

祇園會に山はこあり、山はこを出す町に、枝町ありて、年貢をはかる佳例に、其日に當りて持參す、其時酒をもち甚急かしきをもて、すのこんにやくの、ひくのやまのと云とぞ、寄遊柿季吟「しふくりし口舌をひくのやまとかきなるはなりても味のわるがよ」